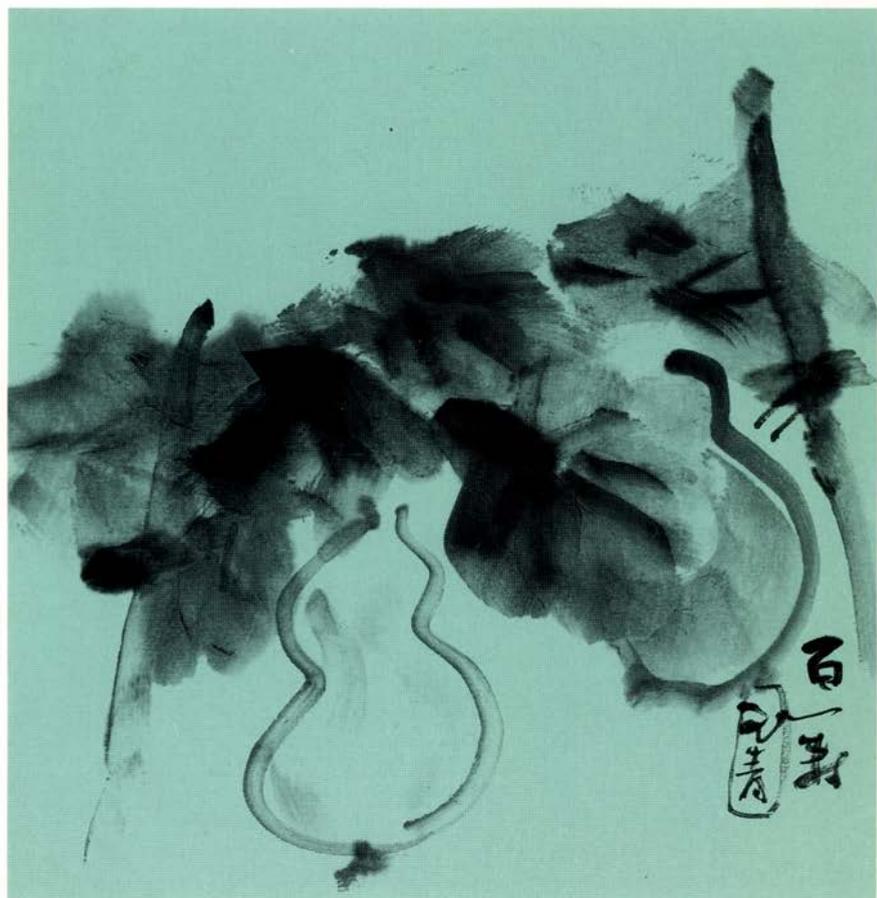


川柳塔

平成十六年十月一日発行 毎月一日発行
創刊大正十三年 通卷九二九号



日川協加盟

No. 929

平成十六年度六賞発表

十月号

川柳塔創刊80周年記念川柳大会 第10回 川柳塔まつり

＜同人総会＞

- と き 10月10日(日) 午前10時-11時
 ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F生駒
 (近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車・TEL06・6772・1441)
 議 事 平成15年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
 平成16年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

＜各賞表彰式・記念句会＞

- と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会
 ところ ホテル・アウィーナ大阪 4F金剛
 表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・
 各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。

おはなし 「大阪弁と大阪文化」-地域語を大切にする意味-

『上方芸能』代表・立命館大学教授 木津川 計 氏

- | | | | |
|--------|---------------|-----------|-------------|
| 兼 題 | 「 八 」 | 川 柳 塔 社 | 山 本 義 子 選 |
| | 「 教 える 」 | 川 柳 塔 社 | 高 橋 岳 水 選 |
| | 「 神 」 | 川 柳 塔 社 | 松 本 文 子 選 |
| | 「 ド レ ス 」 | 川 柳 塔 社 | 西 出 楓 楽 選 |
| | 「 や さ し い 」 | 時 の 川 柳 社 | 小 松 原 爽 介 選 |
| | 「 手 品 」 | ふあうすと川柳社 | 泉 比呂史 選 |
| | 「 散 歩 」 | 番傘川柳本社 | 磯 野 いさむ 選 |
| (事前投句) | 「 塔 」(締切りました) | 川 柳 塔 社 | 河 内 天 笑 選 |

◎各題1句・欠席投句拝辞

出句締切 正午・披講午後2時45分(午後4時45分終了予定)

会 費 2000円(記念品呈)当日いただきます

＜懇親宴＞

と き 同 日・同 所 午後5時30分-7時30分

会 費 7000円(会席料理)

宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8000円(朝食付)

○事前投句および懇親宴・宿泊の申し込みは締切りましたが、同人総会(同人のみ)・記念句会の当日参加も歓迎しますので、ふるってご出席下さいますようお願い致します。

主 催 川 柳 塔 社
 後 援 (社)全日本川柳協会

麻生路郎句碑建立55周年記念 第56回西日本川柳大会

河内 天笑

豪華に新築された久米南町文化センターで九月五日に開催される川柳大会を前に、九月四日十七時に弓削駅前の路郎句碑を囲んで献盃の儀式が執り行われた。

俺に似よおれに似るなと子をおもひ

威厳ある句碑はまるでご本人の立像の如くさえ感じられた。濱野奇重会長挨拶のあと町長さんの祝辞、私からの謝辞そして鏡割へとセレモニークが進み参加者に地酒が行き届つて乾杯。句碑にさげとろりと酌ぐようと私も五十五歳の句碑に献盃させていただき約一時間の儀式が終了、前夜祭の会場へと移った。なお、鏡割りの前に長谷川紫光氏より句碑建立当日の様子を記した「川柳雑誌」昭和二十五年十一月号の記事の朗読があり、その日の様子を彷彿とさせてくれた。

出 發

九月十六日零時五十分大阪駅出発の柳人は

緑雨、淡舟、正則、博也と僕の五人。改札がはじまりどやどやとホームへ出たとたん、あつ先生が向ふに居られますと淡舟君の声、一同どつと歓声を上げて和やかに乗車。今日には特に梨里さんが美しくて晴れやかだ。小松園氏が居ないのでちと淋しい。夕闇迫る頃岡山に着き、浜田久米雄、満年、娛句楽の諸氏に迎へられて弓削行に乗かへた。支線の汽車はがったんごとん、豆秋氏「これほんまに汽車に乗った気分が出るな」「そやそや」と僕が相槌を打つ。辛党の娛句楽さんが出した甘いまんじゅうを頬張りながら一行は路郎師を囲み川柳町へ向かう。

(土井文蝶記)

大会当日

開会前早くも鳥取の八歩、日満子ら一行が到着、前夜岡山で一泊した生々庵、鮎美、栞、北海諸氏一行は朝の津山線で続々と到着。午前十時には出席者百三十余名、投句八十名で地方大会としては空前の盛況となった。

秋空に浮かぶ句碑

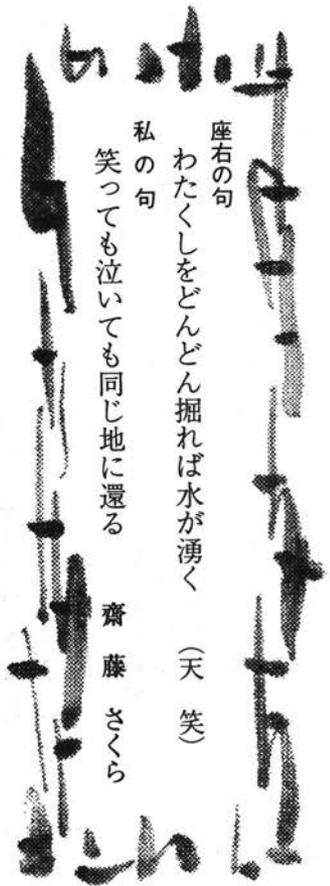
午後四時から除幕式である。神官の祝詞奏上のち弓削平氏令嬢の可愛らしいお手々でさつと白布は取除かれ、くつきりと秋空に句碑は浮かび出した。つづく玉串奉奠は不朽洞

会理事長中島生々庵博士よりはじめられるや大粒の雨がまたポツリポツリと落ちはじめ。それでも路郎師の謝辞があるまで雨空は持ちこたえ、路郎師の終るを待つように篠つく大雨は再び降りしきる。もう一晩弓削へとどまる路郎師は駅長室に入り、次の汽車で帰阪する生々庵をつかまえて、「僕は絶対に雨には遭わんが雨男の君は途中で山崩れに出会わないことを祈るよ。」レインコートを着た生々庵を取巻く連中が、「雨乞いの時は生々庵博士へ電報を打ちます。かくて生々庵一行の乗った汽車が駅をはなれるや、あらら不思議！さしもの雨が急に小降りとなり、列車の遠ざかり行く音とともに青い空が見え出した。路郎師は口笛でも吹きたい面持で「夕立が浄めてくれた道をゆく」と形容したくなるほど軽いステップで宿舎へ向かったのであった。

(藤本満年記)

路郎師の謝辞より

句碑は作家個人を記念するといっただけでなく、川柳を知らない人達も、何かの機会に句碑を見、句碑に彫られた句を読むことによつて文化の道しるべとなる場合も多いであろう。その意味で、句碑の建設は一つの文化運動であらう。



座右の句

わたくしをどンドン掘れば水が湧く (天笑)

私の句

笑つても泣いても同じ地に還る 齋藤 さくら

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 麻生路郎句碑建立55周年記念 第56回西日本川柳大会	河内天笑	(1)
我田引水	川端 一步	(2)
川柳塔 (同人吟)	河内天笑選	(4)
自選集	奥田みつ子選	(57)
水煙抄	路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞	(78)
平成十六年度	茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞	(78)
記念句集「川柳塔」を読んで		
川柳見本帳	岩井三窓	(88)
抒情を継承する人々	波多野五楽庵	(91)
百花繚乱	山本希久子	(93)
愛染帖	波多野五楽庵選	(95)
誹風柳多留二四篇研究		(98)

我田引水

川端 一步

川柳塔創刊八十周年の歴史は、川柳界の金字塔です。第十回川柳塔まつりは、その意味からも格別の意義をもっていると思います。私たちは、名譽主幹が塔誌八二〇号で述べておられる目的を着実に積み重ねてきました。この八十周年の歴史の中に、交通局の先輩がどれだけ参加して、どんな役割をはたしたか、それが知りたい。そう思うともうじつとしておれません。手元にある「川柳雑誌」を繙いたり、図書館へ行って調べたりしました。すると「川柳雑誌」創刊当時、同人二十四名の中に交通局の先輩、橋本一柳子(緑雨)をはじめ五名の名前がありました。聞けば緑雨さんは大番頭でした。

第一回の川柳まつりは、昭和二十九年七月十日に下寺町大覚寺で開催され、百数十名の出席で成功しています。詳細に報じたペンは、北川春葉(交通局病院長)先輩でした。

副理事長・武部香林氏が挨拶をしました。

「現在国民は苦しんでいるのに、国会は大混乱、大乱闘を演じ、民主的でも川柳的でもない、先生は、春の草代議士などに踏まれる

茴香の花	政岡日枝子選	(100)
「副」	田辺正三郎選	(102)
一路集「ちやつかり」	松本文子選	(102)
「生む」	鶴田遠野選	(103)
初歩教室「孫」	三宅保州	(104)
秀句鑑賞「同人吟」	瀬戸まさよ	(106)
水煙抄	石倉美佐子	(108)
閑人閑話 誌上川柳大会考	田中正坊	(109)
■エッセー「へボはへボなりに」	山口光久	(110)
ああ光子さん	宮崎シマ子	(111)
各地柳壇（佳句地十選／平田実男）		(114)
柳界展望		(128)
十月各地句会案内		(130)
■編集後記	楓葉・義子	(132)

座右の句

六道湖の夕日他国で自慢する

(町紅)

私の句

お似合いの夫婦素敵な年を取り

小川 注湖

な」と諷刺されて川柳生活者のよさを見せている」更に「我々はこの世情を、川柳によって批判せんとするもので、身にはボロをまといながらも心の珠を磨きたいと思う」惚れ惚れとする挨拶です。

更に「川柳雑誌」を繰って行くと「交通四方山ばなし」という企画がありました。

出席者は、阪神、水谷鮎美、国鉄、正本水客、京阪、黒川紫香、市電、富岡淡舟、南海友湖貴山。交通マンの座談会です。

話の中で南海の貴山さんが「あれは何時頃だったかな、南海もストライキで、現場のものが全部高野山に上った事があります」と言われています。高野山闘争では、わが市電が大先輩です。大正十三年七月に、大阪市電労働者が劣悪な労働条件の改善を要求して、六日間にわたって二千五百五十人が高野山にろう城した歴史をもっています。奇しくも川柳塔と同じ八十年です。

「過去を思い、現在に働き、未来を楽しむ」という言葉があります。われわれが歴史を語る時、そのグループや個人が、どんな問題にどう携わってきたのか、どういう時代になんを詠んだかが大切ではないでしょうか。

その意味でも「塔誌八十年記念句集」はすばらしい。川柳塔まつりへ最大のプレゼントだと思えます。



河内天笑選

鳥取県 乾 喜与志

白雲を越え人生の富士の山
赤く白く道を支える花の色
身体に比べ頭は軽うなり
我が歳は九十九かいな百かいな
いい話聞かせてもらい手を合わす
天に向き声はりあげて歌うたう

西宮市 西 口 いわゑ

冷静になって自分の非を悟る
真つ白い半紙未踏の山に似る
どんな時も何かに見守られている
観衆に花火は恋を打ち明ける
ひまわりのようにキラッと咲けばいい
裸で生まれそして裸になりきれぬ
涼しげな風鈴売りとタコ焼き屋
日本語が殺風景になってきた
クーラーの効いたお店へ避暑に行く

和歌山市 古久保 和 子

じいちゃんは帽子にタオル隠してる
三百六十度山ですバスは日に二本
銀色の川の流れと朝焼ける

鳥取県 新家 完 司

神々のいくさ以来の殺し合い
賽銭箱大きな鍵が掛けてある
坊さんの顔てかてかと光り過ぎ
おしゃべりは金がなくてもよく喋る
好きなこと銭にならないことばかり
炎天を歩き友の死受け入れる

橿原市 安土 理 恵

道草をしたがる駄馬の足弱る
三段腹ポンと叩いてまかせとき
人の道論す顔にも向き不向き
胸底の鬼も近頃よく眠る
夏の雲語り継がねばならぬこと
泣いて済むことならとうに泣いてます

寝屋川市 平松 かすみ

生も死も申年だった几帳面(柳宏子さんを悼み 6句)

何回も転び不死身と思つたに

背にふれただけで折れるといやがられ

初対面 飴をいただく文化祭(二十五年前)

甘酒でご機嫌だった相撲吟

手先から生まれた鶴をブレゼント

東かがわ市 川崎 ひかり

ライバルにとてもかなわぬ事多し

支え合う人と言う字のあたたかさ

一生で二度の主役は生と死と

もたれてやヘルパー二級もつてます(六十五歳)

生命乞いする間なかつたきのご雲

飢えた過去思い出させる芋のツル

三田市 北野 哲 男

価値観の違いを鼻であしらわれ

つきのないままで長生きしています

的を射た忠告だから腹が立つ

童謡も童話も風化 分校も

いま蛹 婚礼衣装着る準備

糸切り菌残し鬼婆々らしくなり

和歌山市 西山 幸

待つひともなく煎餅が湿りだす

折鶴の翔べない羽を折っている

ゆるせない人を見ている魚拓の眼

爪を切る思い過ごしの今日を切る

騙されておこうよ下手な嘘だから

僻まずにすこし化粧もしてみよう

寝屋川市 森 茜

安定剤の孫がせかせかやつて来る

野良犬になれそうもないペットの目

頬杖の向こう朝顔種宿す

炎天下縞の女 しんと通り過ぎ

相撲枚敷にいつもの人が座っている

威張ってる人に冷たい水をだす

大阪市 岩崎 公 誠

電池切れロボットの鉄五キロ

方言で宥められてるあたたかさ

定年日まぼろしの酒注ぎ注がれ

ふたり居てふたりの話すれ違い

ライバルの自慢ばなしの阿呆らしさ

流行語ネット情報みな浮薄

倉吉市 森 川 あらた

きつかけがなくても挨拶は出来る

わたくしの秘密知らないほうが良い

リラックスするとやさしい顔になる

溜め息を換気扇の真下で吐く

家を買うお金があれば馬を買う

アレルギーあるので外食はしない

唐津市 久保正剣

酒という生きる命の隠し味
産声から棺桶までの丁と半
彩りは日毎に暗い長寿国
点字読む指に心の灯を点す
テロの国人も兇器も砂ぼこり

唐津市 山口高明

神さまも多いほど良いお賽銭
診療の妊婦真つ赤に頬を染め
盗難車信号無視で逃げ回り
巡拝の途中目を灼く曼珠沙華
狸寝もお経称えりや飛び起きる

唐津市 井上勝視

自己責任しつかり増える離婚率
錯覚はいいナ私を鳥にする
何よりもスキンスリップという会話
華やかな通夜にしたいナ百寿逝く
ヨイショなら馴れていますと老婆の酌

唐津市 坂本蜂朗

漢人の技見つっ食う刀削麺
中国酒飲めば日本が遠ざかる
落書の歴史を刻む双塔寺
骨董市毛沢東の像 語録
漢人の売子が迫り来る怖さ

唐津市 宗水笑

落選にきのうの支持者来なくなり
神さまのB面に持つ戦好き
才女より十人並みの歯の笑顔
夏山の喉に至福の岩清水
記者会見 大臣の顔疲れてる

唐津市 市丸晴翠

仏壇の父に暑いとは言えぬ
前頭葉忘れたいことよく覚え
人癒すサプリメントを探してる
老い二人たまのコントで若返り
青春の登山記を読む脚も萎え

唐津市 樋口輝夫

冷かしの客にも開く自動ドア
自慢の絵個性的だと誉めておく
献血の二十歳まぶしい白い腕
片腕と思う男が切れすぎる
曳山囃子響き嬉しき里帰り

熊本市 永田俊子

ずばぬけたことは書けないボールペン
何もかもそこそこしんがり役に慣れ
退くことを知ってた母の処方箋
吊革に下がる情性で生きている
離着陸の時に唱える観音経

熊本県 岩切康子

黙々と水中歩く六十分
アイロン掛けソフトな風が応援す
誕生祝い帰路の運転引き受ける
モグラ一匹博物館が喜んだ
畑から抜いて土産に生ズイキ

熊本県 高野宵草

法師蟬秋の序曲は忙しげに
食欲を連れて来ました彼岸花
日記帳閉じてやれやれ明日の夢
蟻の巣を壊す難民思いつつ
手伝えば夫ちからが強すぎる

東かがわ市 原賢

面倒な話は妻が答えだす
悔しさを流す蛇口を開け放つ
脇道は一本もない母の地図
友が逝き喉の渴きが止まらない
二服十五錠命つないでいる余生

東かがわ市 清川玲子

ことわりもなしに根を張る庭の草
庭ほめるお世辞に鯉も跳ねて見せ
今朝もまたドラマ始まる電話鳴る
星だけに見られてしめた涙顔
幸運は努力の汗についてくる

東かがわ市 神保坊太郎

宿り木になり子の袖にぶらさがる
玉串を捧げて海の扉がひらく
暑いあついと言わねば越せぬこの暑さ
一合の酒で一升の物がたり
被爆の友ドンドン返しなく終る

東かがわ市 池内かおり

シンプルに暮らして捨てる物が無い
言い訳もせず水を飲む頑固者
われ鍋に閉じ蓋はたと膝を打つ
軽い口自分で掘った穴に落ち
ビール缶自分で捨てに行きなさい

松山市 宮尾みのり

味噌作りかびの機嫌をとる残暑
納得がいかず話を蒸し返す
無器用でボクのやさしさ遠回り
嫁という立場で渦の外にいる
人間の海で溺れてから無口

松山市 古手川光

台風の直球カーブ神の手に
子育てに忙しい頃が充実期
相性と言えはすだちと焼き秋刀魚
石ぼんと投げて様子を見てやろう
終章へムチ打つように蝉しぐれ

愛媛県 中居善信

鼻先で笑うおとこを許さない
華やかなひとで男に囲まれる
荒れ狂う海を眺めている失意
焼鳥屋スズメ三匹冷や二合
怨念か猫もおんなも恐ろしい

高知県 赤川菊野

八・一五あの日の風が今日も吹く
夾竹桃悲しい風をつれてくる
望郷の声が聞える十字星
灼熱の砂漠ここにも赤い花
親友と信じた人にしてやられ

高知市 小川てるみ

味噌汁とぬくい御飯のある絆
朝露に元気を貰う夏野菜
はちきれる笑顔が好きと書いてある
少子化は現実孫も一人っ子
四万十の自然満喫屋形船

高知市 北川竹萌

落穂苗わしの盆栽穂が揃う
七転び八起きがかての散歩道
体力を保つ散歩は鳩連れて
クーラーの下でよさこい踊り見る
おしまいかな納涼花火五〇〇〇発

砂川市 大橋政良

ふんざりがつかず立ったり座ったり
父と飲む酒牛飼いの継ぐ話
錆びた釘やがては僕もなるだろう
藁一本搦んで地獄からかえる
この人にこんな見事なかくし芸

弘前市 櫻庭順風

台風の御通りなんて君知るや
すっぽりと屋根吹っ飛ばす風なんて
ヒバ御殿も風の通路に一ころさ
隣組に亀裂を入れてしまう屋根
亀裂をうまく縫っていてこそばゆい

弘前市 福士慕情

虹を抱き所詮は消えるシャボン玉
降りだした雨で狂った休肝日
あの人も逝ってしまった蟬時雨
万札に住所氏名が書いてある
なんとたっておらの祭りは日本一

弘前市 相馬銀波

雨を待つ蛙に続く真夏日だ
応援の日焼け声がれ孫にする
余生かな庭の草刈りする昼寝
小一時間雷雨雷鳴農休日
茄子きゅうり牛馬に父母の迎え火よ

弘前市 高橋 岳水

ネプタ絵が点れば沸騰する津軽

火祭りに魅せられ北の旅続く

端坐して石の声聞く恐山

ははの声たしかに聞いた風の盆

濁らせた語尾に本音をからませる

弘前市 須郷 井蛙

ゴミ袋下げて男は小さくいる

イチローを目差し子供に素振りさせ

携帯にメールも来ない寂しい日

旅三日一週間分飲んでくる

かかえ込む赤字合併はかどらず

弘前市 宮崎 ヒサ子

時間切れこれで諦め付けられる

女の時間あつという間に駆けていく

日々時間惜しいが昼寝欠かせない

シグナルを信じて今日も歯をみがく

シナリオの不備で今宵もずっこける

弘前市 今 愁女

猛暑の夏昼寝二回で持ち堪え

白髪にもショートパンツの暑い夏

太陽に負けじとばかりカンナ燃ゆ

ままごとに手頃だったわ赤まんま

迎え火をひとり焚いてる盂蘭盆会

弘前市 岡本 花匠

朝刊にネプタのいわれ吾唸る

弘大展ネプタ絵保存目が肥える

遂にきた紅葉マークで安全に

防鳥網葡萄に掛けた意地悪さ

ブルー挽ぐわきあいあいの恵比須顔

黒石市 相馬 一花

悪友はみんなあの世で待っている

理屈ではとても女房に歯が立たぬ

こそこそと帰りに捨てる花名刺

堅物のハート溶かしている媚薬

反省会猫もしやくしもふて腐れ

十和田市 阿部 進

信号をきちんと守り出遅れる

政治家にうっかり者が多過ぎる

物忘れ歳のせいにはしたくない

世の中の裏を見てきた目を洗う

老夫婦暑さに負けずトレニング

佐倉市 岡井 やすお

日朝間策士と策士鏝を競り

信賞必罰刑ゆるくして国乱れ

ハンセイだけならばジローもやってたよ

夏祭煮ても焼いてもうまい鱧

次の夢別荘月の一等地

武蔵野市 亀井 円女

好きなだけ夢を見させてくれた亡夫
ペイオフも笑い飛ばせた果報もん
まだ八十路夢はたっぷり涙もね
短気は損気と承知しながら止められぬ
夢を見て人を愛してひとり旅

東京都 岸野 あやめ

忘れよう昔歩いた茨道

ひとり住み昨日なまくら今日手抜き
大体の成り行きは知る白い指
体力は三割口で埋め合わす
それなりに遊いでいます年の功

八王子市 播本 充子

また一つ造り酒屋の灯が消える
美人ならここにいますという化粧
オバサンの一日軽い罪を積む
悪口を言い回つてる負けている
泣いているうちにヒロインらしくなる

東京都 清原 悦子

肩の手が黙って語り温かい
食卓にこれぞ家族という笑い
巣立つ子のポッケに母の箇条書き
車窓から景色を全部独り占め
ひと言が過ぎた言葉を抱いて寝る

横浜市 小野 句多留

自分だけ耐えれば済むという安易
高層で蚊も使つてゐるエレベーター
熱帯夜 小心者の銭勘定
淋しさと衝動買いはうまが合う
すぐゴミにされるチラシのアルバイト

横浜市 菊地 政勝

献体も散骨もよし今元氣
歯の根っこ取られ他人の貌になり
香水と一緒に降りる満員車
命日に歌つてあげる海ゆかば
未納した議員をさらす保険庁

静岡市 安本 晃 授

貧乏神と打ち上げ花火見て暮らす
青葉風新茶の薫る母の家
若返るスタミナもりもり新茶どき
その先は誰も知らない天の川
夏の絵の中で行き交う父子の夢

静岡県 蘭田 猿 杏

入院へ箸の使えぬ友見舞う
妻の旅素っ気ないほど静かなり
母の指示そこに野苺熟れている
寝たきりの母の頭に山河あり
あの人の行った処にたつ噂

富山市 島 ひかる

冬は九谷夏はグラスで飲む冷酒
稲光凄さを期待して眺め

檜 穂高はるかな尾根につづく夢

至福だな高天原の湯に浸かる

いい人が無情な風に誘われる

可児市 板山 まみ子

食糧の無い苦しさを伝えねば

上天気登りの脚のよいリズム

水切れの下りが長い利尻岳

写真よりずっと手ごわい利尻岳

弥次馬の観光客も昆布干し

愛知県 早川 盛夫

本当に怒ると怖い国なまり

敵味方結ぶ絆を酒という

エリートに見合う仕事が見つからず

いつか咲くいつか実になる如露の水

気短な人が咲かせた菊の鉢

京都市 都倉 求芽

大望を秘めて海原朝の風

フライパン過激に夏がはじけとぶ

蟻の列白昼土足で上る居間

賞味期限ないが利用価値はある

主治医には薬がたまると言うてない

京都市 高島 啓子

町内のニュース自転車降りて聞く

公園のリトルリーグへ母も来る

ケーキ棚覗いて買わぬことに決め

家長にはきれいなシャツを買っておく

階段を拭き終わったら旅に出る

亀岡市 井上 森生

口々に花の名雲上花畑(夏の伊吹山)

湧水の水藻に清楚な小花びら(醒井の梅花藻)

炎暑にはサラリ冷しゃぶ飛驒和牛(関ヶ原)

古戦場偲ぶ百種の薬草湯(伊吹薬草湯)

孫つれて若さに挑む鮎つかみ(京都美山町)

京都府 稲葉 冬葉

お呼びの声が聞こえているにごめんなさい

中途半端のわたしにも深い疵

日々好日平和主義者のご乱酒

堪忍の域を出るまで騒がない

衣食住足りて記憶の途絶えがち

京都府 丹後屋 肇

切開して見せてあげたいマイハート

底抜けの遺影と語るワンカツプ

八百万神ヤジロベエの平和国

西瓜売り麦藁帽の弾く音

ハルウララ我が成績が懐かしい

大阪市 川原章久

キレすぎても人は怖がる煙たがる
やかましい蟬もやがては土になる
女好きの息子に嫁が何故来ない
冗談ですごめん私に妻がある
ガーデンング隣に負けぬ鉢の数

大阪市 安達はじめ

学歴に触れるとしほむ父の旗
歩が金に欲の始まりかもしれず
灯がつくと大阪の川うつくしい
八十の俺にまだまだ夢がある
流れ行く水の素直さじつと見る

大阪市 榎本日の出

トマト茄子わが子のように手を掛ける
バラの花買うにも勇気いりますね
寝る間無くロンドンに着く母子旅
ロンドンは十八時間昼続く
お茶漬けにされたおにぎり泣いてます

大阪市 榎本舞夢

雨の日は少し派手目の服で行く
群れを出て自由を得たが怪我もした
美食家も茶漬さらさらオーウマイ
笑うため歯を美しく手入れする
逝ってからあちこち借りのあつた父

大阪市 小泉ひさ乃

真夏日もおしゃれ欠かさず薄化粧
麦藁帽強い日差しに干涸びる
宛名不明遠路旅して帰る文
今日明日と命を繋ぐ糸をよる
身勝手な人にストレス溜めている

大阪市 中村叡子

年寄りのくせにシャワーで無精する
作動せぬ脳にわざわざ茗荷食べ
目薬を大きな口を開けてさし
大ジョッキ女の強さ納得す
高野槇買って仏壇盆仕度

大阪市 清水利武

風と雨抱いて台風攻めてくる
人間の知恵笑つてる大自然
引退をしてもポツポに一億円
ああしんどあの手この手で嘘をつき
無理をして命削つてあの世ゆき

大阪市 奥村五月

子育てを嫌う女の飼うベツト
八十路坂まんだ女と紅を引く
値を聞いて震えのおこる床料理
旨い餌あたえ夫を飼いならす
そんな事言いましたかと二日酔い

大阪市 川端 一步

年金が土産できばることはない
少々のケチと狡さの中で生き
叱られて伸びるか褒められて翔ぶか
多雨酷暑今年の作はどうだろう
休戦の呼びかけ光る金メダル

大阪市 鶴田 遠野

相部屋の軒に風呂でふやけてる
休肝日前夜の酒量許し乞う
夏本番猛暑に感謝する景気
裏読みがすぎて梯子を外される
旅の妻変りないかとまた電話

大阪市 前 たもつ

不登校の相談受ける元教師
酒卒業したが気力に欠けてくる
大の字に寝るには狭いマイベッド
盆踊り寄付して街の仲間入り
困ったら相談できる妻がいる

大阪市 玉置 英子

冷えた瓜夏は冷やした濁り酒
青い薔薇まだまだ青くするらしい
往き還り大阪城見る歯の治療
雷は鳴り続け雨はパラパラ
あまりにも辛い八月話さない

大阪市 近藤 正

憲法にスポットライト今が旬
煮え湯浴び原発神話幕仕舞い
蓮がポン人が見ようが見るまいが
お遍路の姿も気障な議員さん
一リーグ推進論者投げ出した

大阪市 大川 桃花

お見舞に笑顔練習しています
病父の笑顔見たくて下手なギャグとばす
骨拾う父はたしかに逝つたのだ
足腰の弱り助かる狭い家
頂いた花の絵描いてお礼状

大阪市 杉澤 汀

盆菓子の赤黄緑娑婆の色
金婚へ短かったよ長かったよ
妻だけが褒めてくれればそれでよし
百日紅夾竹桃に負けまいぞ
飛車よりも角筋得手な君なりき(木村正剛君を偲んで)

大阪市 古今堂 蕉子

お食いぞめ世界の食材わんの中
杉木立半蔵佐助どこにいる
小半日漱石と猫たわむれる
幸せな旅行についてきたカバン
雲の上司会の声は柳宏子(西田柳宏子師に捧ぐ)

大阪市 西出楓楽

来てみれば北海道も亜熱帯(北海道紀行)

信号のない道延々と延々と

炭坑が廃墟となった世の移り

いとあわれくま牧場の熊の芸

洞爺湖は静か何やら語りたげ

大阪市 渡部 さと美

大河へと水はもまれて妥協して

湯かげんの下手なカランの水の刑

暑い最中 年寄り多い昼のバス

暑さ記録ビールで夫婦ぐっと耐え

アテネ見る選手想えば暑さなど

大阪市 津村 志華子

路地裏の花人情の彩で咲く

身の周りどれも愛しい古道具

マスコミの耳は風にもそば立てる

仏飯と私ひとりの米を研ぐ

朝な夕な律儀に経を上げてます

大阪市 町田 達子

大自然相手にぶつぶつ言ってます

昔むかしは雀どんなにしてたかなと

暑いのに服屋が出来たご近所に

大中小何でも吊って売っている

アジアンショップの店名少し変ってる

大阪市 小糸 昭子

泡のよに消えてしまったその願い

温度差があつても仲の好い夫婦

台風のように走って行く噂

幸せは安楽椅子に委ねる身

カルシウム精神に良い骨に良い

大阪市 本間 満津子

金星を囲む仲間の目にも露

向日葵はお陽さまが好き勇ましい

大丈夫呆けじゃないよと独りごと

検査みな正常値ならまあまあか

母のよう重いおみやげ秋が来る

大阪市 神夏磯 典子

十月の空は素直にしてくれる

喧嘩ではありません会議中です

泊りたい心にさせた誘蛾灯

ピンクサロンのティッシュはあちゃんにはくれぬ

好きな人わたしの殻がとけてくる

大阪市 板東 倫子

六十年業火は消えず原爆忌

長兄から召集かかる孟蘭盆会

笑う人褒める人 菅さんの丸坊主

インド人もびつくり東京が四十度

山暑く猿熊猪が迷い出る

大阪市 川久保 睦子

返盃の軽さでわかる敵味方
たよりない返事をしてる昼の月
買うてない三億円の夢語る
ビードロを鳴らすと亡母の音がする
観る踊る笑顔いきいきフラダンス

大阪市 松尾 柳右子

高原に一人たたずみ深呼吸
カルシウム不足か夫がよく怒る
ウォーキング蟬のむくろに足を止め
黒が好き笑わぬ人になりそう
負け越しのファンいじらしタイガース

大阪市 津守 柳伸

店頭に出た松たけをやぶ睨み
割り箸が性に合います嵯峨御膳
五十年誰がだれやら同窓会
塩コブが白い御飯を所望する
雑用を拾い集めている達者

大阪市 津守 なぎさ

旅カバン出来て夜明けが待ち遠し
古の雅に触れる平安京
寝て食べて一人暮しも板につき
貪欲なカラス大手を振る墓園
月光へかすかに揺れるスキの穂

大阪市 星野 きらり

いい目覚め嬉しひとりのミルクティー
無一物ここまで来たら怖くない
神詣でグリーンシャワーのおまけ付き
蟬のうた森の舞台もファイナーレ
風呂上がりぴんと伸ばしてみる背筋

大阪市 熊代 菜月

願掛けて片目のままのダルマさん
木犀の匂いが誘う朝の寺
まだ夢を見ている途中喜寿迎う
人魚姫居るかも知れぬ海の底
開花せず花見ならぬバスツアー

大阪市 伊藤 博仁

だんじりが喉をうるおす喫茶店
瞑想中聞こえぬことになつて
言い訳は部活と思うあの二人
がつがつと食えぬ糠漬け店屋物
蟬むくろも手助け無に帰る

大阪市 西川 更紗

曖昧な記憶時空をとびまわり
平凡な暮し枝豆ゆがいてる
一雨にホッと一息夏のれん
サッカー戦家事も忘れて燃え上がる
琴の音に野点たのしむ夕明かり

池田市 栗田久子

塩焼きにされて一息つく秋刀魚

禅問答百歳の機微におわせて

皆は自分頼る味方は別のもの

もれ聞いただけで飛び出すよくしゃみ

じよう舌をたしなめられて散るスズメ

和泉市 中川 楓

自家製の野菜に嘘はありません

肩の力抜きなさいよとねこじやらし

子を叱る心の底に届くよう

梅干が日本の色に干し上る

東京に娘とられて遠花火

和泉市 西岡洛醉

蝉しぐれ じんじん僕を追い立てる

神を呼ぶ柏手善人の素直なり

四季進む老いも進んで夢進む

ひっそりと生きて不足の無い心

振り返る歴史に傷の多過ぎる

泉佐野市 山本蛙城

平凡は楽だつくづくそう思う

通販のページは折って積んである

コンビニが近くて財布行きたがる

それとなく告げていたなあ逝った友

無住寺の物言いたげな萩が散る

茨木市 藤井正雄

学校で習った嫁の五目寿司

碁敵に挑戦祖父の別な顔

年金は減額市民税アップ

投函のついで呑み屋へ行く財布

君だけが光って見えるカメラアイ

柏原市 永浜加津子

八月の炎熱耐える鎮魂歌

真夏日の出会いと別れ盂蘭盆会

キックオフ今夜も若い汗に酔う

夏休み孫に付き合う空元氣

逝く先を南御堂と決めている

交野市 山川日出子

ほほえんで盆踊り見る夏の月

今日は吉明日大吉がわたし流

台風と炎天きつい申の夏

ああ猛暑飲みすぎ寝スギ怠け過ぎ

菅直人、心機一転お遍路さん

交野市 田岡九好

狂言に室町人の声を聞く

ああニュース辛い話はもうたくさん

表六を辞書で引いたらほくのこと

残念と言わずに済みませんと言え

言いそびれとろりと胸に落ちた悔い

交野市 森本弘風

CTが俺を飲み込み切り刻む
検査検査悪い病気が見付からぬ
暑い日に妻は新湯と仕舞風呂
湯上がりの汗へ差し出す缶ビール
追伸を書くため手紙書いてます

河内長野市 加島由一

春夏秋冬飽くこともなく恋の歌
食足りて未来へなんとなく不安
にんにくをたっぷりきかす金曜日
花に水ハートに恋は欠かせない
病床の男につらい祭笛

河内長野市 水谷正子

先達の灯を追うてゆくはぐれまい
次々とイベントがありまだ死ねぬ
水を買う十年前は笑ってた
酸素飲む事を笑わぬ時代くる
PLが負けたカナカナ鳴き出した

河内長野市 山岡富美子

愛というカードは時に裏返る
切り口に滲む未練の花鋏
少年の一直線に画く虹
百歳を視野に未完の夢を抱く
裏表 光と陰を抱くカード

河内長野市 村上直樹

きっかけはふと目の合った終電車
嘘ついた心の奥がむず痒い
年金でゆとりある振りする苦労
ぬか味噌にえいやつ怒りを閉じ込める
負うた子に遣り込められて上機嫌

岸和田市 土橋房枝

嫌な事上手に落とし生きている
介護して自分の老いも感じた日
いつからか夫婦の方針くい違い
パソコンに変な画面がまぎれ込む
悩み吐き棄になつたか良く笑う

岸和田市 雪本珠子

夢色の絵具で描く人生図
窓ガラス悔いてる顔が映つてる
明日がある涙のむこう夢もある
秋日和デジカメ友に吟行へ
万歩計つけて一日家に居る

岸和田市 井伊東吉

久し振り記憶に無いの言葉聞く
莫大な金に血迷う保険庁
修身の復活止むなし野菜偽装
貧すれば鈍な動きのメガバンク
ファン無視の金権ドンの一リーグ

岸和田市 岩佐 ダン吉

倒されてもファイトのポーズだけはとる

九条が傷つき長い闇となる

女だてらなど決して言わぬよう

黒白をはっきりしたい僕の癖

粘り負けやっぱり僕を許せない

岸和田市 原 さよ子

ちっほけな親切うれしひとり旅

悔しさはひとりになって込み上げる

口下手の母の笑顔が生きている

歳なりの服装気品ただよわせ

幕切れに余韻の温さ噛みしめる

堺市 村上 玄也

ロボットに家事させたいと願う妻

大河ドラマ決まり新たな町おこし

かあちゃんの腰の辺りにある自信

小金と暇出来て身体が動かない

傾いたまま頑張っている老舗

堺市 柿花 和夫

僕に似た向日葵北を向いて咲き

融通がきかぬ頑固な万歩計

街いなく君が代歌う帰国子女

OB会今年も上座近くなり

仕舞い風呂女将が演歌うたつてる

堺市 矢倉 五月

もてなしの最後にシエフの火の演技

男運悪くて恋は夫だけ

シオルダーを斜め掛けして老いに勝と

傷口を舐めて治せる偉いポチ

嫌われぬ程度に叱るおばあちゃん

堺市 山本 半銭

負け組に居心地の良い椅子がある

お茶の間に笑い弾けている安堵

若くない汗で踊りに興じてる

満月の下で花火の色優し

お隣の大爆笑が気に掛かり

堺市 西村 りつえ

薬より笑ろて暮せと言う主治医

退院日化粧した顔他人めき

百日紅名前に恥じぬ炎天下

TVからガッツ頂く甲子園

暑さほけ終らぬうちに冬支度

堺市 和田 つづや

貧しさを知っているから満ちている

熟睡の朝は散歩がしたくなる

暑に負けぬよう真夏にも鍋をする

激論に理性の籠がはずれそう

手のひらに握り込んだる嘘がある

堺市 石堂 潤子

吹田市 須磨 活恵

一握の薔の茎買い終戦忌

墓洗う三人姉妹恙無く

贅沢はしないがコーヒー豆は別

お隣の芝生の色は知りません

寝てるはずの猫が尻尾で返事する

堺市 志田 千代

無職でも出かけるところございます

続いているソリヤーいろいろあります

一人だから続けられますウオーキング

続編はあなたのいないラブストーリー

ハネムーン以来私を呼び捨てに

大阪狭山市 矢野 梓

電文のようなメールは嫌いです

ブランドは嫌いバーゲンなら似合う

簡単に嘘ついていて偉い人

口一杯言うてストレス溜めている

逢えばすぐブランド埋まるクラス会

四條畷市 吉岡 修

止まり木になってあげよう僕の胸

集印帖閻魔様への身のあかし

大受けのチャンスにギャグが出てこない

買う方がよっぽど安い畑しごと

ネクタイに凝って無職にもてあます

あれがいいこれがいいよと健康法
やわらかい台詞で私を斬りに来る
告白を少しためらう遠火花
大仕事したよう病院から帰る
赤トンボ秋の台詞をまきちらす

吹田市 野下 之男

人気取り何時まで続くぬかるみぞ

迷うたが絡め取られた赤い糸

休肝日心ならずも大ジョッキ

居酒屋で社長になれる良い男

ひたすらに命忘れぬ蟬時雨

吹田市 山本 希久子

老眼がすすみ妥協をしてみよう

夏は冬を冬には夏を恋しがる

病氣したのがきつかけで同居する

指のすきまささら落ちてゆく時間

勝ち負けは問わぬ余生の綱を引く

吹田市 大谷 篤子

銀髪のかつらにピンクよく映り

約束が気重になった午後の雨

退屈になるとひと言多くなる

ラッピングはずすと風邪をひく私

力むのはよす道端の花だから

吹田市 瀬戸 まさよ

豪雨禍に無力宇宙の科学でも

手話の熱手話だけにあるこの魅力

ああ忙しまネキン次の季節着る

聴き惚れるひばり私の歴史です

同居する嫁に奇異の目喪めことば

吹田市 岩屋 美明

ジャンボくじ当れば涼しい顔でいる

ご主人は年下らしい派手な服

家内には名前で呼んだことがない

ひとり旅家は忘れることにする

手も足もついてゆかない盆踊り

吹田市 太田 昭

先にゆく妻の歩幅が広くなり

朝シャンの匂うホームの列につく

真っ白い花一輪を買う懺悔

アンテナを立てて上司は酒に酔う

特売の薬効き目も割り引かれ

吹田市 穴吹 尚士

新人のくせに顎ひげ生やしとる

新聞がおまけに見えるほどチラシ

新調のスーツに誰も知らん顔

新婚と同じコースでフルムーン

色直し済ませて新婦よく食べる

吹田市 早川 棲世

通勤車ケータイ化粧朝のパン

吊革へ朝刊の憤ぶら下げる

駅のポスターから雪ふりさくら咲く

男とは汗の香酒の香まぐるの香

終電車欲望の街まだ寝ない

大東市 南原 正和

携帯に蜘蛛の巣張られふと空し

土砂降りで言訳出来ぬ日が続く

暖簾越し見える仲居の色の良さ

パチンコ屋涼んでるのに熱くなり

喜寿迎えなにもいらない妻元氣

高石市 浅野 房子

エアコンがもうお休みと消えて行く

雑草に負けた私も朝顔も

今更にひとり淋しい遠火花

フィクションに惑い現実見失う

まだ覚悟出来てないのに訃報くる

高槻市 井上 照子

燃えた過去夫よ十五夜みてますか

不覚にも揉めてる中へ顔を出す

葛藤に堪えてる胸にきしむ音

沈黙の眉に野心がちらり見え

自問自答誤解と知って夜が明ける

高槻市 傍 島 克 治

同料金で海見える部屋見えぬ部屋

明日香路の揺れる稲穂に見た卑弥呼

立食いうどんゆつくり食える定年後

ストレス解消県人会で国言葉

閻魔への土産そろそろ考える

高槻市 江 原 秀 夫

思いやり独り言にも返事する

ほけたかな浮世の風が生温い

余生です気儘な数珠を持ち歩く

ライバルによく似た犬に吠えられる

ややこしい話ぐるぐる大ジヨッキ

高槻市 執 行 稲 子

客足が決め手辛子の練り具合

チャイムには犬がお先にお出迎え

三世代ひしめく玄関恙なく

写経する机隅まで清々し

鳥でさえ雛に睦みの餌あたえ

高槻市 乙 倉 武 史

いらだちを隠し切れない言葉尻

負けて勝つ事を覚えて焦らない

弱い方の応援をする天の邪鬼

水道水沸かして化けた温泉湯

道問えば親切な指よく動く

高槻市 田 中 千 莞 子

自画像にフイクシヨンの色添えてみる

ジェラシーのシャワーで女磨かれる

鬼ころし飲んで宥める腹の虫

猫舌が熱いキッスで火傷する

川床遊びよりもあなたとかき水

高槻市 瀧 本 きよし

七味より一味が似合う峠蕎麦

体には悪いが塩味のシヤケが好き

真夏日が五日続けば乾涸びる

面影の胸の焔に這入り込む

物言わぬ厳しい顔が妻の武器

高槻市 西 谷 治 三 郎

じつと手を眺めて感謝半世紀

百歳の親に孝養禿げ白髪

好きやねん言うチャンスなく五十年

いつも行く昼寝のデパート今日休み

家の用しない息子がボランティア

高槻市 左 右 田 泰 雄

心配は要らぬと気休めを言われ

駄目もとでいいさチャレンジしてみよう

ためらわず右手を上げてゴーサイン

今とても大切なのは思いやり

佗しさが一入募る夜の雨

豊中市 藤井則彦

分かるかと迫るピカソの上機嫌
靴箱で威張る頑固なハイヒール
すれ違うたびに誰かと妻に聞く
ある時は息子と競うコップ酒
核家族なのにお箸が増えている

豊中市 水野黒兎

楽章の合間は咳が鳴り響く
土砂降りには天の号泣友が逝く
草の芽は音符のうちは引抜けず
ふくよかな娘が街の慈雨となる
事務所には夢と挫折の跡がある

豊中市 山門タミ

忘れたい話がすぐにしゃしゃり出る
一人居の城にいい風いやな風
カレンダー私一人の伝言板
ようしゃべる人や自分もよくしゃべる
頭から沸騰しそう蝉しくれ

豊中市 安藤寿美子

カーナビで来たと坊様涼しげな
暑気あたり八十歳はこたえます
白和えのコツを娘に言う
きっかけを外しさよなら言い出せず
殻脱げばめまい肩こり治ります

豊中市 吉田あずき

手にレモン心がレモン色になる
絶好調思わず出していた尻尾
冷蔵庫ドスンと閉めてふくれ面
軸足がきまらないから蹴蹴く
お世辞言わぬ鏡憎いが手放せぬ

豊中市 江見見清

メモ書の字が美しく捨てられず
箱の中箱また箱のギフト品
古き友字は顔ほどに歳とらず
本物か造花か触れてなお思案
封を切るペーパーナイフ音はずむ

富田林市 稲川恵勇

逆転のチャンスにいつもけつまずき
とまり木へ座礁をさせたにわか雨
耳たぶがほてる美人が横にいる
のんびりを厭う戦士に育てられ
若づくりうっかり千支で引つ掛かり

富田林市 片岡智恵子

わたしの池はすこし濁り住みやすい
自由とは背中あわせにある孤独
原爆忌明ければただの暑い夏
木から木へ関西の蝉かしましい
今日だけの命に燃えて咲くむくげ

富田林市 大橋 鐘 造

お互いに無駄でなかつた顔の皺
一言が邪魔をしているお付合い
ど忘れを笑い話にするゆとり
伊達眼鏡歳には勝てず度が入り
肩書きが消えて男の顔になる

富田林市 中井 アキ

てのひらを流れる川に君といふ
あなたとの時間は華やかに包む
吹っ切つて明日の見える窓を拭く
一本の川になるまで話し合う
待ち呆け続いて胡瓜乱切りに

寝屋川市 籠 島 恵 子

生きてゆく時々自分ほめながら
八月やいつまで続く終戦日
ひまわりの首のあたりがまず疲れ
ときどきは沼の底へと落ちてゆく
何もかも呑み込み海が病んでゆく

寝屋川市 坂 上 高 栄

戦争とは味方上手にだます事
職業の貴賤で人を評価する
満月に無欲の心照らされる
かぐや姫イラクの空は悲しかる
亡き人の句を読む塔誌八月号(柳安子さん)

寝屋川市 富 山 ルイ子

素直に生き素直に死んでゆくつもり
爪に灯を灯して生きるのはやめる
気持だけ若さなくさず立ち向かう
羨ましひとりぐらしののびやかさ
理不尽な国へ日本中怒る

寝屋川市 江 口 度

色眼鏡かけて世の中楽しもう
あの時のうそが窮屈そうに居る
前に登った坂に階段ついている
思案して覗くがま口しか持てず
父の夏ひたすら水を飲むばかり

寝屋川市 太 田 とし子

聞いたげるだけの煎茶が味気ない
うたせの湯 脳天叩いてよろこばせ
死の一字水引かけてふところに
森の奥ひんやりニュース遠ざける
夏帽子昔話をききたがる

羽曳野市 酒 井 一 壺

あこがれた街に思わぬ落とし穴
踏みつけた財布の中は空気だけ
芝居だと分からんように芝居する
つじつまを合わせてくれる母の知恵
取り巻きの煽てに乗った若社長

羽曳野市 三好 専平

バブルとブームいつかはしほむ時が来る

大義にはもうだまされぬこの私

入り口に監視カメラが置いてない

血縁 地縁 金縁 隠敵 大手振り

トンボリもシンサイバシもスラム化し

羽曳野市 吉川 寿美

突然の豪雨が村を狂わせる

敵のない夫で少し物足りぬ

迎え火わけてゆらりゆらりと兄が来る

郵便受けを朝夕のぞくある期待

夫がこの頃優しくなつた用心しよう

羽曳野市 安芸田 泰子

糠味噌の中で光っている亡母

ネクタイを解けばすらすら出る本音

古里が世界遺産になつた自負

成人式の孫へうれしい浪費する

賞味期限切れた体を蚊が攻める

羽曳野市 徳山 みつこ

水撒きの亡父モノクロの残像に

草いきれふと墓参りしたくなる

愚痴どつと捨ててきました墓掃除

はぐれ雲あんたは拗ねているのかい

鈴虫をきいて酷暑を遠ざける

東大阪市 笠井 欣子

盛装の紐解きしばし孤に浸る

補聴器をはずして怖い話聞く

ペンダント孫に相談して決める

この礼服喜怒哀楽の染みいくつ

冬ソナを無心にみてて笑われる

東大阪市 中岡 妙

さよならをしてから話長くなる

一休みしても心配される歳

寺参り善人の顔行き交わす

苦労した封書ポストへ軽い音

セールのテープと知らず受け答え

東大阪市 北村 賢子

蝉しぐれ消えて淋しい赤トンボ

星空ヘライトアップが邪魔をする

まだ風になれず澱んでいる空気

赤じゅうたん狐狸が牛歩する

命ある内もつと何かをしなくては

東大阪市 安永 春

二リットルお水供える原爆忌

たつぷりの母乳に咽せる新生児

マンションの高さに馴染めない震え

マンネリにならぬ錆とるマツサージ

この猛暑ダウンをしないよう昼寝

東大阪市 谷口 義

コンビニで買物をする高級車

好き嫌いはつきり言っている無口

新鮮な玉子と書いてあるたまご

関係者以外おばさん達ばかり

おばあさんになる訓練は受けてない

枚方市 寺川 弘一

軽いけど財布はいつも持つている

野心クリヤー出来て貫禄付いてくる

一粒の麦を育てる土になれ

紅白餅を夢見て稲穂垂れて行く

水道の水黙って飲める日本では

枚方市 荘司 弘之

この夏もドラマ見たさに甲子園

同窓会互いに笑顔プレゼント

サングラス掛けて何だか気分ハイ

酒すすみ話どんどんでかくなり

前向きな心が弾むウォーキング

枚方市 宮川 珠笑

聞き上手私を裸にしてしまう

保険屋にただ取りされて喜ばれ

深酒をしかる娘の声妻に似る

ころよい目覚め庭木と笑み交わす

呵呵大笑テレビ相手にできる妻

枚方市 森本 節子

朝夕は何も願わず手を合わす

気がかりは閉ざされた雅子さまのこと

短命でも酷暑に負けぬせみの声

面白い夢でしばらく反芻してる

洞爺湖の打上げ花火みえる部屋(北海道で)

枚方市 安達 忠央

飲むわけを聞いてくれるか夜明けまで

ミスをした可愛い顔を責められず

三面鏡たたむ妻の手まだ未練

祝い酒弔い酒をおんなじ日

サラ金に通うてブランドを纏い

枚方市 海老池 洋

泥沼の底で我慢の僕の泡

忘れたい過去引きずってひとり旅

よれよれでまだポケットに残る夢

力みすぎ脇の甘さに気づかない

その日まで歩き続ける道ひとつ

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

お国はと素性しつかり尋ねられ

星空を裂いた花火の輪に拍手

うっとりとする愛もなく惰性的の日

残り火へ羽目はずしているグラス

羽搏いてみようか少し弾む胸

藤井寺市 楠 昭子

マンネリの暮しに毒をふりかける
忘れものしたのが縁になりました
逃げ足の早いチャンスだ今度こそ
疑いが解けると首が軽くなり
本当の私に戻る風呂の中

藤井寺市 中島 志洋

麻雀の誘い待つてる秋夜長
君だけが頼りと部下をこき使い
好きな事やる早起きは苦にならず
天狗の面とれば憎めぬ団子鼻
堅物にされた仮面が外されぬ

藤井寺市 高田 美代子

たつぷりと飲んで一泊留置場
咲いて散るただそれだけの刹那主義
正直な人で黙って領いた
咲き誇る薔薇を苛めてみたくなる
台風が目が予報士を悩ませる

藤井寺市 太田 扶美代

頬つべたのあたりへ愚痴を溜めている
生きている証縫い目が綻びる
失恋の跡へあじさいが咲いた
後遺症少し残して恋終る
ブランコの揺れに任せている余生

松原市 小池 しげお

迷い犬十日も紙が貼ってある
幽霊が出そう明日は雨みたい
極楽は無かった死んでからわかる
つまらない男が居てるイロハ順
丸顔で何故か女に嫌われる

箕面市 出口 セツ子

救急車不安の闇を駆けぬける(主人緊急入院)
眠れないICUの三日間
冷静に医師に質問する次男
アリガトウ主人指文字書くベッド
幸福と思う優しい子の温み

八尾市 生 嶋 ますみ

幸せね多くの方に送られて(亡夫 3包)
もうオイと呼んではくれぬ人になり
介護した頃の幸せ目の奥に
細々と三度の食事忘れない
入れますの保険しつこいコマージュヤル

八尾市 長谷川 春 蘭

点から線闇に浮き出る大文字
夏山へ塩を濃い目に握り飯
七夕の笹生きると一字強く書く
背を伸ばし休める鍬の赤トンボ
まだ生きる余生の弾み梅漬ける

八尾市 山本 宏 至

若い日の嫌いは好きと同じ意味
おもてなし真心こめたかくし味
手土産にこわい魂胆かくれてる
こわいのは心の中のもう一人
いい酒だみんな美人に見えてくる

八尾市 高杉 千歩

親孝行一人占めした川奈の湯
体力テスト八十歳も仲間入り
林檎 梨ほとけに情けの宅配便
デジカメに孫の浴衣の初々し
死ねません親孝行に囲まれる

八尾市 村上 ミツ子

いつからか見えなくなった子のころ
あきらめぬプラス思考が運を呼ぶ
どうせなら暑さと仲良しになろう
絵手紙の暑中見舞に癒される
見え透いたお世辞にこにこ聞いておく

八尾市 内海 幸生

背伸びした日は古傷の腰痛む
草生えたままにしてよと兵の墓
語り継ぎ風化はさせぬ原爆忌
水呑まぬ八月六日と九日は
同病と聞いて心の鍵を解く

八尾市 宮西 弥生

同居して他人の視線にかこまれる
まぼろしの遺産と降って来た波乱
流れても五穀に出会う日の運命
足の裏叩けばあしたまた光る
他人よりも大好き夏の女なり

八尾市 吉村 一風

われながら善人だなと苦笑い
つい口をすべらす話羽根の生え
リズムよく八十路を一步二歩あるく
金婚へよう来たなあと礼を言う
どこにいた台風過ぎて猫帰る

八尾市 井尻 民

満足の答えが出ないもどかしさ
はじまりはひととき目と目合った恋
語りべの風化が進むきこ雲
ルンルンの気分を隠さない鏡
想い出の品ガラクタで投げ出され

八尾市 宮崎 シマ子

禁煙を毎日誓いすぐ破る
わがままと言うより後へ引かぬ妻
半身不随になつてもドンは我を通す
西瓜割り大きく当り夏終る
相聞歌 返歌をもろたことがない

大阪府 前田 ゆい

無防備の軒わが家は天下一

強面の舅意外に情がある

指折って孫を待つてる孟蘭盆会

秒針のいのちを刻むような音

舌鼓打つ音さえも似る父子

大阪府 米澤 俣子

太陽に恋の告白朱のキャンナ

よう冷えた湯葉のさしみで暑気払い

歳のせい早起きさほど苦にならず

盆休み息子は嫁のさつに行く

ああ無情あの温顔の柳友の死よ

大阪府 初山 隆盛

初盆のまぼろしの女曼陀羅華

会葬の中味が抜けていた袋

初恋は幻のままチャックする

血圧の異常に上がる本は避け

あつさりと貸してあつさり返さない

大阪府 野田 栄呼

止められぬパチンコたまに入るから

畑仕事今が最高おしゃれもし

酔いまわり想いのたけを無礼講

家中が一勝で沸く孫ソフト

ひとり娘の離婚で親は平和です

大阪府 桑田 ゆきの

山水に口つけ極楽喉仏

香水をちよつびり吹いて皺が伸び

ネイルした爪で広がる手話の空

爽やかにドナーカードに印を捺す

手波して父母の流灯寄り添わす

大阪府 澤田 和重

習慣病のようにどっこいしょが出る

いい歳を重ねられたか笑い皺

通販の誘惑部屋を狭くする

大笑いしてストレスをやわらげる

身の内の鬼を鏡で見てしまう

神戸市 山口 光久

優しさの数だけ味と艶がある

堅物で人を笑わす術知らぬ

キッチンに私を癒す城がある

菓子が出た嫌われてない証だな

出しゃばって尻尾踏まれて知る痛さ

神戸市 木村 貴代子

食べられるしあわせ思う敗戦忌

梅干して今年の幸をたしかにす

引き揚げのリユックの重さ今も背に

平和の灯守る力的一端を

異常気象原因すべて人間に

神戸市 池田善守

この頃は主人にそむくわが手足
好き感謝この気持ちから笑顔咲く
一杯の水に明日の無事祈る
オンリーワン自己責任の日々楽し
イエスノー人の心はよみにくい

相生市 中塚礎石

近道で待っていたのは怖い鬼
生き下手の余命はたばたするばかり
尾を振ってそれから歩幅狂いだす
賞味期限などはないよと笑いこけ
消しゴムで消えぬ心の傷あまた

芦屋市 黒田能子

いつまでの残暑朝顔咲いている
うたた寝の上手になった夏の午後
人生の相棒でよしふたり今
いつものお茶今朝はしみじみ飲んで
敬老日まだ老人の自覚なし

尼崎市 田辺鹿太

しあわせを紡ぐ夫婦の宿泊衣
劇的な変化が欲しい夏の午後
昼寝して自由がないとコボす妻
露出度が気になる街の淑女たち
たこやきでビール浪花の風物詩

尼崎市 山田耕治

赤ちゃんの方から笑顔見せてくれ
甲子園の勲章胸に生きてゆく
少子化の構図赤子を取り囲む
朝ドラのヒロインいつも青りんご
よい朝だ夫せかせる用もなし

尼崎市 林昭三

アロハシャツ ハワイで三日似合ってた
振り飛車のように倅が帰省する
孫二人来て戦とは大袈裟な
グループでグルメ旅からエステまで
右脳に仕舞ったノートが古すぎる

尼崎市 春城年代

だらしなく着ると酷暑のなおきびし
ジャスミンのかおりほのかに髪洗う
真夏日のまともリハビリ通う道
ありふれた朝だが命漲らせ
消防車ゆく救急車ゆく炎天なり

尼崎市 春城 武庫坊

広島忌テレビ画面に黙祷す
汗すればあとで微笑むことがある
戦後史を話そうとする百日紅
雑踏を抜けると足に自信湧く
明日あると信じて今日もビール飲む

尼崎市 長浜美籠

ツーカーの仲で分け合うパンケーキ
気分一掃するベティキュアをぬり替える
立つ位置が違うと変わる風あたり
目標に向いとときめくイヤリング
留守電にモシモシだけのリフレイン

尼崎市 軸丸勝巳

風鈴の音もけだるく鳴る猛暑
大の字もくの字も暑し熱帯夜
八十年球児に空と生きた芝
八月に買う一冊の戦記もの
熊野古道平成のゴミ落とせない

尼崎市 松下比ろ志

蝉しぐれいのちを絞り出すように
生き生きと老いて昼寝の夏座敷
朝顔に気が短いと叱られる
笑顔ひとつ貰って一日軽くなる
意に反しほやきつづける肚の虫

伊丹市 山崎君子

藍染めの浴衣で揃う盆踊り
ひとり旅声かけられて声かけて
雨宿り尾をふる小犬抱きそびれ
雨止んで花さわやかに喋り出す
温もりを残してくれた長電話

川西市 西内朋月

熱帯夜冷酒枝豆冷や奴
嬉しい時も寂しい時も飲んでいる
棚経の知らせが届く梅雨の明け
高級車の横には置かぬ駐車場
笑われているとも知らず飲んでいる

川西市 米原雪子

甘えたい人もう居ない隙間風
曾孫抱くどこか自分に似てる自負
問うた道後戻りして教えられ
幼顔少し残して帰省の子
医者嫌い痛みを堪えて待つ夜明け

三田市 久保田千代

聖書から神を学んで人嫌い
妥協して根っこが取れたもつれ糸
モカの香に浸るひととき素にもどる
このチャンス生かす私の見せどころ
わだかまり抱えながらのおつき合い

西宮市 菊池トミエ

夕立の雲は俄におそい来る
沙羅の花白一輪のたたずまい
木曾路行く旅の思い出五平餅
軽やかに追い越して行く白い靴
釣しのぶ夏風抱いてゆらゆらと

西宮市 坪井孝一

あやまちも純粹だった若いとき
人生の余白生き甲斐あちこちに
数えたら七人を超す敵が居た
期日過ぎ苛苛してる宝くじ
コスモスが咲いたぞ少し休戦だ

西宮市 井上松煙

自分らしさが出ていればそれでよし
晩酌をやめる心配する妻で
ほのぼのと妻は卵を焼いている
子や孫を当てにするなど蟬しぐれ
負けられぬまだ血がたぎる囲碁の会

西宮市 緒方美津子

焼酎のあと半分の酔い心地
補聴器に鳥の声欲し山歩く
満月にほんのひとことああ夫婦
ループタイ似合わぬ方が嬉しくて
二十階住むに勇氣の出ぬ歳に

西宮市 亀岡哲子

安眠枕抱いて眠れぬ熱帯夜
良い夢で老いたし寝具あれやこれ
添い寝して児とメルヘンの夢の中
空巢多発刑事さんとも顔なじみ
バトントワラー目指す娘の長い足

西宮市 牧淵富喜子

さり気なく女は眉を引き直す
向こうから名乗らないから黙秘権
諦めていない証のジャンボくじ
警報の出ている街に友が病む
風それで思わせぶりの雲も去り

西宮市 山本義子

これからの出会いはきつとシャボン玉
モーニングコーヒいいことあつと予感する
歳月は出会いと別れ煮ころがし
馬鹿ぶって幸せぶって生きている
わたしの川ときどき流れ速くなる

西宮市 門谷たず子

ハイビスカス赤く咲いたよお父さん
夏バテのわたしにかける塩コシヨウ
紫陽花が一つも咲かず夏終る
お供えの桃もメロンも熟れすぎる
もう誰も追ってはこない下り坂

姫路市 古川奮水

青い目が観光姫路城登る
武士道が匂う狭間に街覗く
好古園 城を背中に酒を酌む
市川を渡りライトアップの城が浮き
外堀は国道2号にさま変り

兵庫縣 大谷 幸次郎

出る杭となった勇氣が慕われる
昇る日に柏手沈む日に祈り
うっかりと言ふ言い訳もあるらしい
頭下げ稲が整列する田んぼ
この頃の田んぼに鳴子見かけない

奈良市 米田 恭昌

つきのない男もバチだけは当る
逆風に活をもらつて湧く闘志
しがらみが足枷となり拒めない
ボンボン船で父の遺志継ぐユーターン
しゃべるのは不得手歌なら唄えます

奈良市 天正 千梢

尻尾振る犬の心はうたがわず
ほけ自慢笑いながらに坂のぼる
赤貧にあまんじ正論吐いている
十人十色知らない事がたんとあり
自分に都合よい虹を描いている

生駒市 飛永 ふりこ

シャワー浴び葉脈の裏生き返り
ごめんなさいDNAです私の強さ
にんにくを食べると土壇場に効き目
碧い海に抱き締められて出るゆとり
潮風と君の白い歯写メールに

檀原市 居谷 真理子

百点が欲しいお方のせわしなさ
自転車が好きで自転車屋のおやじ
あこがれは父幼い日老いた今
肩に顎のせてあなたも痩せたわね
死に様を孫子に見せるのも役目

香芝市 大内 朝子

沈みゆく夕陽合掌したくなる
体形に消えてしまったのよくびれ
脳味噌も足もこの頃たよんない
腰痛が河内音頭を遠く聞く
どつしりと鼻のすわっているきつぷ

奈良縣 渡辺 富子

昭和史を語ると見えるきのこ雲
アメリカのわがまま世界掻き回す
青いバラ造花などではありません
華やかな色つけ噂飛ぶ酒場
名月が小粋な恋をそそのかす

和歌山縣 中後 清史

ここで口開くと重い荷を背負う
眞実を吐けばけじめの付く話
ばったりと上司に出合うずる休み
妻からの借りを時効にしてくれず
御破算で願いましたの休肝日

和歌山市 桜井千秀

無い袖も振るから仲間外せない

好奇心うろちよる前後見失う

コミュニティション斬り捨てごめんネット上

有り金さらえ百均市で憂さ晴らし

久方の雨に植木と濡れている

和歌山市 木本朱夏

まほろしの父に寄り添い夕涼み

月下美人ひらいて誰も来ない夜

ちくちくと錆びたハサミで切る絆

魂に気合をいれる原爆忌

激辛のカレーで夏を充電す

和歌山市 田中みね

来客へ先ずおしほりという配慮

ああ親子きのうの怒り消え失せる

嫌な役わたしがせんで誰がやる

それとなく姑に金庫の在り処など

人間も犬もふらつく炎天下

和歌山市 牛尾緑良

モンブランにしよう今夜は二人きり

献血はご遠慮します熱帯夜

生き下手は父母譲りかな笑い合う

喜寿傘寿心配なのは流れ弾

絵はがきの並木は消えてハイウエイ

和歌山市 玉置当代

逆縁の哀しみ背負い写経する

ガラスの靴びったり合つてから孤独

申年の厄除けですと肌着戴く

輪の中の雑魚は一人で泳げない

胃カメラに良好と出た空の青

和歌山市 福本英子

遠花火聞くだけ浴衣吊すだけ

阿波おどり今年も映像だけ見てる

風鈴が騒ぐ台風来るらしい

上を向いて八月十二日の空よ

赤トンボ猛暑の鬱を慰めに

和歌山市 榎原公子

庭先の花も煎られている熱暑

幽霊に逃げられそうに着崩れる

毎日のメニューに入れる畑仕事

節くれの指にピンクの爪が伸び

無事という保証は何もない派兵

和歌山市 武本碧

騙されておこう無邪気に咲いている

藁一本に縋るかたちの根無し草

二人三脚結んだ膝が笑い出す

につこりと隣の席へブルータス

ゴミ出しておいてと妻の事も無げ

和歌山市 山口 三千子

炎天下思考回路を遮断する
トラウマが心の中でゆれ動く
ふんぎりが付かず流れてゆく時間
リビングのテレビ朝から甲子園
お尻から煙出そうな愛煙家

和歌山市 楠 見 章 子

男性も子供も美白夏が病む
バーゲンの服と服とが鉢合わせ
トドが寝るテレビをつけた儘にして
当たったら南のちさい島買おう
前向きの姿勢ひまわりから貰う

和歌山市 上 地 登美代

助っ人を鞆へ電子広辞苑
キレる子に真心という処方箋
調子良い返事をくれる他人様
遡上する鮎をダブらす球児達
嫌いな日も好きな日もあり老いふたり

和歌山市 松 尾 和 香

森の雫に人も自然も育てられ
世界遺産歴史と祈り守り継ぐ
紀伊山地広がる地図は母の森
苦も楽も学び人生さわやかに
充電してリセットしたいひとり旅

和歌山市 堀 畑 靖 子

人生の柱になった恋がある
来し方を見るようですぬ遠花火
拝啓と肩こる手紙書いている
炎天が辛いハタラクバチも古い
年金のはなし眉間にシワ寄せて

和歌山市 細 川 稚 代

そそくさと帰ってしもた銀行屋
夏休み孫イキイキと充電す
今すこし風を下さい午後三時
独り居にうちわの風もいと嬉しい
ゆずれないこの一球に意地がある

海南市 三 宅 保 州

御岳の噴火も風化されてゆく(木曾路 5句)
今もお木曾路はすべて山の中
絶滅の危機がここにも木曾馬よ
先人がそこに居そうな妻籠宿
寢覚の床造形美とはかくなりや

海南市 堂 上 泰 女

ハイテクの社会息子がお師匠で
離れ住む子の無事祈る母メール
スカーツとゴルフボールで飛ばす鬱
風蘭のかおり涼しい夏の
クーラーもレッドカードを出す猛暑

海南市 谷口 義男

嫁さんが欲しいと言わぬ何故だろう
言いたい事を言う責任の無い野党
薄化粧し出した寡婦に出る噂
足が先知らしてくれる老いの坂
年金の財布次第に軽くなる

鳥取市 岸本 孝子

給食の出前が欲しい夏休み
ノーと言う勇氣一票持っている
休養をせよとイエローカード出る
助け舟出す潮時が難しい
欲深く仏に託びることばかり

鳥取市 岸本 宏章

道を問うちゃんと車を降りて問う
自由には自己責任が付いている
イラクから見ても不思議な自衛隊
言い難いことは最初に言っておく
無農薬のおいしい葉には虫がいる

鳥取市 春木 圭一郎

元気出る秘訣どこでもまず歩く
毎日の新発見に期待する
楽しみを新たなジャンルから探す
不足分補う努力まずはやる
思うこと言えば心が軽くなる

鳥取市 山宮 愛恵

ジャクジーで女ゆっくり眼を閉じる
ミニ菜園卒寿の母のよりどころ
私の命をつなぐ降下剤
点と点つなぎ繋いでまだ未完
八卦見の悪いところがよく当たる

鳥取市 近藤 佳子

傘寿まだ若し両手に夢をもち
菜の花の黄で埋めつくす兵の墓
若葉萌ゆ初夏の城址に身を解かず
裏切った事実目ん玉落ち着かず
手袋を二ダース使う選挙戦

鳥取市 倉益 一瑤

千手観音きつとあなたは欲張りね
幸せな枕楽しい夢が湧く
腹の虫追い出すように蚊を叩く
簡単にわたしの素颜見せられぬ
心配の種を拾っているカラス

鳥取市 植田 一京

もう時間無いので走るのは止そう
人生は謎解くためにあるんだね
無駄なもの省いて味が無くなった
三叉路の街せわしない人ばかり
ふる里の町の家並にほっとする

鳥取市 夏目一粹

鍵かけぬ暮らしに妻と夕涼み
よほよほの母訪ねれば励まされ
天文は無知だが星に癒される
寂しさが衝動買いに走らせる
ポトルへと心残りが顔を出す

鳥取市 西村 黙光

文句言うたびに血圧乱高下
やけ酒を煽り角出し槍を出す
凶に乗って浅学菲才陽に晒す
猪口持つと思いい出せる師の言葉
色褪せた思いい出故郷引き寄せる

鳥取市 中村 金祥

クレジツト簡単過ぎて超恐い
秋風が待ち遠しいと蚊をたたく
木洩れ日の淡い光に癒される
台風でホッと息してすみません
にんげんは青い地球を殺すのか

鳥取市 有沢 せつ子

信号を守る幼児に右ならえ
世話をすする孫から元氣もらってる
千羽鶴甲子園へのバスに乗せ
この暑さ万歩計にも言い聞かす
輝いていたくて今日もペンを持つ

鳥取市 富山 檳榔樹

残り日を画竜点睛老い日和
矢印に足すくわれる悲しさよ
話そうよ笑い合おうよ飯食おう
生きざまに辛さチラリと苦勞人
辛口の味と小言は後で効く

鳥取市 録沢 風花

熱中症予防に猫は寝てばかり
友人の誘いは暑さ厭わない
甘過ぎるような気がする米支援
戦争は嫌です南十字星
太陽が燃えて砂丘は眠れない

鳥取市 徳田 ひろこ

何ごとも珍しがって愉しめる
旅の途が幸福駅だなおもう
名も知らぬ花の会釈に遇うて旅
珍らしい花に群れる蝶四一五羽
依古地さを罷り通しているア・ナ・タ

鳥取市 宮脇 道子

生きること不安の崖で見る桜
猛暑です雨の山陰傘忘れ
立っていると暑いので寝る人と犬
錆びた腰少し歩いて研ぎを入れ
少子化で年金の幅無理もある

鳥取市 山本 益子

倉吉市 山中 康子

絵日記の小さい西瓜夏休み
スカーフのクールな柄を選ぶ古い
ご時世は微笑浮べぬ人多い
不透明なチャンスに挑む宝くじ
夏バテに辛い味噌漬常備する

鳥取市 加藤 茶人

一角をつつけば脆い大派閥
試練かな猛暑洪水待ったなし
一瞬のぼんやりミスに泣く惨事
メールより叫んでほしい生の声
ピオーネがつるりと喉を越していく

倉吉市 猪川 由美子

お宝は金で買えない妻の愛
いつ見ても鏡の俺に自己嫌悪
倅せの基準下げれば苦にならず
青春に悔いなし僕は花火見る
子はいつも妻に味方の口答え

鳥取市 永原 昌鼓

胎内で親のケンカをジッと聞き
多摩タマちゃんいま頃何処で泳いでる
雅子妃へ天岩戸を想い出す
ボケ始め紅さすうちはまだいいつか
拉致帰国プライバシーは丸裸

倉吉市 松本 よしえ

母の吹く笛には無駄な音がない
簡単に曲げてならない決めた道
蚊のような声にも欲は詰めてある
妻の吹く笛に踊って無事暮れる
省エネと決めて団扇の世話になる

鳥取市 美田 旋風

無駄骨もさんざん折って今日の花
年金は減るのに医療費は嵩む
若者が突飛な新語喋りだす
日本は土砂降り砂漠に給水車
青い葉が出るのを待てぬ曼珠沙華

倉吉市 野口 節子

人の道おかしくなった世が揺れる
無念無想母は白寿の坂登る
喜寿過ぎて老々介護日々迷う
童謡の里に昔が消えて行く
バス停の段差つまずき歳を知る

先輩の名言入れる小引出し
長らえて花も実もあるおじいさん
押売りに心の隙を見透かされ
迂闊にも仏心が詐欺にあい
名水を拝む形で汲んでいる

倉吉市 最上和枝

宵越しの金は持たぬと貯めている
献血を口実にしてダイエツト

味噌の蓋締めて わたしが歌うから

無花果も繚乱の花咲きたかろう

昭和一桁七つ転んで八つ起きる

倉吉市 山本玲子

厭な話そつと三猿利用する

背の視線ぐいぐい押され金縛り

委任状よきに計らう便利よさ

揚げ花火夜空を久し振りに見た

タイムバーゲンわたしに無駄遣いさせる

米子市 政岡 日枝子

老いた時計が味のある音を出す

勲章のように傷口見てもらう

魂ふるえて笛の音は泣かせる

うつらうつらと秋まで眠る太鼓です

どうしても生きよう花は咲いている

米子市 林 瑞枝

飄々と生き梅干しの愛一途

軽々と母を背負うた石の段

地平線の先まで見える鶴の首

晩鐘の響きが背なに来て止まる

花に舞う蜻蛉夫婦に詩がある

米子市 白根ふみ

どよめきのなかで竿灯立ちなおる
夏まつり他郷のおどり整然と

ミニトマトぎらぎら酷暑告げている

朝顔に今朝のいのちを確かめる

三徳山胸突き八丁ばかりなり

米子市 中井ゆき

無農薬やつとトマトが一つ熟れ

クーラーも私もこわれそうな夏

もの忘れの言いわけにしようこの暑さ

涼風に虫も私も深呼吸

もの言わぬ小さな命いとおいしい

米子市 門脇晶子

大黒柱 主の艶が出来てくる

七夕の笹に願いをぶらさげて

丸い背に苦労話を溜めてある

親と娘の糸はいつでもゆるみがち

しじみ汁吸ってふるさと思ひ出す

米子市 木村 富美子

一日を不思議な夢に乱される

カーテンで仕切っただけの試着室

喝采とカーテンコールに酔う余韻

一度だけ涙を見せたお父さん

太陽にそむいて銃の音がする

太陽と仲良しをして朝の雲

米子市 木村 春枝

散歩道朝の出逢いを占って

マンネリへ孫の気合いが効いて来る

愚かさを積んでは崩す気のあせり

ストレスもビールで消えるほどのもの

米子市 澤田 千春

元氣かい庭からのぞく父の松

沖からの手紙を今日も待っている

種袋ふればはずんだ明日の音

流れ藻が身の上語り合う浜辺

底ぬけに笑って帰る友がいる

米子市 野坂 なみ

ユネスコの報せに沸いた熊野三山

良寛の魅力ある字が読みきれぬ

やさしげな他人ばあちゃん気をつけて

向う岸へ泳ぎきるのはむずかしい

凡人で本音と嘘が見抜けない

米子市 青戸 田鶴

夏祭も重荷になった神主さん

塩までも偽ブランドをつけていた

ゴツゴツと木綿の魅力もった友

老人介護きれいな事ではすまされぬ

八月を癒す桔梗やおみなえし

法律も裏から見よう国会も

鳥取県 谷口 次男

腹が減る何もしないが腹が減る

その節はお世話になったミカン箱

札節が姿を消した国になり

うぬばれた天狗の鼻が宙に浮き

鳥取県 下田 茂登子

家出した猫が時どき夢に出る

神さまは哀しい別れくれていた

とれとれのトマト胡瓜を仕事場に

今の世に呪いの釘を打つと言う

見栄張って生きる人生つらからう

鳥取県 西原 艶子

愛らしいヘクソカズラが庭に咲き

清貧のくらし誇る花が咲き

お隣の猫も木陰が好きで来る

いっこへ漂着するのかわわたし

懺悔してみても戻らぬことばかり

鳥取県 澤裕 子

盲導犬クールで澄んだ目をしてる

ライバルがクールで負けたなと思う

くり返す非行は愛に飢えている

豊かさの中で省エネ忘れがち

超音波愛の結晶うつしだす

鳥取県 奥谷彩子

夢に手が届きそうです翔んでみる
たて糸横糸不揃いの愛紡ぐ

言い勝った胸ザワザワとフォルテシモ
見ごろ食べごろを自負している熟女
サーモンピンク着て白髪がよく似合う

鳥取県 近藤春恵

神様がくれた道なら迷わない

初孫を抱いてまだまだ元気です

初出勤しつかり結ぶ靴の紐

過疎に住むおふくろ偲びペンを持つ

頑張った父もガンには勝てなんだ

鳥取県 前坂なお美

金はないが有りそうな顔しておこう

嘘をつく嘘と気づかれないように

たつぷりと食べたあとから考える

手品師を一度びつくりさせてやろ

煩惱がない人いたら手を上げて

鳥取県 福西茶子

さらさらと何事もなく筆滑る

下駄の音を誘ってみたい夏の宵

傲慢に妻を携帯品にする

魂の抜けた愛犬抱いて寝る

不美人でさっぱり味の妻が好き

鳥取県 石谷美恵子

つぶてより痛いクールな目に射られ

ゴキブリも殺せぬ柔な夫という

二つずつ続くくしゃみが気に入らぬ

卵抱く雄ペンギンにつまされる

ゴミだけは両隣よりよく溜まり

鳥取県 林露杖

炎昼のそよそよ白し稲の花

朝飯がうまい八十八の夏

寝返れば老骨軋む熱帯夜

ざりざりの省略老いの盆用意

資産税納めるだけの荒屋敷

鳥取県 竹信照彦

台風の時もところにより禍福

漁火の真ん中においてイカを釣る

朝市で苗より安いナス キュウリ

百人で共同墓地を掃除する

初盆になった友にも会いに行く

鳥取県 土橋睦子

ささやきの賞味期限も切れませんでした

節約をしても寺には布施はせずむ

露ほども疑いもたずありがとう

赤とんぼ流転の中を飛んでいる

懂れたひとと踊ったクラス会

鳥取県 上田俊路

終戦日暫く時を止め思案

泳がずに余生歩いているプール

甲子園で聞けばこんな面白い校歌

人生はゲーム期待は明日もある

輝きを老いの背に秘め去る舞台

鳥取県 土橋はるお

納得をするまで男泳がせる

首吊りの真似は上手にせにや死ぬぞ

女とふたりでボートに乗った事がない

店員を妻に見立てて買う浴衣

勉強会と誘ってくれりゃ出易いよ

鳥取県 吉田孔美子

洗濯物今ならそうさまだ産める

子を産まぬ海は静かに閉じて行く

二次会へお誘いのない御用済み

宵から進む大切なおつき合い

柔肌をなぞったようにフェリー着く

鳥取県 埴寛子

暑すぎるヒトのくらしを忘れそう

戦乱の子らにわきたい夏休み

めくるたび指なめるくせ直らない

野良犬よおねがい尻尾ふらないで

ドジもなく無事な一日たまにある

鳥取県 福田登美

気負っても背中が丸くなっている

優しさに触れて孤独が癒やされる

響き合う友に恵まれ磨かれる

筋書きの通りにいかぬ運と福

病む夫を見届けるまで呆けられぬ

鳥取県 吉田弘子

カーテンで仕切るベッドの闘病記

無知識が取り越し苦労する病氣

今年また梅雨のけじめか被害事故

老いて知る幸健康な夫居て

水に銭いる過疎地にも防犯灯

鳥取県 鳥羽玲子

よく当たるこつそり買った宝くじ

親子猿愛の深さに時忘れ

もどかしい自分疲れも倍となり

親姉妹寄つてうなぎの食べくらべ

遠花火消えて無言の時を持つ

鳥取県 鳥羽直市

折おりに枯れた旨味を妻が出す

民宿へ肩のこらないふたり旅

夫婦けんか忘れた訛飛んで出る

順番のない人生を生きてゆく

人並みに歩きたいから苦勞する

鳥取県 山下節子

出世して公私のけじめ忘れ出す
簡単な形真ん円よう描かん
省エネをうたい文句の家電です
切り札の殺し文句を持つている
心まで老いぬようにと旅に出る

鳥取県 山本正光

まだ少し恋をする気を溜めている
君が代と日の丸すきで恙無し
百薬の長さん僕が好きらしい
けちに生き喰るほど貯めぼっくり寺
年ごとに余生どんどん多忙なり

鳥取県 西川和子

窓全部開いて今日の風にする
熱す頃になれば獣が現れる
白魚の指にバソコン叩かれる
熱すから親の心配絶え間ない
ポケットにラジオとペンとメモ帳と

鳥取県 蔵本悦子

鬼瓦たまにほんやりしたかろう
うっかりとせぬよう壺を刺激する
カナカナが鳴いて切なくなる日暮れ
人間の愚かさ鬼が見てしまう
しっかりと恋が出来そうカンナ咲く

鳥取県 盛田夢路

天秤の傾く方へ寄りたがる
誰を待つわけもないのに駅にくる
迂回して合歓の花咲く道ひとり
ご先祖が代わりばんこに夢まくら
ご免なさいお願いばかり阿弥陀さま

鳥取県 太田幸枝

棺桶に似た風呂桶が気にかかる
若いうち生めよ増やせと姑が言う
桶入りのカス漬けが来るお中元
熟すのを待たず娘に虫がつく
エアコンがいやで自然の汗をかく

鳥取県 平井栄翁

ここだけの話が好きな軽い口
名は知らぬ顔は知ってる散歩道
盃の本音こぼれる車座で
コスモスが待つて居ります無人駅
妻らしく生きて行けたため問う鏡

松江市 川本 畔

夏雲に無職が浮遊しています
のほほんの雲と私はハンモック
梅肉をちよろちよろ舐めて領いて
洞窟の雫に命すり合わす
追っかけて追っかけられて旅走る

松江市 安食友子

雲ゆるりあんなこんなの迷い子よ

衝動買い試着室での闘いだ

他人よりちよつぱりましなユーモラス

止まらない止めねばならぬ追慕です

仰ぎ見る過去もつれづれ流れ星

松江市 三島 淞 丘

朝市へ磯の匂いを買いにゆく

古里の思いも熱い祭り笛

割り箸が真つ直ぐ割れて今日は吉

夕焼けが水平線に紅をひく

爽やかな笑い伝わる電話口

松江市 銭山 昌 枝

贅沢な食材男の台所

親の威厳番傘ほどの重さかな

密室でわたくしだけの匙加減

自分史を書いて傷口まで見せる

家計簿の赤字が今に火を噴くぞ

松江市 小川 注 湖

汗かいた人の話をしゃんと聞く

還暦の迷う心に残る夢

九回裏敵失も運わが歓喜

棘のある言葉だったか飲みました

八十路にも冒険探すネオンドア

松江市 津川 紫 晃

約束を守り切ってる影法師

ひと言が多い男の喉仏

よい話聞きたい耳を掃除する

方程式解けぬ解こうとしない仲

灰汁少しずつ吐きだして詩を詠む

松江市 松 本 知恵子

あさがおのひと時猛暑忘れさせ

公約も知らず握手を返して

さつぱりと完熟トマト絞る朝

ごつごつのこころ夕陽に解けてゆく

開発の露骨な風が真正面

松江市 佐野 木 み え

試着室少し若やく色を着る

恵みの雨みようがも息をふき返す

草が伸び私は夏をもて余し

夾竹桃父の忌近く熱い夏

つるむらさきやつと今宵の食卓に

出雲市 小玉 満 江

大雨が去んでにっこり虹が立つ

大過なく過ぎた台風ありがとう

夏は行く疲れ切ってるワンピース

天空を舞った花火のいさぎ良さ

嬉しさによけいな事を言った悔い

出雲市 伊藤玲子

夏の夜の下駄が涼しい音くれる
夏祭り水面の月もへらへらと
泣いて笑って明日を手さぐりしています
握手してちよっぴり若さ盗みとる
うきうきの果てに溜息する財布

出雲市 石倉 芙佐子

嗚呼ああ転がり落ちたにぎりめし
真実は意外な貌の持ち主で
穏やかに歩いて行こう喜寿の坂
眉唾の貴方を信じたのも私
台風が目玉も方向音痴らし

出雲市 城 多喜

玄関で私の声を整える
新鮮な風が欲しくて旅に出る
星が降るポエムいっぱい播きながら
改札を出ると冷たい風に会う
お喋りな夏のカーテン風が好き

出雲市 多久和 敬子

定年のないキッチンに今日も立つ
へそくりでちよっぴり夢を追ってみる
化粧より素顔の笑顔美しい
そのままを映す鏡で光らない
冷蔵庫満席になる特売日

出雲市 青山久子

原点はいつもあつけらかんの風
ごつごつも流れ流れて丸くなる
手さぐりでわたしの宇宙たしかめる
実が落ちるみずみずしさの真ん中で
ワンちゃんに何時もすまぬという鎖

出雲市 吉岡 きみえ

反骨のレモン思いきり絞っている
唄いても踊りてもはずむ豆紋り
ひとりにはむなしさだけの窓の月
帰ること忘れて鬼とあそんでる
ひとりのむ酒の肴に遠花火

出雲市 岡 あきら

坊さんの都合で盆がやってくる
誤解されたまま過ぎてます先祖さま
点滴に聞いても答えただボタリ
病院のベッド軒は大嫌い
青空と流れる汗とそうめん

出雲市 小白金 房子

ふる里の自然に触れる安堵感
乞食まで嫌う農婦の陽やけ顔
七輪の栄螺泡吹くうちわ風
手の平に稲穂今年の作を読む
しあわせは十指合わせるお念仏

出雲市 岸 桂子

年寄りの愚痴頷いて流行る医者
急がずに刻を食べてる古希の坂
苦勞した人からもらう良い話
風鈴よ君は八方美人だな
安物の時計休まず遅れない

出雲市 園山 多賀子

向日葵の黄にスランプは許されず
居丈高カンナの朱には及ばない
豆の木が空まで届く夢を抱く
しもつけ草何時か解明する無実
踊る阿呆独りひとりが皆主役

島根県 榊原 秀子

さるすべりよく咲いてます寺の庭
風鈴が私をホッとさす音色
胡瓜もみ心のあやを知る酸いさ
私の過去を静かに焼く炎
もぎたてのトマトが甘い誕生日

島根県 森 茂美

まだまだ煎餅かむ歯ちゃんとおる
妻逝つて二度めのお盆来る暑さ
人名は軽し此処にも人柱
鐘の音が山を伝うて日が暮れる
素麵もしっかり食べた盆の日

島根県 持田 多輝子

走馬灯記憶の中にある慕情
うぬぼれを洗い流した素顔の美
こだわりを流す夫婦の宿浴衣
運命を変えたあの日の交差点
手術する決断医師の目を信じ

島根県 多々納 テル子

輪の中で乱れぬように音頭とる
草の中野菜小さくかくれんぼ
まだ似合う元氣出そうな派手な服
充電をしながら翼広げてる
さりげなく友とつき合う自然体

岡山市 井上 柳五郎

お悔みの欄はなるべくチラリ見る
面倒なことは御免と妥協する
ご時世かこれが常識かと思ひ
探し物大事な時間また無駄に
無為徒食こんな日日にてよいのかな

倉敷市 小野 克枝

許しましよう忘れましよと月走る
弥陀の手にすがる心の迷い道
乗換えの出来ぬ切符を持たされる
躓いた石から貰う熱き愛
温かい言葉を探す別れ道

岡山県 小林 妻子

豊年であれかし朝の田の水見
いつまで生きる傘寿の坂にある起伏
すでに黒子意見の通る訳がない

百日紅咲けよ生きよと墓掃除
反抗はせぬワンワンと暑い夏

岡山県 大石 あすなろ

ストレスでもぐら叩きの腕をあげ
横文字へ脳が混戦ばかりする
三面記事が話題になっている巷
おねだりにゆっくり迫る鼻濁音
この苦言いつかは解る時が来る

岡山県 山本 玉恵

橋のたもとでまたくり返すひとり言
扇子から優しい風が隣から
古里のポスト人待ち顔で立つ
置き薬の中改めて一人住む
沈黙思考 納得の行くまでを

岡山県 国米 きくゑ

へとへとになっても介護者愚痴言わず
親の背の汗で育った子は素直
完投の汗さわやかに立ち台
余生まだ燃える五感を持っている
照る日曇る日 人生暦さまざまに

岡山県 福嶋 智恵子

集中雨地球の怒りかも知れず
雷のテロに劣らぬ暴れよう
青春の汗生涯の糧となる
年金の昼寝付きでも愚痴を言う
少年は地図にない路歩いてる

広島市 森田 文

いもうとを笑わせにゆくところでず
やがて地に還るはなしを猫とする
指揮棒を急にわたされ惑いぬ
賞められもしないに休む隙がない
人柄の良さに見とれて笑みかえす

竹原市 小島 蘭幸

真夏日が続くスニーカーでも買うか
笑えないシャツを裏返しに着ても
鶴を折る父の墓参りを終えて
すべり台の上から古里が見える
定年退職してもケイタイ離せない

竹原市 森井 菁居

トラブルのもとあいまいな受け答え
誘われた時がチャンスと思うべし
失敗のもとに気負いも入れ込みも
在庫処分という触れ込みに引っかけかり
無理をせぬ事決断に迷うても

竹原市 石原 淑子

広島県 藤 解 静 風

忘れな草枯らした夏の罪と罰
ユーモラスやもりの見せるナイトショウ

八起きめで掴んだ運の共白髪

モナリザの瞳の奥にある和み

世界一火鉢で咲いた姫睡蓮

竹原市 正畑 半 覚

逃げはせぬ人生土砂降りは覚悟

大失敗した経験がものをいう

食べている時の私の凄い顔

挫折した数だけ竹の節がある

激しさは愛だとおもう滝の水

竹原市 時 広 一 路

菓飲むための胃菓飲まされる

五線では足りぬ日もある風の唄

地下の街方向音痴誘ってる

自販機の誇りカードは使わさぬ

玩具箱のんびりさせた子の育ち

竹原市 岩 本 笑 子

夏休みセミも飛ばないほど暑い

生かされて盆灯籠を出している

切り取り線 真つすく切れた事がない

パズル解く残業の夫待ちながら

何のツケだろう台風二度三度

還付金受け取る判を妻が押す

広島県 福 島 万 年

盆踊り孫の太鼓によく弾む

くさぐさの些事に余命の花咲かす

ドーム前核廃絶の友を待つ

つめ放題つめる袋が破れても

税金を払っていても自己責任

宇部市 平 田 実 男

肴より雰囲気で呑む酒の味

ブランドのバッグ請求書でふくれ

両親の歪から出る非行の芽

バツイチの女のほうにある魅力

大臣になると出てくるスキヤンダル

美祿市 安平次 弘 道

間一髪シャッターチャンスまた逃し

折れた矢を集め真実書き残し

胸底にあるのは深い海だった

示唆に富む話にいつか引き込まれ

納得がいかにぬか時間だけが過ぎ

東かがわ市 伊勢 八重子

風鈴もこの暑さには音を上げる

目に余る台風一過の置き土産

夢のよな話にひよいと騙される

出会うたび何時も別れが待っている

松山市 高橋 宏 臣

行列の中ほどで待つ生欠伸

シャボン玉他人になって割れてゆく

信号を守っていつも出遅れる

人間の弱み知ってる宝くじ

高知県 小澤 幸 泉

神さまの恵み酷暑に耐えている

八月の黒い海から来る便り

うば捨てに行けと年金攻めたてる

よみがえる船の棺にある戦後

青森県 小寺 花 峯

医者もいない鬼も留守で昼の酒

にやにやと舌なめずりした熟爛

人生の曲がり角です汗を拭く

規格から漏れて幸せ夫婦独楽

さいたま市 八田 敏

豪雨禍の地に濟まないが雨を待つ

ペランダで足りず歩道で花作り

体形も亡父そっくりになる運命

老体にみんなの体操丁度合い

滋賀県 中 宗 明

あれこれと差配する癖治らない

根回しをつけるうまさ身を助け

定退後ほんやり過ごす味気なさ

スケジュール殺人的な分刻み

大阪市 清水 絹 子

里帰り大きな顔のお盆月

泣き声にママもゆとりの三人目

徳用マツチこれでどうぞと辻地蔵

カルテ見る医師の口もと見のがさぬ

大阪市 岡 本 久 峰

戦友の無念さ偲ぶ盆の月

亡妻に両手を合わす朝の膳

念力で余生ふんばる瘦せ蛙

いくばくの余生か夏を愛おしむ

大阪市 中 田 あい子

ナイターの外野に恋の花が咲く

味うすい母煮る野菜を皆が待つ

お遍路の四国路菅さんよい笑顔

すすむ世に薄情なこと多すぎる

河内長野市 井 上 喜 醉

豊作を守る案山子のアロハシャツ

冷や汗が背筋を走る大ピンチ

一年も先の決意を笑われる

湖を我がものにした旅の窓

河内長野市 植村喜代

降りかけて思案している炎暑かな
病む友へ近況しらす暑さかな

手は出さぬ口だけ出して困らせる
空地さえあればすぐ建ちすぐ入居

岸和田市 亀井皎月

赤を着て還暦年の勇氣出す
さよならと里の峠をあとにする

音たててつるべ落しに消えて行く
一杯呑みもクエでやろうと電話来る

岸和田市 中島寿海

夏さらい冬もさらいは我儘よ
元首相覚えていない一億円

オレオレに誰かと聞けばオレと言う
お年寄昼寝大事な日課にし

大東市 児玉蛙

深酒に足をとられて友の肩
惚けぬよう日記を書いて生きている

目立ちたがりどこにでもすぐ輪の中に
顔出せば役が待ってた吹き溜まり

高槻市 生田義一

故郷の浜は道路に姿変え
朝日浴び海峡急ぐ船一艘

梅雨空を見上げて妻は洗濯魔
合併の相手同士が牙をむき

豊中市 岸田知香子

閑な店昼寝付きです雨の午後
花金に焼き肉店に椅子並ぶ

花火見に浴衣着れども下駄履けず
断りもなしに台風家を呑む

豊中市 樫谷郁子

この炎暑蟬に早よから起される
大合唱蟬に文句を言うてみる

遠い日の母の背を恋う子守唄
癒されて風の匂いにひとり居る

枚方市 二宮山久

再職の仕事こたえるこの猛暑
孫が来て嬉しくもありつかれぎみ

玉の汗かいて再職かみしめる
今年また元気で見る遠花火

守口市 井上桂作

パソコンより泥んこ遊び大事な子
電線で二羽の鳥が打ち合わせ

簡単に消されぬ思いゆえ悩み
衣食住足りてこのうえ何望む

神戸市 伊勢田毅

ねじ巻いてねじ巻いて古希遊んでいる
改革の要所要所で官の影

肩書を問わぬ集いで座が和み
出生率無策の国にある不安

西宮市 秋 元 てる

亡き人の元氣な一句色紙掛け(林はつ絵さん逝く 2句)

川柳も麻雀も習う生き方も

額アジサイ根付くと電話声はずむ

昭和恋し初期も終りも共に生き

大和郡山市 坊 農 柳 弘

香焚いて待つ人が居る秋夜長

大輪をがんじがらめに菊花展

如才なく立ち振る舞っているやる気

閑空離婚夫婦茶碗の引き出物

和歌山市 宮 本 三喜夫

年寄りは何時もびくびく道歩く

若者に優先席を陣取られ

過疎の村おとなりの市に吸い込まれ

杜撰さが大手の驕り事故隠す

鳥取市 杉 本 孝 男

スイッチオン背筋も寒くなるニユース

百葉の長だと許す名医ぶり

墨の香に浸り心も癒される

いざという時に人間試される

倉吉市 米 田 幸 子

神さまの裁きか脳も底をつき

不可能という字が消えた母の辞書

リーダーがやれというたらテロもやる

元氣でも明日の保証は何も無い

米子市 光 井 玲 子

振り出しに戻り一から学びます

学ばねば脳味噌朽ちてしまいう

隣でも久しぶりだと立ち話

病み上がり食が進めばほっとする

鳥取県 佐 伯 や え

大山さんのおかげで秋の空を見る

おつきあい花が助太刀してくれる

毎日黒酢百まで生きる準備です

ひと雨が梨も心もふとらせる

鳥取県 深 田 俱 久

努力不足傘寿になって悔いてます

オリンピック老兵の眼は日章旗

初盆の懺悔話へ大ジョッキ

立秋の暦変色する暑さ

鳥取県 平 尾 菜 美

夕焼けにひたすら走りすぎたのね

痒いとこに届くうれしいHCU(高度集中治療室)

健康が取り得だったがけつまずき

花ひとつ咲かず煩惱温める

出雲市 富 田 蘭 水

朝顔に負けず体操つづけてる

刹那主義生活スタイル変えさせる

よく乾くタオル二十枚洗濯す

ピラミッドいつかはきつと頂きを

島根県 伊藤 寿美

老老介護遠い花火を聞きながら
昨日鳴いた蟬にやさしいこぼれ萩
ベツカム様ヨソ様日本平和だね
まだ流されぬ瘡があつたチャイナ服

岡山県 福原 悦子

合格日どきどきとなる祖母の胸
七十路羽ばたく夢はまだ消えず
半世紀つかず離れず友の輪に
ライバルの尻尾しっかりと掴んでる

倉敷市 井上 富子

めろめろに男を溶かす片笑窪
迷走も挫折も越えた不精髭
真剣な視線にノーと言いきげ
やんわりと問えば頷く昼の月

大阪川柳人クラブ大阪府知事表彰受賞記念祝賀会

日時 十月三十日(土) 十一時開場
場所 大阪キャッスルホテル三F錦城閣
大阪地下鉄・京阪電車天満橋駅の上
句会 宿題「華」「遊ぶ」二名共選、選者当日発表
各題二句 出句締切 十一時半
申込切 十月十日必着(ハガキか電話)

申込先 〒532 0012 大阪市淀川区木川東4-3-34-212
大堀正明 電話06-63305145336
会費 6000円

第27回神戸川柳大会

日時 10月31日(日) 午前10時開場
場所 兵庫県民会館9F大ホール
TEL 078-321-2131
JR元町、阪神元町、地下鉄県庁前
課題 出句締切11時30分・開会13時
「五」 前田千津子 選
「輪(わ)」 梶原サナエ 選
「地」 前田美巳代 選
「水」 竹下勳二郎 選
「火」 小松原爽介 選
「風」 泉比呂史 選
「空」 大森一甲 選
各題2句、席題なし、欠席投句拝辞
会費 2000円
賞 各題秀句に呈賞
主催 神戸川柳協会
後援 (予定)神戸市・神戸市教育委員会
神戸市議会ほか

第5回いたみ市民川柳大会

とき 11月21日(日) 10時30分開場
ところ 伊丹市立文化会館6F 中ホール
電話 072-778-8788
阪急伊丹歩3分・JR伊丹歩8分
トークショー 進藤エミ & クッキーズ
題と選者(各題2句、席題、12時締切、出席者のみ)
「熱」(事前投句) 延寿庵野鶴 選
「驚く」 久保田半蔵門 選
「情」 小松原爽介 選
「優しい」 泉比呂史 選
「うっとり」 奥田みつ子 選
「ついで」 田中新一 選
参加費 2000円 軽食、発表誌呈
事前投句 締切11月5日(消印有効)
投句先及び問い合わせ先
いたみ川柳会事務局
〒664-0858 伊丹市西台5丁目5-26
岡村方
TEL・FAX 072-772-3655
主催 いたみ川柳会

自選集

橘 高 薫 風

八 木 千 代

入院は指名手配の惨めさだ
これが秋エスプレッソも摩周湖も
銀河から続く洪滞車の灯り
アフガンの子供と青空が見たい
ブータンの犬もその国らしい顔

宮 口 笛 生

八 十 田 洞 庵

真つ昼間駅へ急いでいるひとり
人生のおまけと思う八十歳
柏手を打てば神様いる気配
盆参り和尚短い経を上げ
五百円玉貯金始めた貯金箱

森 下 愛 論

両 川 洋 々

裏切りの風を集めて重たがる
愛解けず朝な夕なに嗚咽する
目を閉じて愛のむくろを処刑する
バラの首ストンと剪つて罪を抱く
有り余る自由に孤独な丸い月

冠が少し負担になる齡
歳月に冠 驕ることなきや
簪も珠もきらめくので迷う
冠は匣に 自由な闇のなか
穏やかに褪せてゆきたい箱の中
ピエロって特等席をひいきする
別れの美学男に戻る道がない
蟻の列軍靴のひびき無く進む
ぬくぬくとくらし明日を見失う
貧富の差知らぬ愛犬青テント
正義という言葉が凶器かも知れぬ
職安へわたしの首を売りに行く
難民の目にひもじいと書いてある
リストラの心へ水雨降り止まぬ
生きてれば笑う日だってあるだろう

阿萬萬的

砂を唾む思いで空転しています
取り敢えずメモをコピーにして残す
残り火を抱いて後継者に託す
歳かしらプラスの知恵が浮かばない
開けすっぱの僕へいらいらしてる妻

石川 侃流洞

年金は晩酌あとは息子にみな頼り
百歳目前米寿強気にさせる酒
老婆の愚痴聞いてやるにも骨が折れ
お隣とトラブル猫が庭を掘る
メダルラッシュ アテネの風が心地よい

板尾 岳人

にぎりめし母が握ってくれたこげ
アドバイスされても困るのです恋
恋なのか愛なのか秋もつれ糸
なんやかや言うても好きな爪楊枝
お忘れでございませんか陶冶の詩

奥田 みつ子

憎しみを抱いた数だけ悔いを抱く
人間の殻が時々邪魔になる
明日散る花とも知らず自己主張
朝顔の蕾数えている笑顔
青空の片隅に置くプロフィール

河井庸佑

控え目な態度で風を確かめる
価値観の違いを知って距離を取る
反省を生かせず轍を踏み悔やむ
潮時と読んで一転出る強気
勝ち目ない相手捨て身の策を取る

川島 諷云児

風もまた旅人宿の戸をたたく
修羅いくつ越えれば見える花浄土
情実の糸に絡まれ動けない
馬耳東風とほけ上手になりました
身から出た錆が骨身に沁みる秋

木村 あきら

人間の無欲の貌は美しい
曲り角蟻も一寸は考える
合掌をする手汚れていませんか
握手して先ず外堀を埋めておく
影法師だけは迷わずついて来る

工藤 吟笑

再起する意欲に天も味方する
計りには乗らぬ重さの母の慈悲
土の香が肌に染み入る父の詩
一期一会今日の命の重さ知る
葉飲み死にたい等と嘘つパチ

黒川紫香

助け合う柳友の死涙しきり(柳宏子さんを悼む 2句)

言う事を言えば塔の彦左衛門

入院二カ月看護師さんのいい笑顔

時々看護師さんに叱られる

待望の食事許され元氣つく

小西雄々

遠花火介護疲れの手を休め

修羅になる前にうっちゃりしておこう

ぜいたくな苦勞と思うダイエツト

雷鳴は遠くに去った月の冴え

台風のパワー平和に使いたい

小林由多香

体温を越える暑さに今日も耐え

アテネ見て眠れぬ暑い夜を過ごす

暑いのはわたしだけではいらしい

酔いざめの水飲み干して生きかえる

灰皿があるのに畳まで焦がし

斉藤 姦

蝉の声聞こえてきそう子の版画

りんどうの藍この風土生んだ色

ひまわりが五輪マークの顔で咲き

滝の音入れて撮ろうよ夏の旅

むらさきの花と出逢った日の至福

田口虹汀

半年は過ぎた七夕何願う

歳じやない趣味に手を出す足を出す

半年に盆も供日も這入ってる

山笠は観て頂いて評を待つ

明神様はお旅所を出て出雲行き

竹内紫鏑

終のすみかで熱中症になる隠居

監督のジェスチャーくらべ甲子園

古豪勝つ校歌の作者天に在り

大窯の廃止で町の演奏会(常滑市)

父若しブルーシャツを子に合わせ(カラオケで)

田中正坊

体重が減ってところが重くなる

体力がつけば氣力も満ちてくる

肩肘を張ったらこの世生きにくい

アンダンテもう急がない慌てない

来年も生きるつもりのカレンダー

玉置重人

我が家にもおもしろい電話よくかかる

娘の家に行くと元氣な妻になる

年金で暮らし年金気にかかる

男手が欲しいと思う瓶の蓋

クーラーが嫌いで家庭内別居

恒松 町紅

知恵などはないが頼れる筆をもつ
ゲートルの汗思い出す八月忌
まだ若く見えると言われもう一杯
二次会の帰りが高い話し声
湖にあるさつがある茜雲

遠山 可住

切腹に代り自爆のゲリラ戦
その後は存せぬ絵馬が風に鳴り
みんなみでの通りはずれた宝くじ
紙一重という敗戦を評価され
どっちみち損で金持ちけんかせぬ

土橋 螢

黙祷をして思い出の中に入る
魂を抜く盃蘭盆の香を焚く
拉致拉致と予算を消化してゆくばかり
合併の犠牲にならぬ公務員
人の世に涙を落とす仏さま

西村 早苗

早ばやとウインドーしめ雨に飲み
突然のやさしさに遇う日暮れどき
やわらかな果し状がくる花冷える
むらさきの雨に情けが燃えてくる
ここからはひとりでお舞い蝶々さん

仁部 四郎

英霊の意味に諸説と父が言う
隠しても嘘は吐くなど父は言う
父が言うカネを借りるな女から
金次郎マルクス読めと父が言う
すべてではないがおカネと父が言う

野村 太茂津

平和だナア武器弾薬の玩具箱
作業着のデブちゃん一人拉致しよう
人殺し君の病名バラノイア
戦友よ貴様禁煙困り者
桂馬跳び思考で挑む人情味

波多野 五楽庵

ニコライ堂母の洗礼名にあう
友が先だつた清めの塩が置いてある
うしろ指さされ噂の風の中
あなたとの逢瀬途切れた過去がある
分娩室へ向かう十五の細い肩

藤村 女

生きてゆく大地しつかと蟻の視野
お月見に小芋供える祖母達者
わらべ唄焚火が匂う芋が焼け
手を曳けば影もあまえている月夜
祭太鼓遠くへ聞いて月と寝る

第31回記念堺まつり協賛
紙上川柳大会

投句要項

便箋4枚(4題分)の左右に同じ句を
2句ずつ記入。番号により整理するため
無記名のこと。

封筒には住所・氏名を明記。

出句先

〒593-8305 堺市堀上緑町2丁16-3
河内天笑方 堺川柳会

投句締切 10月15日

投句料 1,000円

賞 各題秀句賞

題と選者

「酒」岩田 明子・前 たもつ 共選
「弱い」大野佐代子・本田 智彦 共選
「迷う」赤松ますみ・土橋 螢 共選
「嘘」桜井 千秀・河内 天笑 共選

速浅の浜辺に奇岩勢ぞろい(下地島)
白浪をたてて大原へ高速船(宮古島)
両側にマンゲローブが顔を見せ(西表島)
サキシマのスオが誇っている板根
抑留の島おもし出すマンゲローブ
思わんとこで思わん人に会うものだ
天然の雨に濡れたたいハウス物
無理をして笑い皺だと言ってくれ
聞く方は冷静酒が喋らせる
盗塁も技盗むのも君の腕

河内天笑

芳地狸村

第46回豊中市民川柳大会

とき 11月23日(祝) 正午開場

ところ 豊中市立中央公民館1Fホール

阪急宝塚線曾根駅東100米

会費 1500円(軽食、記念品、発表誌呈)

宿題 出句締切 午後1時

(順不同) 「答」谷 垣 郁 郎 選
「光」油 谷 克 己 選
「花」上 野 多 恵 子 選
「夢」足 立 淑 子 選
「嘘」久保田 半蔵門 選
「鬼」岩 田 明 子 選
「福」坊 農 柳 弘 選

順不同・各題2句

賞 豊中市長賞ほか

主催 豊中川柳会・豊中市立中央公民館

連絡先 〒560-0015 豊中市赤阪1-6-9

石川 勝

TEL・FAX 06-6854-1990(石川)

または 06-6303-7297(本田)

せんりゅうぐるーぶ GOKEN
5周年記念川柳大会

日時 10月29日(金) 10時開場

場所 メルパルク松山

TEL 089-945-6411

参加費 1500円(昼食・発表誌呈)

題と選者

投句締切11時30分・披講13時30分

「語」山本 毅・清水かおり 選
「集」木下 草風・白井ミツ子 選
「燃」小島 蘭幸・広嶋 英子 選
「雑詠」原田否可立・塩見 草映 選
いずれも表現方法自由、各題2句

欠席投句受付 投句料 1000円

用紙自由 10月20日必着

投句先 〒791-0212

愛媛県温泉郡重信町田窪1976-17

野口三代子 宛

主催 せんりゅうぐるーぶ GOKEN

後援 松山市・松山市文化協会・愛媛新聞社

水煙抄

奥田 みつ子 選

今治市 塩路 よしみ

若き日の友と語らう終戦日

病窓の人に手を振る朝歩き

今までのつけが回ってくる老後

まるめたりまるめられたり舌の技

日立市 加藤 権悟

ヒロシマのガイドに汗のポランティア

しつかりと明日へ日銭のめしをくい

妥協した日から男の転びぐせ

叱らない父の背中が丸くなる

望郷の風はふるさとへとかける

王道を歩く男の無位無冠

枚方市 二宮 紫鳳

猛暑にも負けじと孫の豆台風

夏バテも飛ばしてくれた孫パワー

着メロも冬のソナタで酔ってみる

汗だくのビールがうまい宵の風

大汗をかいて心の垢おとす

幽玄のムードおしゃれな薪能

クラシック聞いているわたし哲学者

花の素顔どこにも嘘は見当らず

可も不可もない道歩くただ歩く

ステンドグラス異国の匂うレストラン

まっとうに生き秒針の忙しさ

大阪市 三浦 千津子

生きて行く限りは虹を抱き続け

立ち直る背に追風という味方

善人の肩書きいつも疲れ気味

ブライドは無縁目尻の笑い皺

嫁姑温度差保つ匙加減

群れを出て少し孤独もいいもんだ

泉佐野市 備後 三代子

夜半の月消した昔のよみがえり

何もかも認められそうお月さま

横浜市 川島良子

嫁さんと仲良しごっこしています

リセットで出直す夫婦ふたり旅

通夜帰り無言で夫と手を繋ぐ

新盆へ月下美人の花が舞い

液晶か旅かで迷う五輪年

札幌市 三浦強一

白髪染め止め定年の貌となる

日記には書かぬ思い出懐かしい

父に酒母におはぎの募参り

午後のコーヒー平和ってこれなんだ

乾盃へまだまだ遠い式次第

米子市 足立由美子

未熟さが逆に魅力の事もある

未知数にちよつぱり望みかけている

来月も予定ぎつしり埋まる幸

喜びが足音高くやって来た

消去法いつも楽しい方選ぶ

東京都 井上つよし

風鈴を聞きつつ友へかもめーる

エアコン様と呼びたいほどの四十度

ペンばてて暑中見舞もとどこおり

暑かろが一度行きたい阿波踊り

立たされて泣いた母校へ赴任する

和泉市 横山捷也

それぞれに月日刻んで姉妹

眼薬を多目にさしてペンをとる

ご機嫌がななめ味噌汁辛すぎる

左遷地の米の旨さをかみしめる

顔にしわ刻んで父の四面楚歌

西予市 黒田茂代

鳩時計が唄うおやつの間でず

ひと時のやすらぎ主婦のティータム

よそ行きのシャイなマスクに変えて逢う

肩の荷も一緒に背負う影法師

捨て犬が家族になった雨の夜

河内長野市 大西文次

馬の顔長いと馬は知らなんだ

何がまたそんなに悲し蟬しぐれ

言い出し兵衛後へはひかぬど根性

他所さんの庭でひょうたんぶら下り

生きとればまたよい事もある四面楚歌

羽曳野市 森下一知

転作を先祖に詫げる里の母

下手な嘘長い尻尾が見えている

生き上手風の流れに逆らわず

肩書きの過去を引きずる怒り肩

逃げ道はナビゲーターに映らない

京都市 清水英旺

箕面市 寺井柳童

鬱の気をシャワー強くし流し切る
天を突き裂いて長刀鉾がゆく

打ち水に翅を畳んでいる揚羽
蛤がみな口開けている猛暑

六十年涸れぬ涙の原爆忌

入道雲飽きず見ているエアポート

梅花藻を褥に夏の夢を見る

華氏911は米 摂氏40度は日本

そば通のうんちく味をまずくする

少子化に絶滅危惧種日本人

三田市 堀 正和

東京都 小川 賀世子

愚痴っぽい話似合わぬピヤホール
開墾の汗も溜めてる千枚田

花束の裏の邪心も受けている
カルガモの親子見ている親子連れ

よく喋る男ハンカチ白いまま

チラシから主婦の一日動き出す

美人とは少しずれてる鼻の位置

敵にすれば怖いと思う友ひとり

うっかりがあるから人に好かれてる

悲喜劇を重ねて女強くなり

鳥根県 福岡博利

藤井寺市 伊藤アヤ子

ゆっくりと仮面はずして散歩する

母さんにも聞こえてますか遠花火

口だけは減らずにたたく涼み台

ごはんだよママが呼んでるあかね雲

目覚しのベルかともがう蟬のこえ

甲子園入道雲と焼けた肌

不便だが覚える気ないカタカナ語

泣き事は言うまいと決め胸を張る

妻のすいせん納豆バナナヨーグルト

とび込める懐いつも開けておく

大阪市 升成 好

伊丹市 延寿庵 野鶴

引き際の美学多くを語らない

へこたれず青汁飲んで百名山

信号の青が見えない失意の日

聴導犬目線しつかりガイドする

そばに居る亭主が邪魔な冬ソナタ

捨て駒のト金に勇気ためされる

ドラマ見て夫婦は別なことと思う

飲み干して仲間と和むクラス会

すんなりと水に流して酒を酌む

付加価値をつけてブランド競い合い

メルボルン 藤原 ポン吉

衣食足り逆に残して礼しらず
大吉でツキを使つて不安増す
がまぐちの中身ほとんど妻の愚痴
内視鏡妻の本音も見えるかな
晩酌に欠かせないのは妻の愛

シドニー 坂上 のり子

食べられるため生かさされている家畜
平和だが鶴彬よむ惨い過去
少子化を嘆くが資源ない日本
トラブルの妃 西にも東にも
本たちが買つて買つてと騒ぐよう

シドニー 三谷 たん吉

四十度自然破壊のお灸だろ
たつた今探してるもの何だっけ
ボケ防止確かに今朝も飲んだはず
知ってんだほんとはあいついい奴だ
大空をキャンパスにして雲の絵師

高知県 桑名 孝雄

雑学はじいが出番の夏休み
旧任地杜の都は温かい
ふた昔戻る東北弁の酒
土佐湾と画布の違つたオホーツク
知床の旅無事でした尿酸値

愛媛県 花岡 順子

蝉時雨あなたが少し遠くなる
割り切ると少し気持が楽になる
まだ残る未練心の隙を突く
行間を埋める言葉が見つからぬ
悲しみを少し癒している疲れ

府中市 馬場 利子

ローカルの駅で出会つた童唄
暗い世に明るい画布を掛けて置く
秋の坂阿弥陀の声に救われる
ひと言の重み知つてるコップ酒
もやもやの心を救う母の辞書

倉敷市 撰 喜子

水争い水汲むポンプ知らぬ過去
種のない西瓜に一番ない前歯
卒業写真メガネの光る僕がいる
夏休み子の手伝いが高くつき
エアコンが猛暑をさらに暑くする

出雲市 小豆沢 歌子

好きな椅子座れる明日に燃えている
褒められて背中汗が滲み出る
眼鏡拭く本の続きがよみたくて
ホッチキス止めて忘れることにする
稲光り辛い浮世を叱咤する

安来市 原 煩惱児

蛙さえこころして鳴く隠岐の鳥

転勤の数ほど歌う子の校歌

台風が逸れたニユースに茶がうまい

懐手龍馬が握る自由主義

玉葱が橋で売れてる淡路島

島根県 毛利 幸

ときめいてコップの水が揺れている

すれ違い二本の線が交わらず

打ち明けてふっと大きく息をつく

一寸した出会いが人の運を決め

人生の道標いつも蛇行する

島根県 菅田 かつ子

散歩道芒に頬をくすぐられ

口げんかしてもやっぱり思いやり

そしてまた亡母が歩いた道をゆく

番犬の昼寝暑さに向きを変え

朝露へトマト一時息をつき

鳥取市 森 美智代

窓からの風に喜ぶ膝小僧

冬の日に分けて欲しいなこの暑さ

太陽と遊ぶ麦わら帽子見ぬ

終戦日の生まれ死ぬまで重い日よ

ケアハウス何のてらいもあるものか

鳥取市 山口 千代子

猛暑だと愚痴を言うまいやがて秋

行くあても誰を待つでもない化粧

長生きに感謝をしつつまた不安

同年配慰め合つて小半日

花よりもやさしい嫁はまだきれ

米子市 小塩 智加恵

この暑さきつと夏やせするだろう

温泉も我が家と同じ入浴剤

絵手紙の日記始めた七十五

太陽が主役だ明日は洗濯日

預金無し おれおれ電話かからない

鳥取県 鈴木 一弘

迎え火を焚く子も居ない過疎の村

城下町茶髪行きかう武者の路

椎の実を拾い千年懐古する

萩叢に埋まった句碑に黄蝶舞う

長生きの秘訣はすべて八分目

和歌山市 柏原 夕胡

エラー繰り返し返し成長するのです

鏡拭く心を磨くように拭く

人込みを縫ってあなたへ辿り着く

愛されて花はとろりと夢の中

一番の獣はヒト科だと思ふ

和歌山県 辻内次根

故郷の水でしっかり洗う顔
深呼吸空の広さを知っている
道草が好きで今でも夢を見る
犬掻きの飛沫の中に僕がいる
背筋伸ばすと今日の自分が見えてくる

和歌山県 森下順子

キッチンのリフォームまだまだ働く気
道出来て芋大根も盗まれる
負けて勝つ方法論を勉強中
言うときはしつかりという年の功
ばけぬよう季節に合うた服を選る

奈良県 江波正純

どの子にも一度金星とらせたい
スモッグで希望の星がよく見えぬ
古希前の語学ステイに夢踊る
掘り出しのワインと遊ぶ夕餉時
真心の見えぬ政治が大手ふる

神戸市 両川無限

あれこれと迷い初心にたどりつく
愚痴聞いてくれる優しい耳がある
面会謝絶唯今森の中にいる
これしきの坂機関車はさびてない
たつぷりと叱って最後ちよつと賞め

神戸市 木村忠義

今日もまた今日を大事にして生きる
善いことをすると幸せ感がわく
数よりも一輪にある美しさ
字を忘れないよう楷書体で書く
休日のないお日様に学ばねば

神戸市 田中章子

いつの日か介護される身ダイエツト
気にせんといてつと気にすることを言う
森林の風酸欠の脳揺する
逃げるとこあれば寄り道したくなる
悩み去り次の悩みを抱えこむ

相生市 村木信子

新涼が誘う紫お茶の席
雑音をこぼして愛を確かめる
封印の秘密を洩らすすさま風
伝承へふる里の藍守り継ぐ
加減乗除ゆつくり母が足した塩

尼崎市 河津正治

鳴き砂が乙女の心締めつける
おさな児と痛み分け合うかすり傷
奇麗ごと言つて痛みも消せぬまま
石ひとつ投げて水面に嘩たて
追憶の妻にもあつた泣きばくろ

川西市 井本清山

青大将庭に遊びに来る我が家
気張らない年金暮らし有り難い
七十路の汗が嬉しいボランテイヤ
茶の湯には遠いが朝のティーバッグ
老いて今腹も言葉も八分目

篠山市 谷田多美子

うぐいすと油蟬鳴く神の森
ふるさとの野辺は亡夫の遊び場所
初めての寺の仁王がなつかしく
熱中症仏もほしい水と塩
一人居の今日の幕引く冷や奴

三田市 石原歳子

想い出を作り旅へ出た夫婦
そよ風が本と私を眠らせる
たんぼの綿毛が一つ汽車の旅
花図鑑読んで頷く名の由来
稲光り内緒話に水をさす

宝塚市 丸山孔一

風薫る朝日を食って深呼吸
人生のカーナビ欲しい長い夜
古い地図道なき道を今走る
嫁姑事故を起さぬ車間距離
一泊で効く効かぬのと温泉場

西脇市 七反田順子

夢みつつ一つ思いで生きている
父さんは大黒柱と教えられ
夫の留守金魚のように泳いでる
月下美人主のいぬ間に咲いている
マンガ本読んで子どもと同レベル

大阪市 小谷集一

旧友の便り思い出よみがえる
屈辱の言葉をバネにして生きる
うなずいているが納得出来ぬ顔
まだ妻に好きだと言ったことがない
満天の星大きく生きること誓う

大阪市 池上清治

大ジョッキぐいと飲み乾す細い美女
思い切り飲める酒蔵見学日
橿原の宮で日本の今憂う
満開のあじさい愛でて寺の坂
続けてもゴールは見えぬ芸の道

大阪市 尾崎黄紅

考えぬ葦が繁殖して困る
昨日が見えても明日が見えない遠眼鏡
叱るだけ叱っておいて呑みにこい
地図の上での世界一周小半時
二階級特進という悲劇

大阪市 井丸昌紀

主人公生まれながらに主人公
余呉余市余部どこか情緒あり
メダカにもお遊戯させる歌心
ゆつくりと飛んでるみたい飛行雲
セミ捕りに殻だけ採ってきた息子

大阪市 伏見雅明

父の背を眺め子供は別の道
環境を叫ぶ企業事故かくし
星空を企画に生かす過疎の村
多趣味だがどれも根気に裏切られ
生傷が絶えず塾とは無縁の子

池田市 上村隆

下心あると分かって目を逸らす
口下手が想いの文を用意する
お若いと言われ五歳もサバを読む
ごつい手でぐっと差し出す赤い薔薇
喋れないけれど英紙は読んでいる

泉佐野市 稲葉洋

変りなく秋は来たけど胃は老いて
コメ文化日本人で御座候
止めなはれ老眼鏡であら捜し
梵鐘の音も光も澄んで秋
晩秋の日暮れに自分史を重ね

河内長野市 印藤智子

原爆忌ただ黙祷を捧ぐのみ
さとうきび畑の唄に独り泣く
水筒を持ち歩いたね戦中も
怠慢を暑さのせいとケ・セラ・セラ
暑い中神経痛はやって来る

河内長野市 木太久 正一

お金より心のゆとり聖書よむ
生きるとはスパー通いと見つけたり
熊蟬が孫の帰省を待っている
母の呼ぶ声するまでは遊んだ日
食べ頃を狙い定めて切るメロン

岸和田市 森元 ふみよ

藍染の浴衣が似合う君が好き
一幕が終ってほっとお茶にする
老いてから年相応の友が増え
ペアルック手をつないでる老夫妻
下手に生きそれでも楽し古稀祝い

岸和田市 堤 楯代

老いてなお輝いてほし好きな方
不器用が孫の機嫌をとっている
誕生日うれしくないが鯛を焼く
時代劇だけ熱心なおじいさん
怪談でたちうちできぬこの暑さ

堺市奥 時雄

疑わぬ瞳に打算腰くだけ
それぞれが打算まとまるわけがない
やんわりとえくぼを見せて断わられ
罰金が高いので酒こらえてる
ふるさとの寺にひぐらし聞きに行く

堺市 大久保 伸子

美しく燃えて生きよとひまわりは
衣食住足りて礼節しりません
余生なおいくたび人の情に会い
鳥籠の中で叫んでいる私
立話金木屋が聞いている

堺市 荻野 像山

店を出た近くの遠い出前寿司
母さんの遺影だんだん若くなり
相談はしてるが決めるのは女房
矢印に沿うて呑気に生きてます
夕立に生気を貰う夏の宵

吹田市 二宮 栄子

クラス会音痴の歌が座をわかつ
迎え火に先祖の笑顔なつかしい
遠い日の母の声聞く夕茜
盆踊り たいこの音に里心
老春の夢追いながら趣味の会

吹田市 木下 敏子

もう少し背伸びしたいと言う踵
昨日より少し伸ばした万歩計
自己流のリズムで運ぶ墨の彩
飾り気がないから人が寄ってくる
美しい言葉挿んである日記

藤井寺市 若松 雅枝

魂に響く言葉を探してる
本音吐き胸のしこりがやつと消え
幸せになっておくれと母の唄
かけ違いその後の釘見あたらぬ
肩組んで歩く幸せ逃げぬよう

八尾市 松葉 君江

巻き戻す法話心の栄養に
さりげない言葉の裏にある温み
これ以上もう無理ですと古鏡
いくじない鬼は言いわけばかりする
ねぎらいのたった一言座がなごむ

八尾市 赤木 妙子

ものはずみその後ふたりの無言劇
せつない夜午前三時の雨しきり
蝶も私も羽根のはころび綴りおり
運勢はチャンスOfYearというけれど
シルバライフ ウツという字がまだ書けぬ

八尾市 寺川 はじむ

自信家の不意打ち食っている素顔
心にもないお世辞だが聞き惚れる
笑い足りぬか なかなか門に來ない福
ぽっかりと大穴あけて孫帰る
何事もプラス思考と言うお方

八尾市 平川 幸枝

頷いて首を傾げてすむ話
うたた寝の不意に午前か午後なのか
老いるほど歌いたくなる青春譜
誰が吹くトランペットのしみ透る
悲しみを少し押しやる心太

八尾市 西川 義明

妻と母喫水線にある理解
腹の虫二合の酒で上機嫌
星の砂二人でひろう夏の恋
手をあげるだけで心が通じ合う
風通る方へ寝返りうつ昼寝

八尾市 脇 俊子

ひと言で甘い辛いが生きてくる
文明の利器に馴らされ四季知らず
人生の余白に少しハサミ入れ
心なかな素直になれぬ鬼がいる
損得を言うと言情けが後ろ向く

八尾市 中島 春江

この猛暑女集いて大ジョッキ
大ねぶた跳人したがえ迫り来る
うつらうつらテレビがひとりしゃべってる
生きやすい方へ伸びゆく樹木でも
美人だが嫁には向かぬ娘が街に

大阪府 神野 千恵子

前向きの中身いつしか七変化
早起きの余裕たつぷり紅茶入れ
横柄な役人に効く鼻薬
歩を緩め一呼吸して別の顔
さらさらと茶漬けで胸のつかえとれ

京都市 三宅 満子

青春切符 熟女で車中花が咲く
雑草も子孫を残す知恵があり
浸水より暑いがましと我慢する
大観の瀑布の軸に涼もらう
神様の力を過信してしまう

長岡京市 山田 葉子

遠い日の罪胸底を波立てる
一筆に滲み出ている誠実さ
誠意には少し野心も見え隠れ
誠実なあなたの愛が重たくて
度が合わぬ眼鏡息抜きさせてくれ

犬山市 金子 美千代

一呼吸おけと遮断機降りてくれ
幸せな色に梅干漬けあがり
いい人と言われ妻には見せぬ顔
付合いに仕入れるネタの斜め読み
不本意な妥協許した自己嫌悪

岐阜市 平野 あずま

若者の汗頼もしい水害地
斜め読みの社説を借りた正義論
人救う宗教テロの後ろ楯
一匹となった金魚に広い鉢
考えたギャグが受けない世代の差

佐渡市 高野 不二

孫からの元気を貰う夏休み
夏やせの言葉が俺に通じない
ほけた方が幸せかとも思う
水呑んで今日も生きてる三十度
年金で昼寝が出来る有難さ

横浜市 巖田 かず枝

縁の下 女支えているらしい
好かれようなんて思うとくたびれる
原爆の悲しみ癒えぬ暑い夏
真夏日が大きな顔でのし歩く
申年の下着お守り代わりとす

横浜市 布山 嘉信

山行きの前夜久弥で確かめる
飼い主の顔によく似る犬のたち
虫の音に秋の足音熱帯夜
ブランドの服に中味を見透かされ
繰り返す嘘が真実おびて来る

東京都 やまぐち 珠美

おとがいへ軽い風味で恋を噛む
迷つてる紫煙左右の頬を撫で
炎天に疑心の種を試される
熱風を逃そう木肌なでてやる
純粹へひとを許さない伶俐

日高市 根岸 方子

ストレスで料理あふれる冷蔵庫
逆風が今の私の分岐点
試着室首から下へ酔ってます
反論は鏡と対話した後
反論は心に秘めて風を待ち

秋田県 湊 修水

匿名の善意が酷暑ぶつとばす
青春譜雲も湧きたつ甲子園
茶の間まで球児の汗がとんでくる
冗談にも言えない言葉胃に溜る
貧乏性直球ばかり投げている

和歌山市 土屋 起世子

潮鳴りが耳にやさしい海の家
まっ白いエプロン母の自負である

母よりも長い人生白髪染め
金婚式とろ火で愛を煮ています

奈良市 乾 春雄

私服に替えた途端女が匂い出す
失敗して見栄と未練が渦を巻く
マラソンの孤独を癒す旗の波
風船も男も紐を切りたがる

池田市 多田 契子

蟬もまた夜明け待つのか生き急ぐ
拝観はふくよかな胸弁財天
帰り来て恋なされませ原爆忌
賞味期限切れる平和が恐ろしい

堺市 河盛 龍三

飛び去った蝶が生まれた木に戻る
台風も時にはもてるこの暑さ
頑張れぬ子にも優しく手を伸ばす
生きてさえ居れば何時かはまた会える

府中市 藤岡 ヒデコ

真夏日と今日も続ける根くらべ
ひと枝を切つて良くなる風通し
身ぶるいをして病葉を振り落とす
夕立は供のカミナリ威張らせる

高知市 伊野部 和江

若者の笑顔嬉しい夏祭り
おしゃれ心良いなと思う老婦人
蝉一つためらっている庭簾
人生のシナリオが無い第二章

買ひ替えた眼鏡はしないアラ探し
友という温い扉に迎えられ
雑炊へ匠の茶碗苦笑い
雷の一喝待つている日照り

島根県 武島 ちよえ

今至福青葉雨音露天風呂
禁煙でコソコソ貯めて旅に出る
隈取りですっきりなつた目鼻立ち
高僧の読経に心揺すられる

奈良市 矢野 良一

どの位置にいても輝く好きな人
暑さには負けぬ誕生日は大暑
パソコンに遊ぶと弾む老いの指
一鉢の土と約束苗植える

北九州市 岡田 幸生

八月の疼きにも似た青い空
兄弟の結束かたい祭り笛
プラトニックラブ歯痒い想い抱いている
あこがれた土を涙で持ち帰る

柏原市 伴 洋子

今治市 野村清美

新鮮な曲がり胡瓜の味を褒め
ひき戻すビデオ亡夫の弾む声
大雨が一人暮らしをおびやかす
食欲がやっと出て来た一夜漬け

鳥取県 竹森富久江

老いの身に経費のかさむ森がある
我慢したブランコ揺する秋のおと
点滅の経費を煽る計の知らせ
やんちゃした涙が笑うあどけなさ

寝屋川市 岡本勲

波風が立たぬようにと黙っとく
小ぎれいにちよつと気どつたお婆ちゃん
自転車で緑の風とデートする
ぬくもりをちよつともらいに絵本展

高知県 百田幸

知事さんと握手した手を抱きしめる
良い言葉頭の中へメモをする
雑草は踏まれる度に根を広げ
駄馬なりに余生に夢のあるくらし

羽曳野市 永田章司

腰痛で亡母の老後を今に知る
山深き禅寺に聞く蟬しぐれ
クーラーでうなりをあげる電気代
台風も進路を迷う温暖化

大阪市 吉田富美

道問うて行き過ぎもどる炎天下
哀別の胸かき立てる遠花火
続く計へ大暑の上着手に持ちて
ほうたるは哭かぬものかと思ふ

出雲市 川島和歌子

蟬の声やがて賑わう盆座敷
雑草も私の意地と根比べ
盂蘭盆会無沙汰を詫びて今日帰る
おしゃれして残り火燃やす老いのむち

岸和田市 坂口英雄

うまそうだ髭もビールに濡れている
九条に口出しするな星条旗
天神祭 乳房も踊るギャル御輿
貸し借りもなく薄れてゆくなさけ

鳥取県 山岡久枝

丸刈りになりたいような猛暑くる
いい汗がうまいビールにしてくれる
辛抱の昔の母が思われる
安らげる椅子を一對おいてある

八尾市 田中トシエ

売り言葉変化球でも打ち返し
盆に来る極道息子墓洗う
相談に六法めいた返事する
朝顔のつぼみかぞえて祖母早寝

宮崎市 串間 安子

菅笠に身をあずけける遍路旅

山の峰越えて遍路のバスが往く

どこまでも自転車で行く元気です

どっこいと越えたはずだがすべる足

串間市 高畑 滝

病院で死んだ祖先は親父から

手料理の手抜きを刻むガスメーター

沖の瀬の船虫騒ぐ温暖化

吹き抜けの家屋に御座す五常の札

唐津市 岩崎 實

及ばねど少し力を貯えて

まとまらぬ一句をかかえ拭き掃除

瞬間の出会いいい顔いい顔だ

盆前の帰省荷物が先に着き

今治市 渡邊 伊津志

血の疼き黙って冷えた梨を剥く

湖の底に落とした鈴が鳴る

お茶の葉を切らし話が滞る

揺れながら薄い葉裏で繭をする

愛媛県 宮本 末子

貧乏に勇氣もあつた母の顔

手鏡に眉間の皺を見る怖さ

おろおろと女野焼の火を守る

長生きも一途に願うことはない

東かがわ市 向山 治延

暑くとも秋つれて来る赤トンボ

登り坂かばい合つてる老夫婦

孫見送り手ぶらになつた飛行場

秋風につい誘われて旅に出る

宇部市 高山 清子

言い訳をするほどはまる蟻地獄

非常口確保してから吐く意見

老醜の鏡眉描き紅をさす

老いてなお恋は曲者我なくし

府中市 岩本 雅代

丑の日よ老いもスタミナうな井で

朝刊の友の句読んで弾む吾

何事もプラス志向で余白詰め

コマーシャル甘い言葉に乗る破目に

岡山県 矢谷 富士野

混む車故郷に父母の居る限り

いつの間に風に乗つてる独り言

誠実を映す鏡が汚れてる

縁結び神様いけずなさいます

松江市 松浦 登志子

熱帯夜律儀な虫が挨拶に

消費税計算力が錆びてきた

妊婦さん今年初めて見たような

暑いのは人間の所為受けとめる

松江市 山根 邦代

満天の星に心が乱れます
ブライドが邪魔をしていて動けない
あれこれと欲しくはないが抱えこむ
ふるさとは校歌をうたう児がない

出雲市 荒木 英子

我世代地球悪戯過ぎたよう
風鈴の爽やかな音に気が和み
七夕に願いをこめて明日を行く
タイ締めて背すじを伸ばす秋恋し

出雲市 加藤 スズコ

八月忌包むドラマを雲が知る
背を向けた里に帰りを照らす月
そろいの浴衣うちわの似合う地藏盆
棚経の衣に送るうちわ風

鳥取市 岡田 信恵

筋力を鍛えて老化吹き飛ばす
笑顔こそ心が咲いている人だ
頑張れと背中を押してくれる友
里帰り古道たどって墓参り

鳥取市 谷岡 清子

笑う日に泣く日巡りて盆の花
敗戦の記憶がもどる盆の月
炎天に脳ひからびてうかぬ顔
胸裂ける改めてきく玉音に

鳥取市 河田 のり代

無我夢中走る若さに腰がのび
報恩感謝盆に構えて孫にとく
目のウロコ娘の一言にポロリ落ち
借金の友の便りに涙湧く

鳥取市 近藤 秋星

しゃんしゃん祭ネコも杓子も踊りゃんせ
納涼祭済まねば寮母落ち着けぬ
熱中症になることもなく秋の風
限界に挑む五輪の選手たち

鳥取市 西尾 敬之介

かげろうのめらめら燃える舗装道
般若湯炎暑にもえて南無阿弥陀
熱暑中祭ばやしもよろけ来る
裾からげ庭に水撒く若女将

倉吉市 酒井 美美子

あちこちの祭で地球熱く燃え
誰彼に挨拶しては輪を広げ
たくましく頼り甲斐ある夫です
妻の留守晩酌はずみはめはずす

倉吉市 前田 喜美子

川柳は脳の泉だ涸らすまい
星空の静けさあるかイラクにも
名利を訪ね一時善を積む
涼しさとぬくもり貰う庭の松

境港市 中井虎尾

流行歌おぼえた頃にブーム過ぎ

顔よりも心に惚れた今の妻

それぞれのカラーぶつける甲子園

世の色に合わせて生きる七変化

米子市 猪森 スミエ

秋に翔ぶ体鍛える夏休み

星空のショーだよみんな出ておいで

うっかりと毒蛇に合う言葉尻

台風の爪跡埋めるポラントイア

鳥取県 藤山弘子

素肌美人こまめにメイク直します

いつまでも化粧忘れぬおばあさん

流れ星願いありすぎ間にあわぬ

連ドラへ入りこみすぎもらい泣き

鳥取県 岡村孝明

夏の花暑さに負けぬ気を貰う

ペランダの鉢枝いじる平和な図

永年の夫婦ブランコ息合わす

瀬戸の島まるで箱庭歎喜湧く

鳥取県 橋谷静江

ほそほそと暮してごみは山とでる

家系にはなかったカラー若い人

うっかりが重なり惚けとまちがえる

母さんの引いた矢印どおり行く

鳥取県 毎田信翁

気がつけばよいと神様ご満足

良き亡妻の思い出語る日が続く

リードされ踊っていたいシンデレラ

ヒロシマの核廃絶の鐘がなる

和歌山市 根田 よしこ

夏休み子ども等の声静かすぎ

がんばるぞ孫の花嫁見るまでは

年金を頂くまでは死ぬません

子が宿りやつと母親らしい顔

和歌山市 坂部 かずみ

銀行が国旗集めて説明し

海外の国債を買う新時代

今朝もまた新聞と問答をする

ぶらんこを造ってくれた亡父おもう

和歌山市 喜田 准一

正論に情が絡んで歪み出す

八方の風向き読んで吐く意見

丁寧になった言葉で距離が開き

結末の読めるドラマに泣いている

和歌山市 失川 侃太

鯛の骨突つ張りすぎたのだと思う

あの頃のケーキ吹き消しやすかった

おひさまが化粧し出して夏終る

自動ドアー失意の俺は通すなよ

和歌山県 村中悦男

一匹のはえ特急に乗っている
この慈雨は野菜に代り札を言う
ときめきの稲の穂の愛らしさ
試食菓子ぐるっと試食して買わず

和歌山県 木村徑子

大句集初歩の私へ光る星
かすむ目で人の心を読んでいる
人間へ警告するか荒れる夏
咲く花のリレーに孤独癒される

奈良市 田中賢治

乳母車笑顔結びつ電車降り
虎の子も夢を求めて株を見る
原産地ルール食み出す品揃え
古稀過ぎて冬のソナタに妻虜

生駒市 小西稔

そよ風に木の葉は笑う暑い日も
老夫婦孫の笑いで仲直り
打算無く心の通うボランティア
指摘されはじめてルール身にしみる

神戸市 山田婦美子

冷コーの氷の音に夏が来る
入道雲あの元気さは何だろう
未練などない炎天の花木槿
ああ言えばこう言う人に道を説く

尼崎市 桑原東園

ユニークな太鼓のリズム歩も弾む
頑固者時の流れに楯を突く
自力では叶わぬことを神頼み
戒名を確かめ亡母の墓洗う

尼崎市 小池幸子

プライドの小さな明かり持ち続け
温泉は透明でよし白でよし
反省に反省重ね聞き上手
終わるまで少しの見栄を捨てはせぬ

尼崎市 古川正子

ランドダンス輪になり踊る若き日よ
体温より高い気温に疲れてる
蝉しぐれなぜかカラスの声きかず
盆施餓鬼年に一度の人に会う

三田市 辻開子

がんがんにクーラー利かせ熱いお茶
盆月に極楽ですと亡母の声
剥き出しに根性だせる夫婦です
メールメモ指を使ってポケ防止

西宮市 片山忠

化粧品使う男に用はない
権限を持つと女は許さない
私でも有れば上げた二億円
買っても苦勞をしると言う他人

兵庫 黒崎 美紗子

パソコンへ歳の差もなく仲間入り
桃の葉の昔の教えよく効いた

オイと呼ぶ何か佳い事あつたかな
同じ趣味寄れば楽しい事ばかり

兵庫 岩本 美緒子

初心には遠い八十路を歩いてる
段差ない部屋に躓く笑えない

夏こたえ身辺整理せまりくる
クーラーに窓も開けてる贅沢さ

大阪 中村 忠敬

水溜りさがす蜻蛉に都市砂漠
森消えてマンモス団地出現す

ヨン様に恋する妻だほつとこう
妖怪が潜む場所ないネオン街

大阪 平井 露芳

九条は守らなあかん原爆忌

ハモ好きが祝う祇園と天神さん
フセインを捕えただけのイラク戦

百均で傘を買ったら雨が止み

大阪 寺井 弘子

へそルック雷さんも目を回す
衣食足りマナー守れぬ人が増え

バイキング気取っていたら元とれず
有り難う今日も元氣と亡母に告げ

大阪 中村 れんげ

囲まれて長寿楽しむ孫がいて
血脈か娘の姿我が姿

甲子園見て男の子ほしくなり
屑籠でささやいて没句たち

大阪 吉内 タカ子

味覚だけやつともどつた今朝のパン
蟬しぐれ癒されている朝の膳

スケジュールこなせる勇氣弾みだす
赤トンボ催促にきて暑かろう

大阪 木村 青生

占いの言葉に頼る惰性の日
ぶっちゃけた話がもとで左遷の地

オルゴール鳴りつ放して孫の恋
白黒の写真 初恋隠れてる

泉大津 助川 和美

忘れたい事いっぱい酒を呑む

恩師の死幕切れにしたクラス会
母が逝き急に老け込む父を見る

使い方いろいろあるね億の金

河内長野 坂上 淳司

おじいちゃんと呼んでええのは孫だけじゃ
風の盆十日も続く前夜祭

朝飯は茄子や胡瓜に会ってから
目薬を注しても鱗落ちません

河内長野市 内海綾乃

お茶漬がおいしく箸がよく動く

花火より月が美し合掌す

虹が出た何処まで続く走つて見る

桃直販所旗がおいでとはためいて

高槻市 安田忠子

下駄箱という名で靴の勢揃い

怪我をして生きる悦び教えられ

三成の悔しさ残る馬防柵

知らぬ間に少年なりし孫まぶし

高槻市 富田美義

マニフェスト針千本の無い永田

少子化のツケで余生が落着かず

人情もケータイ時代や薄っぺら

妻の留守花ごぞゴロ寝好きでんね

高槻市 大崎侑子

知識人水道水に騒ぎ過ぎ

移り気で続ける効果まだ知らぬ

後釜が続け発展喜べぬ

年賀状廃止か否か悩む時期

豊中市 源田啓生

昭和史の軍靴再び近づく夏

御来駕とある誘い状涼の里

クーラーに縋れば下肢がもの申す

フルートを奏でる風のサッシ窓

富田林市 古田千華

偉い子も親思う子もいなくなり

食材も信じられない国にほん

引き詰めた髪型似合う美人かな

副作用恐くて薬加減する

羽曳野市 吉村久仁雄

まっとうに生きると増える敵の数

撫でさする手術の跡の生きる意志

再就職決まり独りのネギ刻む

ハスの穴とおると甘い記紀の酒

羽曳野市 福田悦子

流行語に選ばれるかも熱中症

戦争を知らぬ球児の甲子園

来年も鳴きに来てくれ蟬しぐれ

あの時のことは忘れぬ原爆碑

東大阪市 米田水昇

残酷焼き動くあわびに手を合わせ

ローカル車帽子忘れた女の子

胸に住む父母夫をひき出して

格子窓ゆかた姿の紅をひく

東大阪市 今岡貞人

七月の雨悪戯が過ぎている

長生きの健康法があり過ぎる

終の日も近い楽しい日を過ごす

国会は倫理の旗をいつ掲げる

枚方市 大昇隆 広

転勤で今日から浜の風の中
源平の時が溶け込む壇ノ浦
里暮らし性善説を疑わず
夕焼けが包む山里夕餉の灯

枚方市 小川良吉

国技館多国籍軍がんばるね
平和ですせめて猛暑は辛抱だ
子にすべて下駄を預けた老いの日々
割れるまで履いた戦時のちびた下駄

藤井寺市 増井ヨシ枝

酒タバコ供え亡夫の初の盆
ナスの馬仕立て亡夫の帰りまつ
猫のあとついて涼しい場所探し
かげろうの中に忘れた三輪車

藤井寺市 西村栄一

たこ焼の匂いに負けた散歩道
船に酔う前にお酒に酔うて寝る
バラ園で一際鼻を寄せるバラ
つつがなく生きて夫婦の低い鼻

藤井寺市 俣野登志子

留守中の新聞翫って読む
軽井沢の空気をつれて帰りたい
森の宿線香火火で盛り上がる
美味しいと肥えたお口に言わせたい

藤井寺市 吉田喜代子
絵手紙からふるさとの蝉飛びでそう
打ち水に風の道知る猫がいる
お盆だけは出掛けず昔話など
近くに居てとつても遠い倦怠期

藤井寺市 鈴木いさお

情念の深さおんなに敵わない
亡き友の酒癖までが懐かしい
他人様の幸せばかり目にうつり
特上を食食べたつもりで並にする

箕面市 中山春代

登校の列あきあかね低く飛ぶ
ふるさとは新盆小さい父の杖
亡母のさと昔むかしの風が吹く
ケータイの輪が眩しくて入れない

八尾市 田邊浩三

惚けるのが怖くてさがす老いの春
趣味見つけ老いの毎日生き生きと
ここだけの話とどんと洩れていく
カラオケへ昔の春を買いにゆく

大阪府 若月祐作

故郷の山河に憩う八十路会
独酌で旅情を愛でて露天風呂
耳よりな話を聞いてはずむ酒
ときめきは手帳の隅に書き留め

大阪府 高木道子

短命の思いのたけをさけぶ蟬
ひたすらに平和を願う八月忌
救急車闇に止まるや声を絶つ
墓参り頭上の鴉落ち着かず

大阪府 小栢 こそづえ

歳だとは言いたくないが物忘れ
おしゃべりがご馳走の中盛つてある
雷が浄土の風もつれて来る
はち切れる若さがほしい孫をみる

大阪府 畑 中節子

古い忘れワイドに生きる今日の幸
脇役の可憐な花も褒めてやり
朝市の口も動くし手も動く
嫁の留守わたし出番と腕振う

滋賀県 久保和友

国鉄のOB会だか切符買う
へんねしと読ませる嫉妬大阪弁
へんねしの心は捨てた口縄坂
ウォーキング今日は堺で途中下車

大山市 関 本 かつ子

風鈴の誘いに乗らぬ熱帯夜
エアコンの一度でもめる部屋の冷え
夏祭り外様と気づく団地族
勝ち進む意外な位置に母校の名

大山市 吉田幸子

聞き分けのない虫顔へ悪ふざけ
爪痕を残し素知らぬ顔で去り
俺流の気合が幅を効かす酒
いつの間に覚えた九九のリズム感

尾張旭市 三浦 きぬ

争いもなく肅々と蟻の列
野良猫に起こされまずは餌をやり
心臓に悪いサッカー決勝戦
貫禄がついて頭髮薄くなり

愛知県 河合 ますみ

ころがれば白詰草の波の中
生きている証小さな棘痛み
老残は撮らず心のキャンパスに
夕空にラファエロの色まだ残り

静岡県 中西 雅

頂いた命の綱を切らすまい
逆縁の私を包む手の温み
我が庭のミニ博愛でる万歩計
この暑さめげず見あげる白い百合

横浜市 金森 徳三

この暑さ熱中症か めだか浮く
熱中症怖くてはずむ大ジョッキ
お巡りさん昔にかえせ治安維持
ごみ捨てに二度のおつとめレジ袋

平成十六年度 路郎賞

路郎賞準優秀作第一席

鳥取県

豊中市 吉田 あずき

激動を生きた証が骨にある

光ってる間はいらぬ飾りもの

つまりいた段差は信じられぬほど

自問自答私を裁く甘いムチ

なだめられ騙され渋のぬけた柿

新家 完司



気分良く腹減ってゆく日曜日

紳士録よりおもしろい花図鑑

祭りから帰って暗い灯を点す

この星の端っこ借りて蒲団敷く

腕二本抱き合うように出来ている

路郎賞準優秀作第二席

愛知県 早川 盛夫

負けたんだなユニホームがまっ白だ

判断は間違っていない回り道

一本の道へ迷ってばかりいる

雑草のままですぶとく生きてやる

人間に生まれしまったなと思う

柳歴

昭和五十九年

昭和六十年

平成十一年

川柳塔社同人

川柳展望社会員

大山滝句座創立

現在、大山滝句座世話人

川柳塔社の同人であるからには、いつかは欲しいと願っていた賞ですが、まだまだ先のことだ、とも思っていました。二十一年目に頂くことが出来まして、喜びもひとしおです。

創作より雑用に時間を取られている昨今、今回の受賞は、「もつと真剣に取り組め！」という先達からの厳しく温かい「拳骨」と受け止めています。ありがとうございます。

平成十六年度 川柳塔賞

川柳塔賞準優秀作第一席

西予市

大阪市 升成好



黒田茂代

お茶室の二畳小さな大宇宙

有頂天すくとんと落ちた水溜まり

言い訳を探す重たい傘の中

今日の友明日もきつと友だろう

この道しか行けぬこの道しか知らぬ

いける口ですなと猪口がにじり寄り
妻を撮る少しピントを甘くして
同じミスしても美人は許される
拜啓と書いて季節の色探す
ゲーム機の手では飛ばない竹トンプ

川柳塔賞準優秀作第二席

鳥取県 西原真一

あなたからもらった胸のあたたかさ
楽しんだ後はかたづけ待っている

私にはプラス思考は荷が重い

万策が尽きたあぐらをかいている
空バケツだから大きな音たてる

川柳塔賞受賞の報、誠にありがとうございます。
ました。このような身に余る立派な賞を頂き
感激に心が震えております。

柳歴

平成六年 鹿の子吟社入会(昨年廃誌)

平成九年 川柳塔社誌友

「まつやま」の皆様や、個人的にも励まし、
支えて下さった方に心から感謝申し上げます。

平成十四年

川柳塔賞準優秀作受賞

今後とも川柳を生涯歩む道として、友とし
て精進して参りたいと思います。ありがとう
ございました。

平成十五年

川柳まつやま吟社入会

路 郎 賞 得 点 表 (応募総数174名)

1位 = 5点 2位 = 4点 3位 = 3点 4位 = 2点 5位 = 1点 (表の数字は得点)

選者	作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
橘高	薫風			5	1	2						3				4					
河内	天笑				1	2					4	5				3					
板尾	岳人			5					3	4	2			1							
斉藤	苺	1	2	5					3						4						
島	ひかる	3		2					1										4		5
大内	朝子	5	4	3				2											1		
海老池	洋			5				4			3									1	2
川端	一步			3	5				2								4		1		
津守	柳伸					5						2	4					1			3
鶴田	遠野	1	5		4	3														2	
宮崎	シマ子			5		4				1								2	3		
山本	希久子			5				2			1	3							4		
田辺	鹿太			2	3										1				5	4	
西口	いわえ			4	3			2										5	1		
松下	比ろ志	3			2				5				4						1		
榎原	公子		4						5		2	1							3		
福本	英子					1					5	2			4					3	
植田	一京			5				2	4										3		1
谷口	次男						5			1		3							2		4
西原	艶子	5				3				2	4										1
森山	盛桜			4	2							5	1	3							
岸	桂子			5	4							1	2						3		
竹治	ちかし						2	5						4	3				1		
吉岡	さみえ			5	2			1							3						4
井上	富子			5			2	4			1		3								
藤解	静風			3	4		2	5										1			
赤川	菊野		2		5			3		1										4	
中居	善信			3	2				4										1	5	
		18	17	74	38	20	11	34	23	9	22	25	14	8	15	7	4	10	41	10	20
		録沢	徳田	新家	早川	米澤	津川	山口	村上	山岡	安土	神夏	村上	菊地	高橋	星野	池内	岸本	吉田	石堂	清原
		風花	ひろこ	完司	盛夫	俣子	紫晃	光久	直樹	富美子	理恵	磯典子	玄也	政勝	岳水	きらり	かおり	孝子	あずき	潤子	悦子

川柳塔賞得点表 (応募総数 80名)

1位=5点 2位=4点 3位=3点 4位=2点 5位=1点 (表の数字は得点)

作家 選者	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
橘高 薫風			3	2					1		5	4								
河内 天笑				5							2			4			3			1
板尾 岳人	4				1						5	2			3					
斉藤 荔	1	5	3	4											2					
島 ひかる				5		1	4					2			3					
大内 朝子											5			1	3	4				2
海老池 洋	5					3				2			1			4				
川端 一步		3			4			2					5	1						
津守 柳伸			4					1				2	3					5		
鶴田 遠野			3		5					2	1							4		
宮崎シマ子							2	4			3	1	5							
山本希久子				3	5						1	2						4		
田辺 鹿太		3			2							1	4	5						
西口いわゑ		1			2	3							5				4			
松下比ろ志					1	3		5								2				4
榎原 公子				5	2	3								1		4				
福本 英子				4								3	5	1				2		
植田 一京					3	4						2	5					1		
谷口 次男						4						1	3		5					2
西原 艶子		5							4		3					1		2		
森山 盛桜			1		2						5	4	3							
岸 桂子		1			4						3		5							2
竹治ちかし							3			5	4							1	2	
吉岡きみえ				4	2								5						1	3
井上 富子				4			5				3	2			1					
藤解 静風			4	3								1		5			2			
赤川 菊野		1		3			2	5		4										
中居 善信				1									3	5			4		2	
	10	19	18	④3	33	21	16	17	5	13	④2	24	⑤3	23	14	21	6	23	3	11
	大西 文次	若松 雅枝	三浦 強一	升成 好	両川 無限	山田 婦美子	堀 正和	矢野 良一	根岸 方子	吉田 弘子	西原 真一	伴 洋子	黒田 茂代	村中 悦男	山田 葉子	花岡 順子	藤井 則彦	川島 良子	黒崎 美紗子	川島 和歌子

二賞選考規定 (要約)

- ① 路郎賞 川柳塔欄の入選句から5句
川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から5句
昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月10日必着で本社宛郵送する。
- ② 第一次選は名誉主幹・主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長・選考委員で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。
- ③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席(五点)、第二席(四点)、第三席(三点)、第四席(二点)、第五席(一点)の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。
- ④ 第二次選者
本社関係 名誉主幹・主幹・理事長
地方関係 ⅠⅡブロック()選者数
【北海道・東北 関東 北陸(2)】
【京都・奈良(1)】【大阪(6)】【兵庫(3)】
【和歌山(2)】【鳥取(4)】【島根(3)】
【岡山・広島・山口(2)】【四国・九州(2)】
計25名
地方関係の選者は、適宜交代制をとり、均衡をはかることにする。
- ⑤ 川柳塔欄・水煙抄欄に六ヶ月以上出句した人に応募資格を認める。

川柳塔社各賞選考規定

- ① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年十月に表彰する。
 - ② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。
 - ③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を授賞しない。
 - ④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には授賞しない。
 - ⑤ 路郎賞・川柳塔賞の選者は、その任期中は路郎賞の対象としない。また、愛染帖・茴香の花欄の選者も、路郎賞の対象としない。
 - ⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、別途に定める。
 - ⑦ 愛染帖賞・茴香の花賞は、それぞれ選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。
 - ⑧ 一路賞・各地柳壇賞は、それぞれの選者が候補作品を主幹に提出し、授賞句を決定する。
- (備考)
この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成十二年度から実施するものとする。

お祝いのことば

河内 天 笑

記録破りの暑さがつづいたこの夏でしたが、そんな暑さも何のその、例年通り8月12日に第一次選のため本社事務所へ集まり、いざ戦わんかなの構えで選考にとりかかりました。きりりと引き締まった面持ちはたのもしく、やる気が伝わって参ります。

一次選者の目を通り、厳選された二賞候補がそれぞれ約40名分私に手渡され、そのいずれをも20枚に絞る作業は辛くも厳しいものであります。

他の追従を許さず路郎賞を獲得された新家完司氏、準賞の吉田あずきさん、早川盛夫氏おめでとう。特に所属の会から出て自分の道を歩き出した盛夫氏には幸先よい受賞になりました。

川柳塔賞の黒田茂代さんは、一昨年の準賞を経ての受賞、準賞の升成好氏ほんとうにおめでとう。準賞二席の西原真一氏は、鳥取の同人・西原艶子さんのご息子で、今は親子での活躍を期待します。

昨年の路郎賞に続いて愛染帖賞獲得の高瀬霜石氏、茴香の花賞の鴨谷瑠美子さん、一路賞の北野哲男氏、各地柳壇賞の奥谷彩子さん、たゆまぬ努力が結晶して今回の受賞となりました。

今年には男性六名、女性四名と久しぶりに男性優位の受賞でした。

二賞選考経緯

木本 朱夏

第二次選者を昨年に引き続き、今年度も全国を九ブロックに分け二十五名を選出し名誉主幹、主幹、理事長を加えて二十八名と決定。

応募締切後の八月十二日、第一次選者が本社事務所を集まった。路郎賞に百七十四名、川柳塔賞に八十名の応募があった。

規定違反がないか、全作品を川柳塔誌で確認した。選考委員全員が全応募作品と慎重に真剣に向き合い、選出した二賞それぞれ数十編の中から、最後に主幹が各賞二十編ずつを選出。コピーし二次選者に郵送した。返送されてきた選考葉書を二十二日に整理し、規定違反がないか再度確認のうえ、それぞれの受賞者が決定した。

残念ながら今年もまた応募締切後に届いた作品が何通かあった。必ず締切日を確認して応募して頂きたい。

年々応募者が減少していることを大変残念に思う。伝統と権威ある路郎賞・川柳塔賞に応募できるチャンスを大切にしたい。

どうせ駄目だからと諦めず、自分の作品に自信と愛着をもって来年こそは一人でも多くの方に参加をお願いします。

二賞候補者在住地

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
路郎賞	鳥取市	鳥取市	鳥取県	愛知県	大阪府	松江市	神戸市	河内長野市	河内長野市	橿原市	大阪府	堺市	横浜市	弘前市	大阪府	東かがわ市	鳥取市	豊中市	堺市	東京都
川柳塔賞	河内長野市	藤井寺市	札幌市	大阪府	神戸市	神戸市	三田市	奈良市	日高市	鳥取県	鳥取県	柏原市	西予市	和歌山県	長岡京市	愛媛県	豊中市	横浜市	兵庫県	出雲市

受賞作品

弘前市 高瀬 霜石

背広からぼろりこぼれるどっこいしょ
いいことをした日もちゃんと手を洗う
指切りを忘れちまった指という
壊れものなのですきみもわたくしも
初恋のひとは三人おりました

評 川柳の歴史的性格はリアリズム、ウイット、そして抒情と考えています。この三要素を確実に川柳にする事が出来る作家は現代の貴重品です。特に五句選出した貴重品中の貴重品は

初恋のひとは三人おりました
一人ではなく三人と表現できるウイットと、その裏面に
ある別れの情緒、人間のドラマをよく知っている霜石さん
なればこそです。
(波多野五菜庵)



高瀬 霜石

昨年、路郎賞を頂戴してからの僕は、女神と同居して
いるようなものだった。今回のこの受賞で、女神がもう
一年ホームステイを延長してくれそうで、とても嬉しい。
楓楽編集長に「霜石さん。もう取るものなくなつてし
まいましたねえ」と、からかわれるほどのツキでした。

準賞作品

西宮市 牧 潤 富喜子

その場所を離れて立てば風ばかり
思うこと一緒の時もあり夫婦
変えようとしなない形について行く

和歌山市 桜 井 千 秀

柘榴はせて真っ赤な嘘を剥き出しに
かけひきがよじれうつろな時間帯
絵に描いた餅でいつとき飢え凌ぐ

大阪市 神夏磯 典 子

栗はさんだところから涙止まらない
運だめし棒を一本立ててみる
掘っても掘ってもこころみつからぬ

柳 歴

昭和六十一年 弘前川柳社入門
平成 六年 川柳塔社同人
平成十一年 路郎賞準賞
平成十五年 路郎賞
平成十六年 全日本川柳埼玉大会
文部科学大臣奨励賞

受賞作品

藤井寺市 鴨谷 瑠美子



鴨谷 瑠美子

幻にならんいち面ラベンダー
絹豆腐抱かれ上手な初夏である
肌色の人形抱けば温もれる
まだ恋を書き足りなくてポールペン
ほお杖は気の済むまでのあれやこれ

評 女性の深層にある残り火を平易で広がりのある一行詩に仕立てられた作句力に感服、茴香の花賞に推しました。準賞には美籠さん、晶子さん、真理子さん、恵子さん、理恵さん、それぞれ個性的で自分の生き方を気取りのない素直さに心を打たれました。省みますと、没にする句がなくて悪戦苦闘の毎月でした。選を終えた今、どれだけ皆さんの句を冷静に感じられたか自問自答しています。たくさんさんの力作をありがとうございます。(藤田 泰子)

準賞作品

尼崎市 長浜 美籠
読みかけのページへ雨の降り止まぬ
自問自答しながら歩く風の辻
米子市 門脇 晶子
景色が見たいので鈍行に乗ってみる
生きるための方程式をといている
檀原市 居谷 真理子
青春の輝きあれは割れガラス
桜桃忌男は派手に死にたがる
寝屋川市 籠 島 恵子
階段の高さが昨日とは違う
一ぬけを考えている葦である
檀原市 安土 理恵
いつの間にか身に合っている隠れ蓑
やっかいな理性が阻む発火点

一年に一度の川柳塔まつりで、女性だけに戴ける、茴香の花賞のお知らせをいただきました。この上ない喜びでございます。夢のような大きな感動を忘れずに、選んで下さいました事と、ご指導下さいました皆様へ心より御礼申し上げます。

柳 歴
平成 五年 NHK文化センター
川柳教室
平成 五年 川柳塔誌友
平成 九年 川柳塔同人
平成 十年 川柳藤井寺句会

受賞作品

三田市 北野 哲男

愛というガラス細工が美しい

評 愛は壊れ易いものと気付くには、それなりの経験が必要とする。愛が壊れる度に、愛を封印しようとするのだがガラス細工の魅力には勝てそうもない。

準賞の句、川柳大会へ臨む作者の用意周到な心意気を感じる。母親となる希望と不安、やがて希望だけがどンドン脹らんでゆく。
(福士 慕情)

愛もガラス細工も「扱い注意」。大切に扱わねば、薩摩切り子のような輝きに、遠い目をして酔っている作者が、ダンディです。

ちかしさんの句からは、意気込みを感じます。鉛筆は肥後守で削っているのでは。充子さんからは、喜び溢れた希望いつぱいのオーラが出ています。
(古久保和子)



北野 哲男

仕事人間の私が退職近い七十歳直前、新しい楽しみをと考
え薫風先生のNHK川柳講座に入会。楽しみより苦みの連続
でしたが、近頃は終生川柳と縁が切れそうにないなと思
いかけました。
そんな時にこの様な立派な賞を頂き、驚きと感謝でいつぱ
いです。ご指導を頂いた先生と後押しをして下さった先輩や
柳友の皆さんに厚く御礼申し上げます。

柳 歴
平成十年四月 NHK川柳講座入会
六月 川柳塔誌友
平成十一年九月 川柳塔社同人
平成十二年九月 句会「川柳さんだ」
立ち上げ

準賞作品

鉛筆を削り戦の準備する 竹治ちかし

限りなく輝いている母子手帳 播本 充子

候補作品

残像を抱いて微風の中にいる 鍛原 千里

つじつまはいつも合ってる茄子の花 久保 正劍

春を待つ氷柱も僕も饒舌に 高瀬 霜石

神様が振り向くまでは吠えつづけ 太田扶美代

受賞作品

鳥取県 奥谷彩子

スランプを抜け出した毬たまごがよく弾む

評 彩子さんの句は、上語を軽く中七で盛りあがり下語を歡喜でまとめておられますが、そこに至る過程は女として「わかるわかる」と感動させられます。

準賞の句、思わず笑えるのと同時に私もやってみようと存じます。候補作品は、いずれも温かく明るい句風と楽しくなつて参ります。

(山本 義子)

受賞の句、女性の強さ健気さ優しさを彷彿とさせ、男性としてシャッポを脱ぎます。幾つになつても女性の研究は積ませてもらおうと思ひます。

準賞の句、吠える原因は男性のことではないでしょうねと考へています。候補作品は、ギスギスした今の世の中で大いに活力剤になる句です。

(言村 一風)

準賞作品

わたくしも吠えたいのですお月様 安土 理恵

候補作品

欠点を愛がふんわり包み込む 西口 いわゑ

笑つてるうちに楽しくなつてくる 谷口 義

喜んでもらつて汗がとまらない 都倉 求芽

一筆をいれて貰つて絵が活きる 飛永 ふりこ



奥谷 彩子

各地柳壇賞受賞の電話に一瞬体中の血が引き、そして汗がふき出し何をどう言つて良いのか分からない有様でした。思ひもしなかつた大きな賞をいただき有難いことです。これも温かくご指導下さる先生方や柳友のおかげと感謝しています。これからも歩脚で一歩ずつ歩いて行き度いと思ひます。本当に有難うございました。

柳 歴

平成元年四月 新聞投句
平成元年六月 川柳塔誌友
平成十年十月 川柳塔同人

記念句集『川柳塔』を読んで

川柳見本帳

番傘川柳本社参与

岩井三窓

初めて参加させて頂いて、一番驚いたのは参加者が千名を越えたと言うことである。川柳塔社の同人誌友を臆けながら勘定にいれてもこの数は意外だった。

句集を手にして、私の偏見をつくづくと思いは知らされた。これは一川柳塔社の句集ではなかった。川柳が好きで好きでたまらない人達が作り上げた句集なのである。

党同伐異ということばがある。新明解国語辞典では、道理の有無に関係なく、常に同志に味方し、相手方を攻撃すること、とある。集英社国語辞典では、是非、善悪にかかわらず、仲間にも味方して他派を攻撃すること、と記述している。

穿ったことばである。党同伐異、過去、現

在、未来、このことばが重く、のしかかってくる。島国根性、ムラ意識、結社第一主義。

まず敵か味方かに大別して、味方にはべつたり甘く、敵には冷酷、峻烈そのもの。

難解派は難解派、平明派は平明派。道理の有無に関係なく、是非、善悪にかかわらず、常に同志に味方し、相手方を攻撃する。

川柳の世界も、党同伐異、ご多分に漏れずと言ったところである。

が、この一結社の催しに、十五句、五千円と言った条件に、これほどの作家が集まったと言ったことは、結社意識を乗り越えた、美談であり、大袈裟に言えば快挙でもある。

全一万五千七十五句から、句集に私なりのチェックをしたのは六百二十句。それを原稿

用紙に書き写し、特に気に入ったのに朱を入れ、更に十六項目に分類した。(五項目割愛)しんどの仕事だったが、川柳の魅力に引かれ、醍醐味にひたつた。これはあくまでも、私の川柳観から見た川柳であって、当然見落としてはあるだろうとおもつ。

しかし、余生というより、老後に、このような作業をさせて頂いたことに、あらためて厚く御礼申し上げます。

【ユーモア】

感謝状不眠不休の臓器殿 乙倉 武史
一票は入れませんので握手する

思いきり万歳をした臍がでた 志田 千代
つつこみを入れない弔辞聞く椋 吉岡 修

敵のばすためなら顔も叩きます 有田 一央
二宮 栄子

心臓、腎臓、肝臓その他もろもろの、臓器殿への思いやりのところが快い。

入れません、入れませんが、握手はします。すみません、ますますのご健闘を……

臍も万歳をしたかったのかもしれない。ちつちやなちつちやな臍も、万歳と言っている。

美辞麗句ばかりの、そらぞらしい弔辞、間髪を入れず、つつこみたかったのだが。

顔を人に叩かれるのは以つての外だが、自分の顔なら叩く叩く。はた目などどうあれ。

【写生】

炊き上がる飯みな生きる姿して

斉藤 劼

雲はいい無垢で気儘で豹変で

早川 盛夫

夜が明けて空と海とが離される

牧野 芳光

雲走る悪いことでもしたように

木村 中義

傘立ての中は親子が肩を寄せ

吉村久仁雄

炊き上がったご飯に、生きる姿を見るとは、

詩人の目。耳を澄ませば声も聞こえそうだ。

雲に、無垢、気候、豹変を感じとる。おおらかな、屈託のない心境が、羨ましくなる。

と言うことは、夜明けまでは、空と海とが抱き合っていた。スケールの壮大な句。

雲が走る、雲が走る。人間の目からみれば結局、人間らしいことしか浮かばない。

一本の傘が、傘立ての中に収まっているだけなのだが、美しい親子の絵を描いてくれた。

【季節】

ばたん雪絵になりたくてなりたくて

小池しげお

散る覚悟できて桜が咲き揃う

中澤 伽羅

よう来たね桜が声をかけてくれ

安永 春

満開のどんな花にもあるその後

矢倉 五月

チューリップ愛をこぼさぬ様に咲く

吉田あずき

ばたん雪の、ほんの降り始めの情景とつてもよいし、たつぷりと降り積もつてもよい。

散る覚悟とは、達観である。可憐な桜にも

こんな覚悟を思い浮かべる。健気な桜よ。

桜のシーズンが来たたら、この句を思い出してほしい。来ました来ましたと返事をしよう。

満開の花、これは桜にかぎらず、人間にも

言えよう。ラスト、終幕、エピローグ。

チューリップをワイングラスと見立てて、

育て主へまず一献。ありがとうみなさん。

【戦後】

戦友の四倍生きている命

堀端 三男

敬礼の遺影よ日本どう思う

井原みつ子

戦争は忘れていない語らない

尾崎 黄紅

軍でない戦車軍艦戦闘機

中塚 礎石

戦争ノーマン文字の点になる

岩佐ダン吉

四倍とは具体的に、大正二桁の筆者も身に

迫るものがある。四倍の命、なにをしたのか。

敬礼だから、軍帽か戦闘帽。二十代の清潔な童顔。言いたいことは山ほどあつたらう。

あの戦争を忘れるもんか。が、言わない。語るには重く深く、口で裁き切れるもんか。

自衛隊は軍隊ではない。戦後、耳に胼胝ができるくらいに聞かされたフレーズである。

人文字の一点。ちっちゃなちっちゃな存在だが、団結すればものを言う、言わそつ。

【高齢社会】

ときめきを下さい私未だ卒寿

園山多賀子

小さな命石の割れ目に咲く命

藤村 メ女

髪染めて女も一度咲くつもり

工藤 吟笑

意欲まだ友のお世話の出来る幸

ふところに一万円のある温み

藤井 明朗

高齡化社会である。お年を公表するのも、

あなたがち失礼でもあるまい。メ女さんは92歳、

以下94歳、95歳、97歳、と続く。いずれの句

も年齢を感じさせない、意欲満々たるものがある。

紫香さんの句の、一万円の温かさ。明治、大正、昭和、平成と四代の貨幣価値の変遷を思うと、ここに響くものがある。

【父母】

一徹の父は我が家の防波堤

小川あき子

母として実り女として枯れる

宮尾みどり

母の掌は体温計の役もした

柴本ばつは

迎え火へ亡母スキップで来るだらう

母を風呂に入れる宝を抱くように

関谷 雀三

富山ルイ子

父権が低下していると言われるが、実態はどうであろうか。ここには心強い父がいる。女として枯れても、母として充足すれば、満点ではなからうか。欲を言えば限りなし。

体温計の役を果たした母の掌も、年には勝てない。数だらけの掌誇るに足る勳章である。迎え火にスキップで来るだろう亡母。快活

な、明るい、楽しい、お母ちゃんだったろう。小さくなった老いた母。こどもの頃にして

もらったように、今度は私が母で母が子の役。

【うがち】

殻破る勇気を溜めている卵 武本 碧

学校の廊下は走るためにある 志田 千代

肩書の順に姿を消す宴 傍島 克彦

風よけになつたつもりが邪魔にされ 野田 栄呼

王様は裸のままにしておこう 原 みさを
殻を破る卵。勇氣、勇氣。すべて行動に移すには強烈な意志、勇氣がいる。

おとなしく、静かに、と言われても生徒は走る。それが本来の、自然の姿である。

肩書の順、これは鉄則でもある。無礼講と言うのも、単なることばだけの遊びである。

風よけが邪魔がられる。こころ、善意が通じないのも、ほんまに困つたものである。

裸の王様、童話の世界だけのものではなく、

どこにもいる。川柳の世界にもいます。

【酒】

酒という字が夕暮れにボツと点く

新家 完司

浴びるほど呑めば亡夫に逢えますか

中井 アキ

座布団の要らぬお客で酒が要る

山口 高明

慰めるよりも一緒に酔うてあげ

武藤 敏子

時々飲んで体をよろこばす

森中恵美子

酒徒にとつて、耐えられない一瞬であろう。

旅先なら尚更。字だけで救われた思いがある。

亡夫への綿々たる思いが伝わってくる。二人で飲んだ頃のシーンが、くつきりと浮かぶ。

座布団なんか要るかいな、酒や酒や、と笑顔の客と主。どんな会話が飛び交うだろうか。

一緒に酔う。口下手なまどろっこしいことばより、共に酔うことが、こころを癒す。

時々には、に含蓄がある。喜怒哀楽すべて、時々に来る。体をいたわる心がしのばれる。

【ことば】

こつこつと言葉の貯金しています

なるようになりまますわいなもうねまひよ

神夏磯典子

河内 月子

カタカナが増えて日本語かわいそう

矢野 梓

おふたりという日本語のあたたかさ

山本希久子

野に放つ言葉をもつていて独り

前田美巳代

楽器も絵筆も撃もない、私たちの唯一の手段は言葉のみ。沢山溜めて奔放に使おう。

大阪弁のやさしさ、温かさが迫ってくる。捨て鉢でない。明るい明日が必ずやってくる。

カタカナ語の氾濫、目にあまるものがある。日本語の悲鳴を聞き漏らしてはならない。

おふたり、と言うあたたかいことば。ことばにこころが乗り移っているからである。

野に放つ言葉。衆愚には解せない、峻烈な言葉の数々。人嫌いの孤高の詩人だろう。

【人生】

生きてゆくその日その日のあみだくじ

河内 天笑

走つてごらん運は後からついてくる

高田美代子

たくさん笑いちよつぱり泣いて生きてゆく

山本希久子

一生を一望できる歳になり

今井 弘之

余生まだ波乱含みの青写真

小川賀世子

思わぬ時に、思わぬことが起こる。運だ、

運だ、

運だ、

と言わず、あみだくじだと言つるところが庶民。とにかく、とにかくやつてごらん。その覇気に気圧されて、必ず運はやつて来る。

七分三分か、八分二分だろうか、この配分を崩しては駄目。ちよつぱりしが潔い。

一生を一望とはスケールが大きい。ありがとうよい人生でしたと、目を細めているんや。

青写真、そして波乱。余生は余生フアイト満々。はらはらと見守る人もいるだろうが。

【夫婦】

お互いの酸素になつている夫婦

佐藤 治代

背景の妻を忘れんようにせな

藤解 静風

妻だけの拍手で男奮い立つ

渡辺 富子

名ばかりで妻に及ばぬ事多き

有本 孝義

新婚の頃の写真もい葉

妹背 明義

ごろんと横になつてゐる、連れ合ひは、酸

素ポンベということにもなる。脱線失礼。

背景の妻。舞台は主役だけで持つてゐるものではない。背景があつてこそ、主役が生きる。

妻の拍手。妻以外のどんな、万雷の拍手よりも、一番励みになるのではなからうか。

夫とは、主人とは名ばかり、と言つ謙讓さ、

お二人の謙虚な思い。理想的ご夫婦である。

昔の白黒のアルバムを見る。歳月の重みを

ひしひしと感じながら、良葉、良葉と頷く。

抒情を継承する人々

波多野 五楽庵

楓葉さんから、ご多忙は重々承知致してお

りますが、と達筆なお手紙をいただいた。し

かも一〇一四人にも及ぶ「記念句集」の感想

を書けと言つのである。私は楓葉さんの達筆

な文章と、その責任の不運に感泣してしまつ

た。

川柳塔には長い間培われて来た川柳塔色が

存在し、歴代の主幹が替わると多少の変化は

あるが連続と続いて来た。勿論、その根底に

は路郎先生の教えてこられた、人間陶治

の詩”を心として継承して来たのである。

雨の色黄昏の色悲しき日 路郎

尾藤三柳さんは著書「川柳の技法と鑑賞」

の中で、多様な展開を見せている現代川柳を

リアリズム（写実と穿ち）ウィット（機智と

意外性）リリズム（抒情と内省）に大別し

て、リリズムの代表として路郎先生の、雨

の色”の句を選出している。

この路郎先生の抒情に引きつけられてしま

つた私は、川柳塔の長い歴史の中に育つて来

た同人のリリズムを遍路する事にした。

リリズム・抒情と内省とは作者の心の葛

藤であり、悲哀の表現でもある。

受け取つて下さい秋を送ります

青山 久子

秋の美しさと落葉の哀しさを一番大事な人

に送ろうとする一行詩は、抒情の中にかくさ

れてある余韻を、余す事なく見せてくれる。

とりあえず笑つていよう春だもの

安土 理恵

上五の”とりあえず”がなかったら平凡な

句になつていただろう。”とりあえず”のた

つた五字のひらがなが、心の中にある笑つて

笑えない内省を読ませている。

五十年あなた忘れていいですか

稲葉 冬葉

五十年という長い間忘れれる事が出来なくて

抱き続けた愛。”忘れてもいいですか”と言

つてはみたものの、忘れる事が出来ない愛。

ここにも一つの哀しみが存在している。

地球儀のたつたふたりじゃないですか

岩佐タン吉

たつた二人なのです。そのふたりを黙って
おいてくれない世間の現実には作者の戸惑いが
ある。強がっているものの優しい作者。

さくらほろほろいのちほろほろ花曇り

江原 秀夫

十七音字一杯に広がるリフレインが、命の
はかなさを、夢二の画く絵のように見せてく
れた作者の技法を誉めたい。助詞がない事で、
抒情を強調して見せてくれる。

さよならを上手に言える不仕合せ

大橋 鐘造

最後まで言えなかった別れの言葉。決して
上手に言えた訳ではない。泣きたかった涙を
見せなかっただけ。

亡き人のメールが月が美しい

奥田みつ子

言い知れぬ不幸を乗り越えて来たこの句の
大切なのは、亡き人のメールかの「か」に
ある。たつた一つの助詞が、また思い出し
ている人間の脆さをさらけ出している。

助詞の大切さを知っている一句。

帯きりり泣かぬ女になつて行く

小野 克枝

ここにも言えなかった女の過去がある。泣
いて泣いてその末に、弱味を見せまいとする
強さを身につけた女の性が見えてくる。

誰ひとり気づいてくれぬひとりごと

新家 完司

これを抒情句と見るのは私だけかもしれない。
限らない寂寥感が表現されていて、淋し
さに気付いてくれよ、と言っている完司さん
の孤独を振り返って見ていた。

人間にもどれば泣けることばかり

中井 ゆき

一生懸命気を張って生きて来た一生、そこ
には泪の入る場所がなかった。気が付けば今
日も泣いている一人の女が画かれている。そ
の空間が女の一生なのだろう。

忘れたい人が胸から出てゆかぬ

福本 英子

胸から出て行ってくれない、いつまでも胸
を締めつけている恋情、何もかも機能的にな
って心を喪失している現代にこの句を見付け
た時、また生き続けている人間のロマンを離
してはいけない、と感じていた。

綿毛ふわふわきれいな山へ子を生みに

宮崎シマ子

きれいなという形容詞を句に入れた時、きれ

いな句にならないのが定説である。その違和
感がないのは、受胎経験のある女性の生理的
表現のうまさにある。きれいな山へ子を生
みに。生れて来る子はどんな子なのだろう。
きつと綿毛のような子。

第一ヴァイオリン弾くてつべんの柿一つ

八木 千代

この句を読んでこの淋しさは何だろう、と
考え続けた。私に千代さんの句の解説が出来
る訳はない。意外性が含まれてつべんの
柿一つ。背景に抒情詩がいっぱい漲ってい
る、昇華された川柳と言つてもよいだろう。

この「柿一つ」が現代叙法の無常感だから
淋しさを覚えたのだ。一生かけてもこの句に
は追いつく事が出来ない。

人恋し女の駅に灯をともす

山本希久子

とうとう最後に女の駅にたどりついてしま
った。洗礼された十七音字の一行が美しい比
喩に乗って行き着いた女の駅である。

しかしここでも心の寂しさから逃がれる事
が出来ない。

こうして見ると限りない哀しさと淋しさの
余韻が抒情である事に気がついた。

百花繚乱

山本 希久子

ずつしりと重い句集が送られてまいりました。この重みは単に頁数のことのみではありません。同人、誌友そして御支援していただいた一人一人の力と、川柳で結ばれた絆の強さに磐石の重みを感じました。

それぞれの魂の独白を受け止め、向き合えば、心のつぶやきが伝わってきます。あだやおろそかに読みとばすことはできません。

非日常の世界で心を自由に遊ばせることのできる川柳は、素晴らしい文芸であることも再認識いたしました。とは言え、心象句や感性で作る句にも真実の裏付けは必要です。作句にそれぞれの路線があるのは当然で、

正解はひとつでないという世界です。

私自身は、なるべく分かり易くて、しかも奥行のある句、穿ち、リズム感を大切にをモットーにしていますが、なかなか思い通りにはいりません。

鑑賞に当り10年前の「川柳塔」と比較してみました。世の中は大きく変わりましたが、句

風そのものに大きな変化はないと思います。

川柳界も世代交代をしつつ徐々に川柳人口の裾野は広がっているようです。特に女性の参加がふえ、同人の過半数を女性が占めていることは大きな変化と言えましょう。

そして出句いただいた千余名の方の句に同一句なく路郎師の「視野無限 この言葉に尽く」を実感したこともつけ加えておきます。

吟味された自選の15句には、想いが凝縮されていて佳句ばかりです。鑑賞句の抽出に迷った挙句、同人欄の女性のうち、第四句集にはまだお名前のなかった方の句を中心に、ほとんどアトランダムに選びましたが、紙面の都合上、極く僅かの鑑賞となりました。

いい男だった葉にしておこう

居谷真理子

短い夏の思い出、少し接近はしたがやっぱり……。せめて自分史の余白にでも記憶にとどめておきたい人、大胆な表現の中に繊細な女心がひそんでいます。

生かされて少しこの世のお手伝い

伊藤 玲子

悠久の大自然や、歴史の中で何と人の一生の短いこと、せめて生かされて健康に恵まれている時間を、少しでも人の役に立ちたいものと私も思っています。

ていねいに地図をたたんで行き止り

大田扶美代

この句の上五、中七、下五どれをとっても最も適切な語で構成されています。下五の、どんでん返しにも川柳味があり、表現の巧みな作者であることが窺えます。

大空があればどこでも生きられる

小谷はるみ

大らかにのびのびとたたつておられます。小さなことにくよくよすることはありません。人間到るところ青山ありが、です。

人生の節目に灰汁が浮いてくる

澤 裕子

節目だけでなく、人間の弱さ、欲、頑迷その他もろもろの灰汁は、すくつてもすくつても浮いてきます。すっかり灰汁が抜けた美しさがデスマスクに表われるとも言えます。

いくつまで生きると聞かれても困る

谷口 義

難しい言葉はつかわず独特の作風を持って

おられます。当たり前のことをさらりと言われて味があり、底流にはベーンソスがあります。

綴じ糸はブルー私の解体新書

古久保和子

解剖書の訳本解体新書は、時代から察すると和綴じの書物でしょう。心は何故かピンクでなくブルー。解体新書により自分の内面を表現されました。感性の豊かさ、比喩のうまさを感じます。

選ばれた自負限界を越えさせる

播本 充子

作者は川柳に対する大変な情熱とパワーの持主で、行動力のある方です。

時計台ビルと川柳をつなぎ全国に広める

働きをされたのは平成12年、そして16年2月には関東に「川柳塔のぞみ」を立ち上げられました。成せは成る無限の力を信じましょう。

広辞苑ひらいて探る発火点

山岡富美子

川柳など文芸に携わる者にとって手放せぬ辞書から作品のヒントをもらうことがあります、そこを発火点に燃え上がる詩のころです。

柔肌に触れず診るのは数値だけ

市丸 晴翠

最近の医療の弱点を見事に突いておられます。医学は進歩し、検査数値は適確に病気を

発見してはくれます。これからは病院に向向き、待たされることもなく在宅でコンピュータ診療も可能とか。進歩して便利な世になったことは確かですが、何か人間のところが置き去りにされている気がしてなりません。

大根の白さが少し憎くなる

中井 アキ

川柳の素材は身近なところに転がっています。主婦の視点からとらえた大根の白さ、このさわやかさには到底勝てるものではありません。その上煮れば、あらゆるものと調和して旨味をたっぷり吸収する強かさ、とても競える相手ではなさそうです。

金魚鉢置いて無口な人という

高島 啓子

夫婦だけの静かなたたずまいが、絵のように浮かんでまいります。金魚鉢の中をひらひらと舞い続ける金魚の動と泰然と無口に座す人物の静とが対照的です。

転んでもポーズをとってまだ女

米澤 俣子

二人からひとりになって湧く勇氣

録沢 風花

妻だけの拍手で男奮い立つ

渡辺 富子

女は強いです。

愛染帖

波多野五楽庵選

富田林市 池 森子

慟哭の果ての写経へ蟬しぐれ

割り切った辺りへ赤い実が落ちる

五里霧中を曳きずる夾竹桃の朱よ

和歌山市 木本 朱夏

星の巢に集いて死者の祭りかな

縁のない男と覗く崖つぶち

コーヒーはブラックとりとめのない会話

藤井寺市 太田扶美代

哀しさよ身にひしひしとくる訣れ

蛭一匹 胸の裂け目に飼い馴らす

愛媛県 花岡 順子

ある時は危険区域にいる悪女

登り坂足し算ばかりしています

東京都 やまぐち珠美

蟬しぐれ木立の波を海に変え

スチールの椅子にあなたが灯つてる

京都市 都倉 求芽

縄梯子こつそり手帳に挟み込む

後記からひそかに覗く私生活

大和郡山市 坊農 柳弘

ほめ殺し飼い殺して夫婦たり

弥陀の掌の中でお許しをうヒト科

砂川市 大橋 政良

折り合いをどうつけようか回り道

つまりいたところが墳墓かもしれぬ

弘前市 高橋 岳水

老残の思考とぎれる油照り

麻痺の子と生涯歩く白い闇

弘前市 安土 理恵

無花果が熟れると泣けてくる女

子を産めぬ女に石榴熟れてくる

大坂市 神夏磯典子

つぎつぎと間口広げて病んでいる

かくれんぼ今日は何方が相手やら

和歌山市 楠見 章子

ヌツと出す小指が温いから困る

すれ違う尼僧に借しい目鼻立ち

西宮市 門谷たず子

船底に哀おんなの舟は揺れやすし

わたくしを熟成させる八畳間

鳥取市 徳田ひろこ

どう動いてみようかと所詮弥陀の視野

長い夜の悔いはゆつくり満ちてくる

和歌山市 西山 幸

戦っているのは蟬も同じこと

西宮市 牧淵富喜子

挫折する男と女の吃水線

大和高田市 鍛原 千里

松原市 小池しげお

熱帯夜 凹周率は3でよい

米子市 足立由美子

毎日をととも大事に織っている

八王子市 播本 充子

車椅子困むひら仮名のことば

弘前市 斉藤 苅

五十回忌野菊 野菊のままで咲き

弘前市 宮崎ヒサ子

上気した心で夏を駆け抜ける

弘前市 福士 慕情

森が消え木魂途方にくれている

鳥取県 吉田孔美子

吠えまくった夕陽が丘という岬

和歌山市 桜井 千秀

終焉へよつしヤタスキを締め直す

富田林市 中井 アキ

白線の内側にいる多数決

愛媛県 中居 善信

角のない僕の自画像描いている

堺市 和田つづや

郷愁を墨絵に僕のナルシズム

西予市 黒田 茂代

四の五のは言わずに突くところてん

唐津市 田口 虹汀

何歳まで生きているかは知らねども

唐津市 仁部 四郎

彼にして迷うか文字の右下り

尼崎市 春城武庫坊

ふんわり浮く雲の行方が気にかかる

尼崎市 春城 年代
門先やペランダで喫うなげなご

松江市 三島 松丘
萎えてきた詩囊を癒す古本屋

大阪市 小谷 集一
無位無官 無趣味他愛もなく生きる

池田市 上村 隆
欲望が過ぎて己が怖くなる

八尾市 井尻 民
人間が恐くて鍵が離せない

黒石市 相馬 一花
喪服着て女盛りを閉じ込める

札幌市 三浦 強一
あの頃は銀シヤリ涙して食べた

倉吉市 松本よしえ
嬉しくてまた悲しくてロゼワイン

藤井寺市 高田美代子
ジョーカーをこっそり持っている女

和歌山県 森下 順子
オブラートに包んだ言葉ゆき米する

三田市 堀 正和
例えばの話で踏絵もつくる

米子市 林 瑞枝
夢売りがわたしの胸にきて誘う

羽曳野市 吉川 寿美
人間失格そんな日もある夕茜

箕面市 出口セツ子
ざりざりのところで愛が試される

岡山県 福原 悦子
タクト振る嫁に小さく舞うときめ

美祿市 安平次弘道
やわらかい切り口がある春の戯画

弘前市 相馬 銀波
気休めの影踏み続く休耕地

弘前市 中山 雅城
りんごっ子熱中症に懼りそう

大阪市 川原 章久
写経一枚命の地図を画くように

大阪市 前 たもつ
千回をまねて本物らしくなり

堺市 山本 半銭
目標を米寿あたりに置いた坂

富田林市 片岡智恵子
古い深くする諦めの白い足袋

岡山県 山本 玉恵
シナリオの中にはいつも母の影

米子市 小塩智加恵
父母が帰るお盆た髪染める

豊中市 櫻谷 郁子
忌はめぐり亡夫呼ぶ声も遠くなり

高知市 小川てるみ
年に二度葉書で足りるお付き合い

三田市 北野 哲男
パソコンも指一本の尋常科

豊中市 水野 黒兎
ドイツ語のカルテ少しは読めて雨

吹田市 太田 昭
寄せ鍋で昨日の敵に酒を注ぐ

和歌山市 武本 碧
切り口にたつぷり塗ってあるジョーク

四條畷市 吉岡 修
手心のパンチと知ったのは後日

鳥取市 岸本 宏章
少しずつ遅れが目立つ腹時計

倉吉市 山中 康子
めくじらを映す鏡がそばにない

海南市 谷口 義男
図に乗った自慢話を聞く辛さ

鳥取県 佐伯 やえ
ムダなことするなと亡父の樹が叫ぶ

大阪市 井丸 昌紀
覆水が盆に返ったのが不幸

藤井寺市 鈴木いさお
喪が明けてじわり辛さが忍び寄る

堺市 矢倉 五月
贈られた意味をゆつくり考える

西宮市 西口いわお
軽い嘘だんだん鈴のようになる

出雲市 園山多賀子
手の届く辺りで妥協してしまふ

和歌山県 三宅 保州
友という妻は私の知らぬ妻

八尾市 生嶋ますみ
ひと言も愚痴などいわぬ蟻の列

八尾市 高杉 千歩
テレビより美味しいものを食べ歩き

奈良市 乾 春雄
産声が年垂背負うデカイ声

和泉市 西岡 洛酔
心根も無くて造花の派手な彩

和歌山市 柏原 夕胡
妻という平野で昼寝しています

狭屋川市 平松かすみ
あかさたな言えてまだまだ大丈夫

羽曳野市 酒井 一壺
お芝居の時は上手に泣けました

八尾市 宮崎シマ子
リストラの矢面について芸もなし

和歌山市 古久保和子
地下街という洞穴に目が慣れる

鳥取市 夏目 一粹
幻とうつつが交差する余命

鳥取市 福田 登美
鈍行は昔話をしたくなる

岸和田市 土橋 房枝
絵手紙で故郷の匂送ります

富田林市 大橋 鐘造
すげ替えた首に古傷疼き出す

弘前市 櫻庭 順風
しがみついてもしがみついても離される

岡山市 井上柳五郎
限られた時間とことん生きてやる

八尾市 村上ミツ子
一時しのぎでなんとか生きてきました

高知県 桑名 孝雄
アイヌ語も三つ四つ覚え旅終る

米子市 白根 ふみ
ゴーヤ熟れ命粗末にした昔

松江市 安食 友子
かまびすしほどほどにして四捨五入

滋賀県 中 宗明
子に買ったパズルに親が夢中なり

竹原市 正畑 半寛
花一つ咲いてわが家に朝がくる

和歌山県 中後 清史
気配りが過ぎて誤解の種となる

大阪市 小泉ひさ乃
生き残り孤独なハエが叩かれる

鳥取県 谷口 次男
雑草も差別区別をバネにする

高槻市 乙倉 武史
自画像を描くと絵筆甘くなる

狭屋川市 森 茜
いっこうに詫び証文が返せない

大阪府 初山 隆盛
クーラーにとどぶりつかる原爆忌

倉敷市 井上 富子
気持のいい風と遊んで来た日傘

横浜市 金森 徳三
いいですか長寿の仲間入りをして

羽曳野市 森下 一知
礼状のペンに震えの後遺症

日立市 加藤 権悟
熱帯夜の風鈴もおし黙り

鳥取県 土橋 螢
スポーツマンシップ忘れてから非行

枚方市 海老池 洋
抽象画上下逆でも抽象画

羽曳野市 永田 章司
校則があるから破る反抗期

弘前市 岡本 花匠
点灯で陽の短さを肌で知り

交野市 田岡 九好
魂の半分は売って生き続け

池田市 栗田 久子
秋茄子の色ひときわの酒となる

東京都 清原 悦子
笑っても泣いても一度きりの道

和歌山市 喜田 准一
他人様の都合は聞かぬ通り雨

松江市 川本 畔
約束を破った人を忘れない

岸和田市 雪本 珠子
平和ほけ心貧しくなるばかり

茨木市 藤井 正雄
叱責を添え多い目に送る金

大阪市 板東 倫子
宝くじ当って水書見舞いたい

鳥取県 石谷美恵子
ふる里はいいな仮面など要らぬ

鳥取県 土橋 睦子
生かされて愚痴も涙もこぼします

和歌山市 山口三千子
父と子を大きく開けた川の幅

安来市 原 煩悩児
一代のロマンだ男万次郎

和歌山県 村中 悦男
追伸の一行あってはつとする

大阪市 伏見 雅明
引出しをそのままにして嫁に行き

誹風柳多留二四篇研究 71

山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・橋本秀信
粕谷長生・小栗清吾

清 博美・佐藤 要人

550 あつけない遊びねにふしとらにおき

山田 お店者の登樓。

川長

「子に臥し寅に起き」は「子の刻(午後十二時頃)に寝て寅の刻(午前四時頃)に起きるの意から、きわめて勤勉であることをいう」(『日本国語大辞典』)。

番頭といえどもおおつびらには登樓出来ない。皆が寝静まった後、密かに抜け出し、起きる前に戻る。まこと、束の間の遊びで、情緒も何も無い「呆気ない遊び」であろう。しかし当人は、寝る間も惜しんでの遊び。それこそ「きわめて勤勉」なガツガツした遊びであらうとの穿ち。

番頭は子に行寅に帰るなり
あつけ無あそびごふくや者と見へ

四六19

ばん頭ハ女のぬけ荷斗かい

明四桜1
一一25

粕谷 賛。俚言を逆にとらえた面白さ。

清 番頭は結婚せず、独身で頑張っていた。当時の雇用制度は雇われ人には極めて厳しいものだった。性欲処理も遊里で。

佐藤 賛。

551 広こうじ武かんを見るのにきやかさ

芹丈

山田 正月八日と二十日、四月十七日と二十日は諸大名や旗本が装束で上野東照宮へ参詣した。それは大変豪華な行列で、当日は祭りの見物のように市民が上野に集まり、広小路などは群衆でいっぱいであったという。

行列の金紋先箱や槍印などはまるで武鑑を

見ているようだといふのであろう。あるいは武鑑と対照して、何々様だと確認して見物している様ともとれるが、勿論そんな者も居たであろう。いずれにしても本句の狙いは、行列の煌びやかさと見物人の賑わいぶりを詠んだものである。

青陽に瑠理へ詣の数万石

七四6

ふたいからそりやさつまさまま〜

天一智1

清水に居て大名の評議する

九27

清・佐藤 賛。

552 大海で土ほじりするうらゝかさ

和国

山田 潮干狩り。

「三月三日は一年中に於て最も遠く汐の引く日にて、卯の刻即ち午前六時頃から、引始めの午の刻即ち正十二時頃には沿岸の海底深く干潟となり、総房までも陸続きに成つたかと疑はる、程である。されば此日江戸中の四民は多く汐干船を催して品川、須崎辺の沖に出て、魚貝を漁って一日の行楽をなすのである」(『川柳年中行事』)。

ぱらりつと汐干八人を時た様
うらゝかさ海の底にも足の跡
おく病さ舟の廻りで斗カ拾ひ

二七32

七五1

傍初14

清・佐藤 贊。

553 借金の穴へ娘を埋めるなり 文集

山田 借金の果ての娘の身売り。

穴と埋めるの縁語仕立ての句。でも、娘の穴を通わすとも考えられない事もないが、行き過ぎであらう。

喰かねる親で娘かめしを盛り 六一五

孝女の肉を人参にしてきざみ 二二六、四六

泣くむすめ側で如件なり 傍三九

伊吹 「行き過ぎ」です。

清 同。借金の穴埋めをしただけ。考えて見れば惨い句である。しかし、これが江戸時代。佐藤 贊。

554 京町へいつてもはりハつよいなり 未学

山田 京町は吉原の一番奥に位置して、いわゆる五丁町では格が落ちる。と云つても、流石そこは吉原、江戸の張りは失われていない、というのであらう。

江戸かふさかつたて京へあがる也

傍五二六

京町へ江戸をくらつたきやくが来る

一九二

伊吹 京町は三浦屋、大文字屋など一流の妓楼があり、江戸町につく格式である。元吉原開設時、京町一丁目は京都六条から来た麴町の遊女屋が、同一丁目は少し遅れて上方風の遊女屋が移つたものである。開設時は上方風であつたかもしれないが、現在では「同じく江戸女郎也」(「川柳辞彙」より)で、江戸町に勝るとも劣らない江戸の張りであるという意ではないかと思つ。

小栗 伊吹説贊。名前は「京」だけだ。

清 同。

佐藤 同。影に京町三浦屋の万治高尾があるか。

555 つらい事一年おきに嫁ふくれ 和国

山田 一年置きに妊娠、出産は確かに辛い事ではあらう。しかしそれには甘美な前奏曲があるわけで、参考句のような事もあるので単純に断定は出来ない。男女まして夫婦の仲など他人の外である。

気を取直し〜娘はらみ 五八三五

いんくわだてしい〜内義はらむ也 末初三

さわりや産さわらにやたゝる山の神 宝八九二五

清 贊。避妊器具の無い時代の話。

佐藤 贊。

556 はした錢でハはりかたハかへぬなり 雨譚

山田 張形は水牛角や鼈甲などを細工して作るが、これには可成りの手間と技術が要り、高価なものであつた。然らば、その価格は果たして幾許であつたか。未知庵先生は「管見の及ぶところでは、未だこれを明記した文献に接し得ない。たゞ一つ不明確な資料であるが」として「好色小柴垣」などから「水牛角の並製品は大体一本が一両か二両くらい、鼈甲材の特製品は更に何倍もする価格であつたと推定」(「川柳四目屋放」)されているが、いずれにせよ「端錢では買えぬ」ものであつた。

高ひ物ともいわすして 宝一三松三

かんさしてかきくへのこねぎるなり 安六松六

大小はあれと直段は牛角なり 一四三三

小栗 贊。なれど何が面白い句か。御端女あ

たりの給料では買えぬということをかける

か。

清 小栗説のようなことでしよう。

佐藤 同。

首香のむ

政岡日枝子選

お隣も同じレベルの雨が降る

人の世の脆さが見える老眼鏡

ようこそその微妙なトーン聞き分ける

芒が原の狸は月とねんころり

私も蹴りたい背中横にいる

駅を出て止まらぬ汽車と気がついた

押し入れに無駄を溜め込む癖がある

生活のリズム崩さぬ戸を開ける

軽すぎる話へ開かぬ自動ドア

百日紅理由を聞いて滑らせる

雷鳴が駆ける近場で老いが近く

停年の駅におろして来たキャリア

無職には風の行先まで見える

水が欲しいと言える力は残しとく

丸い背はわたしと同じ釣鐘草

明日まできつちりシヤンとするラップ

思考回路も不調つづきの炎天下

金魚売る声も一緒に買っている

念ずれば仏になったシルエット

倉吉市 野口 節子

和歌山市 西山 幸

八王子市 播本 充子

米子市 林 瑞枝

西宮市 西口いわゑ

米子市 野坂 なみ

和歌山市 古久保和子

八尾市 田中トシエ

大和高田市 鍛原 千里

松江市 川本 晔

米子市 白根 ふみ

倉敷市 井上 富子

藤井寺市 太田扶美代

藤井寺市 高田美代子

松江市 安食 友子

西宮市 牧渕富喜子

大阪府 米澤 俣子

三田市 石原 歳子

八尾市 井尻 民

出来ること自分でしよう草を抜く

母さんに大きなダイヤつけて描く

五十円の玉子女を走らせる

手は貸すがうちには金がないのです

言いたいこと呑みこみストローを曲げる

さるすべり咲いて去年はいた夫

追伸が胸に絡んで離れない

あの雨は地球の予告かもしれない

うっかりと影を忘れて来たようだ

受け入れる形に脱いだハイヒール

宿題をしてるまじめな夏もある

パズル解く電車ほどよく空いている

華やかに根も葉もつけて飛ぶ噂

いい予感眉がササッと描けました

まだまだと余白に花の種を蒔く

偽りのカラカラまわる風ぐるま

ナス帽脱ぐと薫ってくる女

天寿には逆らうすべのない荒野

息切れの部屋に酸素がほしくなる

映像美冬のソナタにはめられる

浮き雲に乗つてときどき里帰り

面舵一ぱい世間へ出て行く孫である

衝動買いいしても孫が着てくれる

ひと言を控えて夫に勝てました

老いて子に従うことでけりがつき

米子市 中井 ゆき

寝屋川市 平松かすみ

鳥取県 佐伯 やえ

八尾市 宮崎シマ子

熊本市 永田 俊子

西宮市 門谷たず子

尼崎市 長浜 美籠

米子市 木村富美子

羽曳野市 吉川 寿美

橿原市 安土 理恵

八尾市 村上ミツ子

寝屋川市 森 茜

奈良県 渡辺 富子

寝屋川市 籠島 恵子

弘前市 宮崎ヒサ子

富田林市 片岡智恵子

箕面市 出口セツ子

倉敷市 小野 克枝

倉吉市 山中 康子

海南市 堂上 泰女

香芝市 大内 朝子

豊中市 安藤寿美子

八尾市 高杉 千歩

大阪府 神夏磯典子

東大阪府 笠井 欣子

じつくりと見つめ直している絆

濁らせてならぬ生命の水溜り

かくれんぼ好きなわたしのお茶に

厚切りのレモン気怠い日のお茶に

ころなしか蝉しずまりぬ秋立つ日

クシユンクシユン夏もティッシュの花咲かせ

ハルウララに負けられません活人入れる

速くてもこころを繋ぐ手紙書く

美しい女になつていく手順

微風しか知らぬ母娘でありました

秀才も惚けが見えたど風便り

近頃はそんな事でも離婚劇

保護色で生きることもっと楽になる

定年後婦唱夫随でご円満

一人ずつ違つた花の咲く地球

歳かなあまさかと思ふへまをする

お日さまに抱かれてみよう枕干す

ごほうびの指輪自分で買つてます

合歓の花咲いて空気が軽くなる

割引と聞けば小銭がさわざだす

少子化のラジオ体操覇気がない

一言もしゃべらなくてもいい夫婦

気まぐれな風に飛ばされ一人居る

身勝手な男に添うて惚れている

名月を残して祭りの灯が消える

富田林市 中井 アキ

倉吉市 米田 幸子

羽曳野市 徳山みつこ

鳥取市 徳田ひろこ

尼崎市 春城 年代

和歌山市 楠見 章子

和歌山市 山口三千子

鳥取県 西原 艶子

池田市 栗田 久子

鳥取県 吉田孔姜子

米子市 小塩智加恵

藤井寺市 若松 雅枝

和歌山市 上地登美代

大阪市 星野きらり

東京都 清原 悦子

愛媛県 花岡 順子

東大阪市 中岡 妙

東大阪市 北村 賢子

和歌山県 森下 順子

松江市 兼本 政子

鳥取県 録沢 風花

西宮市 緒方美津子

吹田市 大谷 篤子

和歌山市 柏原 夕胡

三田市 久保田千代

失敗を笑うしかない歳になる

ツィショット公園座るところがない

サンガラス バイクの時は若返る

若者の体を妬いているわたし

暑いけど元気ですよと墓に水

振り向かぬ心の意地を悔いている

嵌められて気づけば人生もう終わる

温泉宿こどもポロポロ嘘が湧く

贅沢な絹のパジャマを着て眠る

省エネに協力出来ぬこの残暑

明日へと続くページは白のまま

飲み込んだ言葉が並ぶ日記帳

陽が落ちて私の影も淡くなる

幽霊のお岩も出ない熱い夜

水水ひとの温みを退ける

まだまだと古希がラッパを吹きたがる

大阪市 小泉ひさ乃

東大阪市 安永 春

交野市 山川日出子

米子市 門脇 晶子

大阪市 川久保睦子

鳥取市 福田 登美

河内長野市 植村 喜代

大阪市 渡部さと美

米子市 足立由美子

大阪市 本間満津子

芦屋市 黒田 能子

藤井寺市 鴨谷瑠美子

鳥取県 土橋 睦子

寝屋川市 太田とし子

東京都 やまぐち珠美

鳥取市 永原 昌鼓

節子さんの句―日々の営みの中で喜怒哀楽をくりかえす。大方の人間は生活経験のなかで、同程度の物を背負うと言われている。それらの

老眼鏡から、老いの知恵で世の中をみると弱い処に気がつく。そのあたりを何か言いたそうであるが、無言で我々に語りかけてくる句である。

充子さんの句―雑多な音の中の生活、その中でも人間が発する音は微妙である。ましてや、心の声を聞き分けるには、相当心を研ぎ澄ます必要がある。逆の心理で音を呑み込むものも一計かも知れない。

瑞枝さんの句―作者が得意とする句仕立てであつて、芒が原の旦那さん

を偲んでの句に、じんと来るものがある。追憶に耽る作者の姿が目

に浮かびます。

副

田辺正三郎選



副で良し真つ赤なバラを盛り立てる
副題が長いテレビのサスペンス
副のつく役はちよつぱり気が軽い
古墳から副葬品が夢語る
副食は酢漬への紫蘇で越す炎暑
副業に頼つて生きる老夫婦
副題に惹かれて買った健康書
副作用はない漢方薬の自負
何もせず副会長の任期終え
副のつく役なら受ける意け者
副ながらなくてはならぬカスミ草
副収入ちよつぱりあつて夏の夢
何事も陰の支えは副が持つ
副業が本業となる新卒者
長は駄目 副なら受ける町の役
こんなにも副詞で変る物語
やせ薬副作用など気にせず
ホスよりも副で気楽に生きてます
印籠の紋が見せ場の副將軍
水面下こぎ続けてる副の役
副題は飛びつような疑餌の針
父元氣息子万年副社長

典子 遠野 朝子 黒兔 泰女 愛論 公誠 慕情 歳子 久仁雄 勝視 ヒサ子 雅明 水笑 美紗子 美代子 セツ子 正劍 彩子 一粹 玄也

エンゲル係数知らぬ豊かな副食費
小回りが利くから副が打つて付け
片腕と言われ副の字取れぬまま
仏様が副業始めた保育園
副題でわかつたふりの抽象画
副葬へ大好きだつたぬいぐるみ
大輪へやがての夢を見る副木
新業に医者も知らない副作用
土方が藤で近藤引き立てる
正よりも副に止まる処世術
母という副木細くてしなやかで
副賞が目当てか孫の一途な目
副賞の無い賞状は筒の中
副収入あつて財布が踊り出す
形容詞副詞と國語ややこしい
佳
難解も副読本で片がつく
副食に文句はつけぬ戦前派
副作用無いからお灸すえてます
カミさんが副社長です町工場
お互いが副木になつて老いふたり
人
ドクターが試しているよ副作用
主役にはなれずともよいかすみ草
天
先頭を風よけにして副でよし
軸
会長はお飾り副が実力者

茂代 善信 正雄 俊子 章子 弥生 高栄 いさお 徳三 活恵 恭昌 美義 雅城 昌鼓 敬之介 准一 一知 あずき 宏章 徑子 理恵 門谷たす子

うっかりもちやつかりもいる子沢山
ちやつかりもしすぎて人に嫌われる
積木崩して取り分だけは取りに来る
ちやつかりとしなやか今時生きられぬ
ちやつかりと取られてる消費税
賞品が出ればちやつかり参加する
お小遣いいただくまでのお手伝い
ちやつかりと御馳走になる通夜の席
三猿を逆にちやつかり生きている
ちやつかりと香り道してたテーマラン
ちやつかりと赤でも渡る処世術
主婦になりちやつかり分ける残り物
ちやつかりとうまく味方がみえぶ
景品の列へ家族がみな並ぶ
ちやつかりと休日は孫がやってくる
ちやつかりといいとこりの生き上手
矢印の向きをちやつかり変えている
ちやつかりといつも旗色読んでくる
ちやつかりと良心家に置いてくる
ケイタイをわざと忘れて飲み歩く
ちやつかりと冗談らしく本音言い

勝視 たもつ 恭昌 婦美子 隆度 千代 昌鼓 彩子 富子 注湖 一粹 泰女 清史 准一 圭一郎 朝子 千里 隆盛 伊津志 あずき 青生

ちやつかり

松本 文字選



路 集

ちやつかりな男も昼寝しています
ちやつかりをはや身につけた幼稚園 (備)
釣り堀に土産のさかな売っている
日曜は実家で食事しています
記念写真は先生の隣です
お相伴母より高い服を買いました
今日の損明日はちやつかり取り戻す
銀行を見てもちやつかりと輪を抜ける
オンリーワンちやつかり余生光らせる
ちやつかりと風の当らぬ場所を選ぶ
友人の彼女に送るラブレター
酷暑めと言いつつビール追加する
選挙区へ行った時だけ国歌詠り
追伸に無心ちやつかり覗かせる
既成事実つくりOKさせられる

妻子
保州
碧
七ツ子
庸佑
志華子
敏子
典子
一花
照彦
哲男
浜丘
理恵
歳子
扶美代
茂代
半覚
螢

ちやつかりとして居るけれど憎めない
うつつかりが落せばちやつかりが拾う
ちやつかりと何でも掴む豆の蔓
家宅侵入となりの柿を逮捕する
ちやつかりと少し曲っている胡瓜

ちやつかりの方が世の中得みたい (花)
ちやつかりと私の席に座っている 順子
ちやつかりと私の席に座っている 時雄
生き恥を重ねちやつかり生きている 宮西弥生

ちやつかりと座った石はどかさねぬ 軸

生 む

鶴田 遠野選



五人の子を生み今はケアハウス
豊かさが生んでしまったごみの山
新しい噂生まれた化粧室
いい顔だ産後の妻は美しい
失敗の中から生まれ出る宝
記録生むまでの努力は語らない
誕生の秘話大袈裟に言うておく
みそ汁の味から出来る新所帯
ひと言が誤解生んだり纏れたり
満ち潮にのって大きな呱呱の声
友情が生まれて心丸くなり
新しい風が生まれる配置換え
句読点打ったあたりで余裕生む
初孫が生まれて籍に入られる
出生率一・二九親のテロ
このままじゃ疑惑生むので洗つとく
諍いを生む私のエゴイズム
悲喜劇を生む空港の二十五時
環境の保全が生んだ虫の火
親の意に添わぬ卵を生むと言う
遺伝子と努力が生んだ青いバラ
晩学が今日も生んでる好奇心

五人もの子を生み今はケアハウス
豊かさが生んでしまったごみの山
新しい噂生まれた化粧室
いい顔だ産後の妻は美しい
失敗の中から生まれ出る宝
記録生むまでの努力は語らない
誕生の秘話大袈裟に言うておく
みそ汁の味から出来る新所帯
ひと言が誤解生んだり纏れたり
満ち潮にのって大きな呱呱の声
友情が生まれて心丸くなり
新しい風が生まれる配置換え
句読点打ったあたりで余裕生む
初孫が生まれて籍に入られる
出生率一・二九親のテロ
このままじゃ疑惑生むので洗つとく
諍いを生む私のエゴイズム
悲喜劇を生む空港の二十五時
環境の保全が生んだ虫の火
親の意に添わぬ卵を生むと言う
遺伝子と努力が生んだ青いバラ
晩学が今日も生んでる好奇心

さまざまな噂を生んで消えた風
儲け生む話はない顕微鏡
モナリザの微笑み深い謎を生む
人間の都合で卵生まされる
苦を宿し己無にして生む真珠
生みのなら金のタマゴを一つだけ
玉子生むように太陽顔を出し
いたずらを生む天才といる疲れ
生むことと決めて女の太い芯
たまごつち一人生まれて一人死ぬ
子を生んで母という字が重くなる
反論の嵐末席から生まれ
命生むことまで科学するこわさ
愛を生むまざざしか美しくなった

志華子
孝一
夕胡
庸佑
あずき
尚士
歳子
倅子
志華子
寿美枝
雅知
彩子
愛論
黒兎
郁郎
四郎
岳水
花匠
千里
鐘造

生み直すことの出来ないDNA
卵生むことさえ夢のプロイラー
少子化のニュースに生めぬじれつたさ
優しさを生む恋ならば何度でも
生まれたときからカウントダウンされている

水を生む森にはきつと神がいる
生む決意おんな菩薩の顔になる
いのち生む星であなたと組むダブル
生むことをためらっている被爆の血

みつこ
浜丘
典子
三代子
朝子
美代子
正和
順子
あずま
扶美代
雅城
権悟
悦男
たず子
一花
伊津志
重人
理恵
保州
隆盛
慕情

初歩教室

題一孫

三宅保州

「孫」の句の可否

「孫の句を作るな」とか「孫の句は採らない」とか聞くことがあります。その意味は、孫のあんな人が孫の句を作るとどうしても「孫が可愛い」という意味の句になってしまい、極く当たり前のことを読んだ平凡な句になり、面白くもなく為にもならないということです。逆説的に言えば「孫」の句を作句するときは、孫が可愛いという域を超えた、当たり前のことを当たり前でないように非凡に読んで、うーんとうならすような句を作れば、孫の句大いに結構なことと言えます。

このことは孫に限らず、例えば太陽は明るい、海は広い、夏は暑い等当たり前の例句は枚挙にいとまがありません。今回の集句に「孫などは句にはするなと先輩 照彦」という句をいただき、勉強の様子が窺えました。

発想の良い例としてしばしば引用される「水が溶けると水になるでは平凡。水が溶けると春

になると詠むと感性の良い佳句が生まれる」という例えを心にとめたいものです。

【課題が分かり難い句】

「孫」にのめり込みすぎると「孫」と分かり難い句になることがあります。

人寄せ値スーパードラシペダル踏み
へそくりに羽根が生えた夏休み

ご祝儀が村から届く三人目

手のひらに乗せられそうな靴並ぶ

台風の時つた後はゴミの部屋

ドの音符いくつと試す五歳の目

あとの三句、「靴並ぶ」は「孫の靴」に、「台

風の」は「孫台風」に、「五歳の目」は「孫五

歳」とすれば「孫」の句と分かります。

【孫が可愛い句・自慢の句】

どうしても孫は可愛い句になり勝ちですが、

その域を超えないものです。

同窓会孫の写真も出してくる

おかげさま長寿の秘訣孫自慢

あどけない孫のしぐさに泣き笑い

孫至良い所だけ私に似

ばあちゃんに似ても可愛い女の子

目に入れて痛くない孫抱いている

絵手紙にいつでも孫を描いてくる

孫に菓子与えてママに叱られる

ワンパクの孫は私の生き写し

初孫を見せに近所を回つて来

【同想句】(孫のおねだり)

ねだる孫あのねあのねと機嫌取り

おねだりも上手になった孫娘

世辞のよい孫に財布の紐ゆるむ

愛嬌の孫に財布のゆるむこと

親のいぬ間に聞いてやる孫の無理

孫になら出孫払いのサポーター

三々五々外孫の来る年金日

何故ちんちんないのとねだる孫娘

【おねだり】の佳句です。

【添削・批評句】

原 観覧車孫はにんで通り過ぎ

原 初孫に男の子だと借りに来る

この二句、読者に句意が分かり難いのは。

原 孫育てまごまごした日懐かしい

孫とまごまごが語呂合せのようです。

原 他人の孫いつまでやるのその話

添いつまでも聞かされている孫自慢

原 孫背丈恰好段々爺に似る

添 背背恰好爺そっくりになった孫

原 鏡拭く孫は誰に似てるかな

中六章子でリズムが悪くなっています。

添 孫誰に似てるか採めている家族

原 孫の塾迎え散歩の月水金

添 散歩兼ね送り迎えの孫の塾

秋 星

節 子

紀 子

隆

青 生

英 旺

千 代子

昇

像 山

侑 子

タカ子

れんげ

孔 一

敬之介

雅 代

賢 治

原 米寿母孫三十六とうまが合い 道子

添 三十過ぎた孫と気が合う母米寿

原 パンコンへ孫追い抜いて教えをう 美紗子

添 教えをうのは誰か分かり難いのでは。

添 パンコンに詳しい孫の教えをう

原 ケータイのおもちゃ喜ぶ進む孫 光枝

下五が苦しい。「孫二歳」とかにしたい。

原 用事はいや小遣い欲しい孫嫌い

「嫌い」はきつすぎませんか。せめて「論ず」
ぐらいにしませんか。

原 孫登場財布リビングうろたえる こそえ

「財布リビング」は苦しい。財布だけに。

添 孫登場財布の紐がうろたえる

原 孫の手が強い握手をして帰る

添 会うたびに孫の握手が強くなる 智加恵

原 ジュース飲み孫もアツと真似をする 忠子

添 ビール飲む真似して孫はジュース飲む

原 多すぎる孫に年玉悲鳴上げ 益子

年玉は季節的に外れるのみでなく、現代的に
は何と言っても年金がビツタリ。

添 多すぎる孫に年金悲鳴上げ

原 少し工夫すれば佳くなる句

原 孫の算数答え合うけど式違う

添 孫の式違うが答え合っている

原 カタ言の孫が無邪気を配ってる

添 カタコトの孫の無邪気に救われる

原 孫たちで今の時代を感じ取る 稔

五七五毎に空けないようにしましょう。

添 孫たちに今の時代を感じ取る

原 汗顔にも孫に漏らして露見する 武

何が露見したかユーモアや意外なものを。

添 へそくりを孫に漏らして喋られる

原 私似を孫に見付けた笑顔良し 幸

添 私似で孫もやっぱり笑顔良し

原 そこはかとなく人相を継いだ孫 信雄

添 言われれば家族みんなに似てる孫

原 近つた子の癖写してる孫仕草 章司

孫仕草が無理。句想はずばらしいです。

添 逝つた子が孫の仕草に生きている

原 孫描いたピカソもどきの絵を飾る 信子

原 ピカソ似の絵を描いている孫二人 千華

添 孫の絵はどこから見てもピカソの絵

原 親が言えぬ小言は祖父の言う役目 つよし

添 親が言わぬ小言は爺が言うておく

原 次々と楽しい夢をくれる孫 イセ

原 子離れは成功孫は離せない 喜子

この一句は具体性が入ると佳くなります。

原 望んでもどうにもならぬ曾孫待つ 政子

原 ままことに息子夫婦の仲を見る 夕胡

原 虫の名を覚えて孫の相手する 好

原 孫の手がなくて定規で掻く背中 准一

原 台風で休校の孫うれしそう 宏子

【佳句】

孫白風笑い袋を詰めて来る 利子

もう一人孫が欲しいと娘にねだり さいお

盆踊り眠つた孫の下駄を持ち きぬ子

遠めがね孫の手綱の切れるまで 映子

ザパーゲン孫のサイズへ想い馳せ 美義

ばあちゃんとゲームボーイとどっち好き 雅明

いっぱしの口聞く孫は紙おむつ 重之

目の中に入るの嫌と言い出した 淳司

薄められ孫にとどいたDNA 正和

【今月の推せん句】

もみじの手チャンネル権を握りしめ 寺井弘子

握っているのはテレビのチャンネルだけでない

いでしょう。句意から「孫」に違いない。

外国の孫が遊びに来てと言つ 奥時雄

「嬉しいけれどとても高くつき」と続く連句

のようなおかしみが溢れています。

足し算は円をつけたら解ける孫 井丸昌紀

句意は同じでも「最近の子どもはちゃっかり

しています」と詠めば凡作ですが、この句はそ

れを具象化して風刺、穿ち、かいきやく性に富

んでいます。句作の見本になります。

【私の句】

いっそなら孫自慢会しませんか

聞き分けぬ孫を叱って寝付かれず

秀句鑑賞

同人吟 瀬戸 まさよ

— 9月号から

かつて、大岡信が朝日新聞連載の「折々のうた」に武玉川の「目へ乳をさす引越の中」

を載せたところ全国から氏の解説に異を唱える投書、電話が届きその数のスゴサに氏自身、驚嘆したという記事があった。川柳人口の裾野の広さは意外と知られていないのではと思う。同時にそのことは素晴らしい句も作られている可能性もあると勝手な推測をした私である。世間は広いということを変えて痛感させられた一文であった。

今回、同人吟の秀句鑑賞の依頼をいただき未熟を省みず、これも勉強と厚かましくお引き受けしたものの一八七二句の力作から選ぶのは至難の業、しかし一生懸命に選句させていただいた。

風を眺む私の中の山頭火

牛尾 緑 良

放浪の自由俳人種田山頭火。束縛からの自由、気ままに生きるエゴ、人間の弱さを諷う山頭火に男は惹かれる。人生の達人で、川柳の大ベテランでもある作者ならなおのこと。

日が昇る無から始まる二十四時

西口 いわゑ

怖くない無から生まれて無に帰る

吉田 あずき

これは人生哲学の句であり、人生の何たるかを詠まれたもの。しかし一句の視点は違う。前者は無から有を生じる今日一日の胎動、やるぞ！の気力が伝わってくる。勤めに、家事に、学校へとそれぞれの生活が始まるのだ。片や人生の締め括りを考えた明鏡止水の心境。なすべきことはなしたと思われている作者。そして双方に通ずるもの、それは自然体の生き方であり、サラリと詠んでみせる腕の牙え。

ぬるま湯の僕を時どき野に放つ

岩佐 ダン吉

ご立派。人はみな、つつい居心地のよい場所には安易に居着いてしまう。しかし自分の甘えを許せない作者はそんな自分を叱咤激励、マンネリを打破しようとする。下五の野に放つにその意図が凝縮されていて心地よい。

サボテンの花が無口に咲いている

木本 朱夏

砂漠に咲くサボテン、とげをもつサボテン形も無器用なもの、しかし目を腫る鮮やかな色の花を咲かせるサボテン。サボテンは地味な姿を愛してくれる人に黙って美しい花でむくいるのだ。無口という表現にそこはかないユーモアを感じさせる。

お月さまわたしも古くなりました

谷口 義

さらりと詠ませているが含蓄に富んだ句。太陽のある限り、地球の私たちに月は皓々と照る。うれしいとき、悲しいとき、切ないときも月は温く受けとめ、慰め、ときには励ましてくれた。長い長い間ほんとうにありがとう。感慨深く月を見る作者。私も同感。

広告紙折ってオヤツの箱にする

須郷 井蛙

ツルを折るやさしい顔になつている

中井 ゆき

折り紙は世界に誇る日本独特の文化。子どもたちの感性を育てる大切な遊びである。この頃は大人も教師も折り紙をおれる人が少なくなり淋しい限り。広告紙で箱を折るアイデアはすばらしい。ツルを折っていく手に見える子ども達の目。それを楽しんでる作者。

満月になると吠えなくなってくる

倉益 一瑠

男性は狼。本能が願望が腹立ちか、いや恋に燃える心か満月に向かつて腹の底から声を出すのだ。そう、吠えるのだ。女性は折る、泣く、いや月の美しさに陶然となるのかも。しかし、女だつて吠えたいときもある。

脇役の道をえらんだ吾亦紅

安藤 寿美子

言い得て妙。主役を引き立てる洪い脇役の演技、脇役あつての主役でありドラマは構成される。可憐な紅色の小菊を一層美しく見せる吾亦紅。両者相俟つて涼風を感じさせる花差しに私も友人も吾亦紅の可憐さを改めて、愛おしく思った。

青空の深さと平和語り合う

永田 俊子

戦争という罪でない人殺し

村上 直樹

青い深い空を仰いで平和ってこんないいものかと感慨をもつ作者。爆弾、機銃掃射、家の焼失、食糧難、物資欠乏など五十九年前の日本の姿を知る人は全人口の四分の一か。戦争被害者はいつも一般の人々なのだ。人を殺しても罪に問われないのが戦争。イラクにも早く平和の戻ることから願う。

丸ごとの西瓜井戸ナシシシ

古久保 和子

ウッフフと笑つてしまふ。今の生活環境をズバリ言い得た句。丸ごとの西瓜は売られていても買うのは切り西瓜。ズシリと重い西瓜丸ごと貰つたのはいいが、さてどこで冷やしたらいいのか右往左往するようすが目に浮かぶ。

足腰の軋まぬうちにヨーロッパ(スイス紀行)

西出 楓 楽

サラリと本質を衝いている。海外旅行のなかでもヨーロッパは遠い。そう、行けるうちに行くべき地なのだ。足腰の軋まぬうちに。軋まぬという表現に脱帽。

信号がかわるぞ挨拶ほどほどに

杉澤 汀

誰もが一度や二度は経験する日常生活の一幕、見落さず句にされたのはさすが。ほんの二、三分待つのに損をした気分させる信号。

型崩れするから笑えない仁王

三宅 保州

お手本にすべき川柳。寺門の両わきで、こわい顔をして怪しき者は通さないぞと踏んばっている仁王。この顔、この姿勢を崩しては職務怠慢のそしりを受ける。だから崩せぬ。

レシートに休みませんと書いてある

高島 啓子

日本の景気は少しずつ上向いていると報道されているが、それは限られた企業、まだまだ回復されていない現状だ。店を開けていれば日銭は入る。売り上げを延ばしたい店は休日でも開店していることを客に知らせる必要がある。それにはレシートに打ち込むのが最も確実な方法。女性ならではの句。

先生の優しさどの子も光っている

政岡 日枝子

先生の優しさとは子どもへの愛情に尽きる。子どもの気持ちを受けとめてくれる先生に子どもたちは全幅の信頼をおく。先生が好きになるのだ。子どもたちが生き生きと光り輝くのはそういう教師の在り方だと思つう。

まごころを売って老舗の灯を守る

岸本 孝子

この頃は有名な老舗でも昔の味とやや違う。つまり味が少し落ちていと思うのは私だけだろうか。今の人は本当の味を知らないから基本になる素材の質を落すのだろうか。息子の代になつて味が落ちたという店の話によく耳にする。利鞘が減つても頑固に昔の味を守り客に満足してもらいたいという店主の心意気や杜、これは食べ物だけの話ではない。

秀句鑑賞

— 9月号から

石倉 美佐子

コーヒーを濃い目に柵目埋まらない

平野 あずま

爽やかな巻頭の六句。この一句はとても共感致しました。さあ私も熱いコーヒーを頂いて、ペンを進めましょう。

プリンター夏バテらしいやややや

堀 正和

川柳らしい見事さ。やややの五字にすつかり参りました。声を出して吟じてみるとまた面白い味が出ます。家のテレビも五輪最中に夏バテで今電気屋さんに行ってます。

玄関に出征兵士の札のゆめ

福岡 博利

五十九年の昔になりました。靖国神社の様になると信じて散った兵士の方々、そして何も知らない国民の多くは、一瞬の内に死んで行きました。八月十五日は今でも涙が流れます。

平均点あたりがぼくの棲み心地

三浦 強一

上位では肩が痛くなる、かと言って下位では物足りない。良い場所ですね、程々の位置です。

嘘ついた口が粘っていく嫌悪

伴 洋子

嘘でねばねばになった口中。でも、人間として付かねばならない嘘もありますね。

ライバルの靴を理性の手が揃え

渡邊 伊津志

高僧のようなお方に思います。私にはまだ出来ない事かもしれません。でもある意味でライバルは心の起爆剤になったりします。

玄関に置いてあるのは魔法の杖

小豆沢 歌子

城下育ちで楚々とし美しい女学生姿に、今日は魔法の杖を借りて歌子さんに逢いましょう。戦争を越えて数十年振りかで川柳の小路で再会し、貴女の文才の素晴らしい開花を嬉しく思っています。これからもこの妙なる人間模様を、命ある一句を作ってくださいね。

騒いでもウツでも美女がよろしいな

多田 契子

美女ってお得ですね。おたふくだから少々私拗ねます。せめて個性的でよろしと言ってください。

内緒だよおむすび下手なおぼあちゃん

横田 春名

おむすびころりんが三角に上手に出来ないのです。だから何時も俄むすびになるのです。二人の子供達は不足は言ったこと無いのだけど。

夫には安いと言つてある指輪

西川 義明

優しくて可愛らしい方ですね。お揃いでお出掛けの時に、クラス会にも、是非「私」を忘れないで連れて行ってね。

老妻の風呂の湯音に耳立てる

布山 嘉信

ほのぼのとした愛情が滲む佳吟になりました。大丈夫？と私も時々声を掛けます。

ちよっとだけ薬味の代りしておこう

山田 婦美子

ちよつぱり辛くびりびり苦い一言を、夏バテに振りかけましょうね。

その内は何時の事だか未だ来ず

藤 永 美千代

本当に「その内」の約束は果たされたことが無い。母さんは待ちぼうけばかりです。

ヘルベスが住んでいますと自己主張

坂部 かずみ

忘れた頃に頭を出すヘルベス。じわじわと一夏唇に出入りして悩まされました。

誌上川柳大会考

閑人閑話

田中正坊

川柳塔社では今から十年前、八〇〇号記念行事として全国誌上川柳大会を行った。その頃は今と違って、このような催しが少なかつたためか、たいしてPRしなかつたにもかかわらず、九九一名の参加者があつて成功を納めた。私はこれに続いて、全日本川柳協会が主催する全日本川柳誌上大会にタッチし、選者も務めた。この大会は毎年実施され、多い時には二千七百名を上回る参加者があり、恒例行事として定着している。

これらが火をつけたのか、現在は誌上大会ブームと言つていいほど、全国各地で数え切れないくらい実施されている。柳社をはじめ川柳関係団体の主催もあれば、地方自治体あるいは業界団体や特定業者が行うものもあり、中には数万名の参加を集めるケースもある。川柳の普及という面では、少なからぬ効果があることは確かだが、その作品内容につ

いては玉石混淆で、質的向上の点では手放しで喜べないものもある。

このような状況の中で、私も世話人の一人である「あかつき川柳会」では、今回、鶴彬顕彰全国誌上川柳大会を実施した。各地の柳社・川柳人を中心に一般にも呼びかけたところ、四十三都道府県から五四六名という予想を上回る参加者があり、五人の選者によつて大賞・准賞・佳作と入選一〇〇名を決定した。すべて自由吟だが、鶴彬はじめ先覚川柳人の反戦平和と社会風刺の精神を現代に生かすことを趣旨として掲げ、これに賛同する作品が集まつた。

あかつき大賞に輝いた句は、「あばら骨見せてドームは訴える」でケロイドを見せて、訥々と体験を物語る老いた被爆者の姿を示し、准賞「日の丸をつけた真つ赤な霊柩車」は、イラク派兵の自衛隊を思わせる意表をついた作品、そして同じく准賞の「九条を丸ごと渡す子や孫へ」は、平和憲法を体を張つて守つてきた戦中・戦後派が、子々孫々に至るまで無傷で引き継ぎたい願いをこめていた。

受賞句に代表されるように、原爆被害と核廃絶から戦争・空襲体験を詠んだもの、第九条を核心とする憲法をたたえ、改憲の動きを批判する句、自衛隊の派兵を含むイラク戦争

の問題、日の丸・君が代・靖国参拝から有事法制・年金問題に至るまで、いちいち挙げられないほど、現在の日本・世界をめぐる状況が対象とされており、画期的な時事吟のアンソロジーとなっている。

入賞・入選の枠にもれた作品の中にも、それらと比べて遜色ないものが多いことから、巻末に全参加者の一人一句抄を収録し、鶴彬への認識を深めるため、彼の経歴・作品なども掲載した鶴彬顕彰全国誌上川柳大会入選句集「あおぞら」(B6判・56ページ)を刊行し、参加者に送付するとともに希望者への実費頒布にも応じている。

いささか同句集のPRめいってしまったが、誌上川柳大会は、このような明確な趣旨や目的を掲げて行えば必ず成功するし、また、参加者が思つたほどでない場合も、優れた作品が集まれば川柳の質的向上につながることになる。日時や会場を設定し、大がかりな準備をしなければならぬ川柳大会と比べて、誌上大会は選者さえそろえれば何とか格好がつくということから、イージーに実施することは慎むべきではないかと思う。また、川柳作家が業界・業者のPRを目的とする誌上大会に選者として参加する場合は、厳として作品本位の選句を貫くことを訴えたい。

へボはへボなりに

山口光久

趣味とは何か、広辞苑によれば学問的に難しく解説しているが、その一つに「専門家としてでなく、楽しみとしてする事柄」とある。私は単純に、楽しみながら好きな事をする、と理解し好きなことをしている。それは上手下手に関係なく、単純に好きな事であって下手の横好きである。その中で一番先にくるのが囲碁である。

囲碁といえはプロ棋士のような雲の上の人から私のようなへボの者まで様々である。そこでへボはへボなりに囲碁の事について一部を綴ってみる。

囲碁の歴史は相当古く、時代劇の中で殿様が碁を打ちながら作戦を練っている場面を目にする事がある。徳川時代には將軍家に碁を献上するため、毎年一回江戸城黒書院において、各家元代表らによる対局が行われた。対局は何日に及ぼうがそれが終了するまで帰宅

は許されなかった。だから「碁打ちは親の死に目に遭えない」と言われるようになった。

碁は二人が相対し盤上の地（面積のことで目で表す）を広く占めた方が勝ちとなる遊戯（戦い）である。だから戦国時代に殿様が戦によって領地を拡大していくという野望に通じているのである。

碁を打つと相手の性格が分かると言われる。それは、碁を打つことによりその人の考え方や行動が、碁風として直接表現されるからである。

じっくりと長考タイプか直感の早打ちタイプか、それに攻撃型かおっとり型かと様々である。また、勝負についても半目勝って喜びを噛み締める人、大差をつけて勝たないと勝った気がしない人、勝っても負けてもよいが相手の石を多く殺すことに快感を味わう人等それぞれである。

でも「碁の醍醐味」といえば、やはり半目差で勝つことであろう。鼻の差で勝負を勝ち取る快感は格別である。

それに加えて対戦中の態度が実に面白く、いろいろな動作が如実に現れるものである。ポーカークフェースで戦況が優勢でも劣勢でも態度を表面に全く出さないタイプ、それに反して、優勢な局面では鼻唄がでて、にやにや

したり、劣勢な局面ではぼやきにはやき顔面が強張る人、と様々に表情豊かである。

囲碁に関する格言は数多くある。その中に一般的に広く知られているものも少なくない。その代表的なものを三つほど。

はじめに、「岡（傍）目八目」と言うのがある。これは、傍で見ている者の方が盤上を冷静に見ているので、両対局者よりも目が利くことから出た言葉で、利害関係のない第三者から見れば物事の是非善悪がよく分かるという事である。

次に、「へボ（下手）の考え休むに似たり」と言うのがある。これは、よい考えも出ないのに時間ばかり費やして考えるのは、ただ休んでいるように無駄なことだ、と言うのである。しかし、へボ曰く「へボはへボなりに熟慮考しているのだ」と。

さらに、「敵を攻める前に己を顧みよ」と言うのがある。これは、相手を攻める時は先ず自分の側に欠陥はないかを顧みて行動せよ、との戒めである。攻める時には、現在の自分がどのような身分（態勢・環境）にあるか、正しい判断が求められているのである。

格言通りに行かぬのが世の常ではあるが、私は「へボはへボなりに」へボ碁を楽しんで続けている。



ああ光子さん

宮崎 シマ子

川柳に打込んでおられた姿は立派でした。光子さんの感性ある知的な句をいくつかに紹介させていただきます。

トキ去つて美しいもの一つ減り
花百句までとはゆかぬが増す句帳
銭湯とともに横町ひとつ消え
合掌のとどのつまりは己の事

一つ橋渡り終つた風に立つ
月天心音一つなき大伽藍
掌に亡父の重みの銀時計

これきりの人が避暑地の盆おどり
人工の島にも虫が鳴き初め
政治家の笑顔いまだに馴染めない

落款に紙は命を持ち初め
旅十日心淋しい日もありて
流れ星今宵限りの未練とす

最後は平成16年7月号「川柳塔」掲載の句です。

次は私の呟吟です。紙に書いてお従弟さんにお棺の中へ入れてあげて下さい、とお願いしておきました。

毅然として孤高貫き雲に乗る シマ子
孤独から逃れ極楽父母います

光子さん、天国でご両親に甘え、お好きな川柳を作つたりして安らかにお眠り下さい。
享年八十八歳でした。 合掌

突然の訃報に驚きました。光子さんと最初にお目にかかったのは、NHKの川柳教室でした。それまでに私も寝屋川の句会に行き、光子さんも来ておられたので、何度かは顔は合わせていたはずですが、覚えていませんでした。

ですから、NHK教室へはじめて見えた時が初対面のような気がします。教室へ来られてお顔を見て、美人で頭のきれそうな方だなあと思いましたがその通りでした。川柳もとてもお上手で、講師の薫風先生にいつも褒められておられ、羨ましく思つたものでした。

光子さんは戦争のために縁がなくなつて、独身を通されたとお聞きした事があります。三菱商事に永らくお勤めをされ、私達の時代には珍しいキャリアウーマンでした。何故か私には心を許して下さつて、川柳塔の旅行、NHK川柳教室の旅行、個人的なものでも私が行くと言えば必ず一緒にして下さい

ました。プライベートは余り話して下さいませんでした。NHKで八年、寝屋川で十七年と一緒に勉強させてもらいました。

平成元年頃だったと思いますが、NHK教室の人数が多くなりすぎ、サンケイ教室へ古い人達が移ることになり、光子さんはサンケイへ移られました。私もNHK教室を退め、その後主人が病気になる、寝屋川の句会にも足が遠のくようになると、光子さんとの間も次第に遠のいてしまいました。

二年ほど前お逢いした時、不整脈はおきるし買物に行つても重いものは持てない、と言われたので、それならヘルパーさんを頼むようアドバイスしておきました。けれど介護を受けられたのか、その後お逢いしてないのでわからないままの訃報でした。

お葬式もお従弟さんに当られる方と、町会の方とで仕切つておられました。ご兄弟もなかつたようなのに、毅然として生活も崩さず、

第55回 西宮市民文化祭川柳大会

と き 10月24日(日) 開場12時
締切13時30分

ところ 西宮市民会館(市役所南隣)

会 費 1,000円(呈作品集 郵送)

宿題・選者(各題2句・席題なし)

「抵抗」	黒嶋 海童 選
「料理」	黒田 能子 選
「出直す」	井床 芦蘭 選
「匂う」	中田たつお 選
「くねくね」	石井 冬魚 選
「ひらめく」	福嶋 直球 選

投句締切り 10月16日

投句料(80円切手×8枚)

便箋1枚に6題12句(当方清記選)

投句先 〒662-0023 西宮市城山12-8

水無瀬富久恵 ☎0798-73-4666

交通 阪神西宮駅東出口北1分

JR西宮駅南側下車歩13分

懇親会 4,000円 当日受付

共催 西宮北口川柳会 西宮川柳会

学文川柳 甲子園川柳社

第54回 富田林市民文化祭 川柳大会

と き 10月30日(土) 午後12時30分
(昼食は済ませてお越し下さい)

ところ 富田林市中央公民館(0721-24-3333)
(近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200米)

お話 北澤紀味子氏

「一葉と露子の誇り高きいのち」

宿題 「違 う」 阿部 光雄 選

「おもしろい」 宮崎シマ子 選

「語」 長島 敏子 選

「感」 小山 紀乃 選

「何」 久保田元紀 選

「連」 池 森子 選

席題 なし、各題2句 締切 13時30分

会費 1500円(作品集・お茶)

賞 秀句呈賞

懇親会 4000円(当日受付)

主催 富田林市・富田林市教育委員会

(財)富田林市文化振興事業団

後援 富柳会

連絡先 池 森子 TEL&FAX 0721-25-0603

第14回 枚方市民川柳大会

日時 10月31日(日) 午後1時半開場

場所 枚方市立枚方公園青少年センター3F
(京阪枚方公園駅下車西へ徒歩3分)

余興 トーンチャイム かがやき隊演奏

宿題 「じわじわ」 本田 智彦 選

「窓」 宮田 宜子 選

「回る」 谷垣 郁郎 選

「フルーツ」 岩田 明子 選

「地 図」 籠島 恵子 選

「深い」 片岡 湖風 選

席題なし 各題2句 締切 午後2時

参加費 1000円(発表誌呈)欠席投句拝辞

賞 市長賞・市教育委員長賞

市議会議長賞

主催 くらわんか川柳会

後援 枚方市・枚方市教育委員会

午前中は「鍵屋資料館」でお楽しみ

下さい。(会場の近くです)

連絡先 〒573-0081 枚方市釈尊寺町28-4-301

足立淑子 Tel 072-853-8153

第28回 寝屋川市民川柳大会

日時 11月3日(祝) 正午開場

会場 寝屋川市立総合センター4階
(京阪寝屋川市駅下車 バス西口①乗

場より守口市駅行・③乗場より守口

市駅行・太間公園行)

兼題と選者 「好意」 森 茜 選

「無言」 碓氷 祥昭 選

「信号」 江口 度 選

「生きる」 山本 義子 選

「道楽」 坊農 柳弘 選

「永遠」 河内 天笑 選

席題 ありません

出句 各題とも2句 締切 1時

賞 各題秀句に賞状と記念品

会費 1,000円(記念品・作品集)

投句 10月30日必着(切手400円)

送り先 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9

高田博泉内 川柳ねやがわ

主催 寝屋川市川柳協会

後援 寝屋川市文化連盟・川柳ねやがわ

第8回ナンバなんなんタウン
大阪弁川柳コンテスト

募集内容 大阪弁を盛り込んだ川柳作品。
テーマにこだわらず日常生活
全般を詠んだもの

応募方法 官製ハガキ1枚につき1句
(何点でも可)

住所・氏名・年齢・TEL・職業を明記。
作品にまつわるエピソードがあれば記入

応募先 〒542-0075 大阪市中央区難波
千日前12-19

なんなんタウン商店街振興組合内
第8回「大阪弁川柳コンテスト」係

締切り 10月20日(消印有効)

審査員 岩井 三窓 ほか

賞 なんなん大賞(1名)
賞状と旅行券20万円

優秀賞(2名)
賞状と旅行券3万円

佳作(10名)
賞状とギフト券5000円

発表 入選者へ直接通知

川柳オホーツク
第6回 全国誌上川柳大会

題と選者 (各題2句詠・共選)

	吉岡 龍城	} 共選
「続 く」	泉 比呂史	
	広瀬ちえみ	} 共選
	塩見 一釜	
	大木 俊秀	} 共選
「雑 詠」	村井見也子	
	佐藤 岳俊	
	浜本 美茶	

投句締切 10月31日 消印有効

投句料 1000円(発表誌呈)

用紙 投句指定用紙または便箋

賞 「続く」合点5位「雑詠」特選、準特選

発表 川柳オホーツク17年2月号誌上

投句先 〒090-0033 北見市番場町4-10

北見川柳社誌上大会 係

TEL 0157-24-2444

FAX 0157-24-9912

主催 北見川柳社

第19回 渡辺銀雨賞
すずむし全国誌上川柳大会

課題 「箱」2句詠 詠み込み可

選者 斎藤大雄ほか14名共選

投句料 1000円

投句用紙 所定用紙、便箋用紙、原稿用紙

賞 大賞 楯・すずむし誌・米10キロ

準賞(2名)楯・すずむし誌・米10キロ

4位~10位 すずむし誌・米5キロ

11位~20位 すずむし誌

(以上すずむし誌は6ヵ月分)

採点 前抜1点 5客2点 3才3点

締切 10月31日必着

発表 すずむし誌16年12月号

投句及び問い合わせ先

〒018-1705 秋田県南秋田郡五城目町字上町76

佐藤憲夫方 川柳すずむし誌上大会係 宛

TEL 018-852-2311

主催 川柳すずむし吟社

愛・地球博パートナーシップ事業
全国誌上川柳大会

平成17年3月から開催される愛知万博に
因んで広く川柳作品を募集します

題と選者 (1題2句詠)

「愛」吉岡 龍城・泉 比呂史 共選

「知」森中恵美子・酒井 路也 共選

「地球」大野 風柳・津田 暹 共選

「万博」斎藤 大雄・會田規世児 共選

出句料 1000円(小為替)発表誌呈

締切 10月30日 消印有効

出句箋 1題1枚2句連記

(横4cm、縦19cm)

白紙へ上部を少し空ける(無記名)

郵便番号、住所、氏名は封筒に明記

出句先 〒484-0894

犬山市大字羽黒字堂ヶ洞24-30

松代天鬼方 全国誌上川柳大会係

賞 愛知県知事賞他多数

主催 愛知県川柳協会ほか

糸心

毎月24日締切・30句以内厳守 編集部

高槻川柳サークル卯の花 田中千莞子報

ぎりぎりまで切るハンドルにある野心 美 義
 ぎりぎりの潮とき安協懐に 孝 一
 ざりざりで卒業した奴いま社長 治 三郎
 踏み外す少し手前で亡父の声 (望) 惠美子
 暑いのもう慣れた頃風邪をひき 宵 草
 故郷の川の冷たさ暑い道 (井) 照 子
 万本のひまわり空を向く暑さ 比 ろ 志
 理屈より本能なんです好き嫌い 求 芽
 灯が点る理屈をつけて飲みに行く きよし
 難しい理屈は嫌い冷奴 活 恵
 いたずらな風にまさかの焰立つ 千 葦 子
 街角の鍛冶屋の焰青かった 稲 子
 孫を抱く父から消えた火の匂い 石 舟
 ポケットの拳拳かに抱く焰 重 人
 焰の匂い言つてはならぬことがある 諷 云 児
 三日月にひよっとは掛けたら繩梯子 高 栄
 繩梯子と一緒に揺れている命 スミ子
 天国の妻から貰う繩梯子 晴 美
 繩梯子かけて下さい天の川 義 一

ポケットに忍ばせてある繩梯子
 父さんが最後に降りる繩梯子
 触れるのは早い女神の繩梯子
 繩梯子世情にうとくなつて
 振子時計に根気の無さを論さるる
 いつまでも歩ではおらぬという自信
 決心をしてはいかがと茶をつがれ
 少しずつ波長がずれる老い二人
 持ち味を生かすに役を演じざる
 歳月は待たず人生雪月花
 後戻り出来ぬ余生を縫い直す

岸和田川柳会 原 さよ子報

ジンクス信じ左足から降りる癖 俣 子
 右ひだり見ても危い老いの足 基
 折角の晴着泣いてる左前 ゆり子
 新聞の社説くつきり右左 弘 子
 でっかいホラ吹いてふるさと帰れない 英 雄
 楽天家笑って悩み吹きとばす 珠 子
 シナリオに息を吹き込む演出家 房 枝
 草や木の芽吹く力をもらつとく 路 子
 人生の岐路に優しい風が吹き み つ 江
 大揺れに棒立ちになる乱気流 甚 一
 一瞬は棒立ちヒロシマのあの日 ダン吉
 左前死んだ時よと幼い日 あい子
 マルクスもレーニンも影うすくなり ゆい
 蹴くとも酒でまぎらす意気地なし 文 時
 捜しもの大事なものほどよくまぎれ 寿 海
 まだ北へまぎれたままの拉致を問う みよ子

気紛れに出したクイズが大当り 守
 満天の星に紛れて亡母の顔 仁 緑
 まぎれると思つた子守り疲れ果て 東 吉
 へそくりがばれて今晚フルコース ふみよ
 何食わぬ顔でへそくり貯めて祖母 さよ子
 へそくりを隠した本を妻が読む 盛 之
 へそくりの極意を教え嫁に出す 笑 司
 へそくりがたまれば離婚したくなり 穰 一
 良妻のへそくり生きるマイホーム 和 美
 機密費と言つへそくりに官恥じず 蛙 城
 ブランドがまきれこんでる特売場 狸 村
 大宇宙生ある星もまきれ込む 呂 万

ロース川柳会 山崎 君子報

旧道を歩く昔に逢いたくて てる
 いやな日が大手を振ってやって来る キク子
 抱きしめて叱つた涙拭いてやる みつ子
 外れてもまた夢を抱く宝くじ 藍
 軽やかに追い越して行く白い靴 トミエ
 抱き合つて言葉の壁を越えて行く 貴代子
 チャンス到来しつかと風を抱きとめる 美 籠
 この道は天に続くと思つて いわ 龍
 どの傷も思い出しつかり抱いている 武庫坊
 納得は早いがころつと忘れし 年 代
 星ひとつ見えて夜道も楽しかる 義 子
 わたしならどうしよう武億円 君 子
 川柳塔みそくち 小西 雄々報
 心にも化粧している温かみ 豊 子

つき母ほどの星にいる喪が明ける
星として自尊心だけ失わぬ
年並に似合う化粧で輝こう
幸せを星の数ほど掴みたい
三分の化粧で変身ルンダ
真夏日の化粧くずれに気が滅入る
天の川星の思い胸に棲む
流れ星願ひ多すぎ間にあわず
七夕の星へ昔の人を恋う
悲喜秘めた化粧の下に燃えるもの
美しくなれば気にせぬ化粧代

東大阪市川柳同好会 森下

一本の傘を美人に貸したげる
耳貸してとんだお荷物背負い込む
無理聞いて一つのお貸しを預けおく
見込みあり出世払いの貸し
五人の子育ては母はきつかった
見通しの暗いノルマへ首を賭け
女心きついで下着もなんのその
盲点を突かれ空き巣に入られる
馬鹿正直が三代続いている家系
突き進む癖直らないまま米寿
さらさらの血で突き進む二度の職
延々と続く祝辞は聞いてない
時どきはおんなの口に負ける耳
勲章を貰って耳が遠くなる
臆夜に女の耳は風を待つ
聞き流すことにも慣れた輪に戻る

愛論報

鈴枝 信翁 久子 公美子 千代美 和代 智恵子 弘子 静江 正光 雄々 朝子 良子 度 萬的 太郎 雅文 美弥子 秀夫 シマ子 ばっは 克己 敏子 弥生 信治 湖風 緑

芳一の耳へ仏が寄り付かず
野仏の耳へ願いが吹き溜まる
愛論

川柳塔おっぱい吟社 木村あきら報

呑み込んだ一言胸に持て余し
身内から上がる火の手は防げない
車間距離保ち平和な嫁姑
妻強し子供全部を味方にし
再検査言われて自分見失う
一寸だけ折れると丸い輪ができる
女です白寿の母も紅を引き
再度会う話へ仲間西東
名も知らぬ人と付き合う露天風呂
情報は何処で入手か葉売り
世渡りの下手な男を妻支え
折れた矢もあつた射た矢もあつた
城跡に昔の栄華残る松
うまい事書いて効能信じ買い
薬石の効ありまして今生きる
初恵 ひかり いさむ 勝 輝夫 治延 放任 あきら かおり 吟笑 八重子 文仙 賢 太一 愛論

城北川柳会

神夏磯典子報

薄い縁亡き子に託げる夏巡る
幸せは我が作るもの夕涼み
母さんもボケたんで済む娘なら
世代違ひ話の輪には入れない
薄情の中で見つけた温かさ
ママ留守で至福の休みすこすパパ
慕われていると錯覚しています
ちよつとした好意を愛と信じる娘
あき子 春蘭 政子 美代子 喜美子 静枝 典子 達子

佳句地十選 (9月号から)

平田実男

近所のよしみも拒む断熱材
来し方を振り顧みて悔いばかり
子を思う親の情けは通じかね
伸びきったゴムです無理のきかぬ老い
薄味の中に溶け込む深い愛
羅漢仏薄汚れてる衣着る
錯覚と知つて天狗の鼻が折れ
薄情な噂を運ぶ風がある
キャンプには怖い話が面白い
うちの子に限り親は錯覚し
億ションの月見に勝る青テント
錯覚は忘れを隠す良い言葉
薄給は出生率を押し上げる
親という面子を捨てて子に習う
熱愛に照れているのは花時計
求芽 久留美 柳一 重人 はじめ 昭子 あやめ 高栄 順三 正 美智子 倫子 志華子 茂

口下手のアイラブユーに騙される
百本のバラへ女が狂い出す
いろいろとあって女に戻る紅
親の顔見たい子供が多過ぎる
並んでるただそれだけでいいペンチ
抜擢へ同期の白い目がささる
矢面の傷は男の勲章だ
肩書きはないが職場の生き字引
土壇場で他人の顔になる怖さ
ミサイルがその内相大ゴミになる
重人 典子 ひさ乃 順三 起世子 美代子 宏至 悦子 無限

柔らかく返す言葉を持つている
価値観を妻に合わせてから平和
あの噂やがて七十五日来る
人の世の樹海でいつも迷つてる
錯覚であろうが判定変えられぬ
子を叱る言葉に磨きかけておく

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

騙されて本気になったふりをする
新しい気持で進む華のとき
よくもつた夫婦茶碗の独り言
ストレスを溜めて大食いしています
夕映えに明日もいい日と信じよう
世に慣れて茶碗の音をききのがす
新しい靴に踵を噛みつかれ
喜寿すぎて夫婦茶碗にある渋味
思い出の茶碗のこして妻は逝き
絹の雲ふんわり天女の脱ぎ捨てか

竹原川柳会

時広 一路報

ひさ乃 集一 修 千里 史風 公一 聖子 惠美子 好栄 民子 伸子 はるみ かつ子 博利 清泉 白汀 蘭幸 千代美 千宏 汎美 淑子 敬子 慶子 不朽

大地の子ポテトチップスにはならぬ
海の青あの坂越えて夏帽子
スクリーンの中の魔法に魅せられて
つないだ手あなたと一緒にいる証
夕映えに生き抜く気力湧いた浜
浜の夏詩をちりばめた砂が飛び
浜までを歩くと決めた万歩計
浜だんな華やかなりしなまこ壁
八十路今健康体を至福とす
浜で聞く交響曲に救われ
たましいを抜きにときどき浜に来る
是か非かと波打ち際に立たされる
砂浜を歩けば砂が歌いだす
大物の期待へ浜の竿しなる

川柳塔打吹

大森 孝惠報

万年 笑子 千枝 史子 栄恵 菁居 房子 輝恵 孝枝 節夫 静風 幸子 半覚 一路 重忠 美美子 季芳 和子 善見 善江 義人 石花菜 幸子 三津子 たけ代 よしえ 和枝

おせちにはくろくろ光る煮豆あり
赤い糸千切つて一人旅に出る
千切れ雲見て湧き上る旅心
千切られた胸のボタンを抱いた春
週刊誌千切れた場所が気にかかる
弁慶が千切つて捨てて踏んだ岩
恋文を千切つて流す笹の舟
口実のねたも切れたかふて寝する
口実はどうあれ要はやる気ない
飲み口実暑さ寒さに雪月花
飲み会はドクターストップなんです
占つてあげましょうかと手を握る
口実と判つていても聞いてやる
うっとり口実を言う時もある
口実を入れた小箱が積んである
くろくろと書いて消えない罪と罰
くろくろと一筆書きの龍が舞う

京都塔の会

都倉 求芽報

貴恵 清 照彦 龍枝 玲子 玲坊 美知江 紀美恵 京子 公恵 禎元 芳光 博丈 克枝 節子 孝恵 益子 英子 藤重 満子 千莖子 鹿太 葉子 庸佑 諷云児 百合子

懸命に漕いでも所詮火の車
不景気に財布のひもも替えもなし
相応の財布にまかせつきのフルムーン
いつもかるい財布で楽隠居
風水で買った財布をスリ取られ
肩たたき券で膨れている財布
財布には小さな孫の手紙あり
夢少し財布に入れて旅に出る
いい返事しない財布に茶が冷める

川柳ささやま
遠山
可住報

声かけてもろて朝顔咲きました
ふる里を忘れぬように米送る
アテネ行き決まる競技の汗しほり
日の丸が無事でよかつたゲリラ戦
今年こそ抱負を蹴つて軽い肩
丹精の結果すぐ出る畑仕事
お誘いを蹴つて味わう孤独感
検診の結果で酒の味変る
ペレー帽墓標にかけるゲリラの子
ゲリラ客風のように来ては去り
交配の期待西瓜の結果待つ
ゲリラなどない母さんの温い膝
力瘤だけでは勝てぬゲリラ隊
タイムトンネル里のゲリラも喜寿米寿
友の会話はずんで横になる
雨が好き読みたい本が待っている
雨上り持ってた傘が迷い出す

尚士
ますお
欣之
萬的
メ女
篤子
郁郎
輝美
宏子
求芽

リフォームの結果未来へ夢つなく
札束を蹴つた涙を月が知る

あかつき川柳会
山本
柳昌報

絵も残り情けも残り行くはだか
雑草もお日さま惜しみなく照らし
消費税裸一貫にもかかり
九条は世界を照らす太陽だ
梅雨晴れの陽差し食る蒲団干し
四畳半裸になれる僕の城
太陽に背を向けている権力者
ゴムプール孫と楽しむ日曜日
太陽に身がまえている夏の草
男なら裸で居たいこの酷暑
気象でも豪雨と猛暑天異変
小商人身ぐるみはがれ店じまい
騒然と蟬の世となる寺の庭
水あびる孫は裸の王様だ
マネキンに好きな服など着せてみる
くじけずに歩こう明日も陽が昇る

川柳クラブわたの花
井尻
民報

菜園の幸とビールで上機嫌
哀しみを抱いた男の重い口
アンコール拍手が止まぬコンサート
急がない急がない老後ゆつくりと
踏み石に歩幅を合わす庭巡り
糸むすび出来ぬ子供が多くなり
機嫌よく寝てる子ババが抱き起す

朝子
可住
正坊
美花
柳昌
明水
美世子
富美
美智子
トミエ
康男
みつじ
幸子
芳香
まつお

耳傾けてないのに入りこむ噂
大家族さいこの人は足湯だけと
ベツにも機嫌いい日と悪い日と
あせらずに次のチャンスを待つ非凡
あつさりと言った本音に花の咲き
お出掛けもプラン空振り梅雨の空
余生等気にもしないで今が春
寝たきりの一氣に吐いた句点なし
今泣いた子のランドセル飛びはねる
日差し追うひまわり少し傾いて
涼しい風グラス傾け夏の宵
早起きになってしまつて老い楽し
カーナビは裏切られても怒らない
しみじみと女の愚痴を聞いてやり
その内に運が良ければ当たるだろ
短い夜の雨垂れシヨパン弾いている
バージンロード溢れるものを抱いている
お愛想に調子合わせる客の愚痴
身を削る苦勞実つて桜咲く
老いてなおプラス志向の夢を抱く
彼岸晴れお経の声も調子よく
夕ダ酒を飲まぬ流れに傾かん
曲り角なるようになり今を生き

岸和田川柳会
原 さよ子報

独りばち河鹿が祈るように鳴く
ちっけな親切うれしひとり旅
服装で少しは若くと老いあがき
かん電のしそうな服ですまんのう

ミツ子
きく子
宏枝
一風
きらり
欣子
幸枝
晴美
俊子
恭一
浩三
正純
一道
ますみ
敏男
まさこ
いつあみ
たか子
義明
春江
ダン吉
さよ子
あい子
力子

服装に心がゆれてまだ女

口下手の客に女将の聞き上手

口下手でメールでも仲のいい夫婦

口下手に生きそれでうまく古稀迎え

挨拶は下手だが温い人間味

達筆の読めない字より下手がいい

年忘れ蕩けるような恋したい

忘年の友とチャレンジ英会話

童謡で年忘れする老人会

忘年へ一秒ごとの針刻む

忘年会忘れる苦勞何もない

ロボットが幕切れにする近未来

地球にも幕切れ急かす核の影

幕切れが近いいろいろある首相

幕切れはお互い判を押しただけ

曾我さんで拉致幕切れしないのでね

父さんの一喝喧嘩幕切れる

割り切れれば生れも独り死も独り

ありがとう今幕切れの煙発つ

下手だがど母の料理にあきがこぬ

スキヤンダル小物ばかりで幕切れに

幕切れは荒城の月聞きながら

川柳大阪

高木 信酔報

乗り遅れ怒る客やら笑う客

新生児髪黒黒に親茶髪

九十の老兵もう戦争の話せぬ

ポケットの隅にかくれた生きる知恵

弘子

洋

基

房枝

ふみよ

みよ子

狸村

笑司

珠子

路子

照女

甚一

香代

守

東吉

盛之

穰一

ゆり子

蛙介

野添

錬太

呂万

初孫が老いにパワーをブレゼント

真つ直ぐの背筋に生きる男意気

ヒーローに会いたい孫の目が光る

泡立ちのコーヒー恋に迷つてる

回覧に笑顔を添えて燃します

いつも黒たまには赤で燃えてみよ

九条を守る確かな票がある

白黒をはつきりさせて蹴つまずき

弱腰を見抜きビヨンヤン我を通す

命名の文字黒黒と母子元氣

好き嫌い言えぬ時代が来るのかも

キャビアにも一粒ずつにある命

電車内化粧飲食無節操

キラキラと女ごまで翔ぶのやら

リストラの素足が踏んでいる砂丘

あじさいの雨に打たれている笑顔

わだかまりゆつくりとかす露天の湯

幸不幸重ねて刻む顔の皺

晴れ間みて飛び出し濡れる梅雨忘れ

パソコンが教えてくれる明日の地図

蕃敵と顔突き合はす梅雨の入り

回覧の超特急に留守があり

阿呆になれなんてしんどいことを言う

嫌いではないと言われているらしい

じいちゃんの血そっくりと女好き

人間ドック貧乏人に健康表

人間ドック知ってる尾骸骨

功

洛醉

柳司

柳弘

かよこ

柳昌

美花

重人

鉄心

青道

比呂志

笑風

喜楽

本蔭棒

朝子

章久

きよし

タカ子

欽三郎

利昭

ひろゑ

一風

ダン吉

まつお

信酔

和重

真つ当に生き太陽と差向い

太陽を描こうよ赤いクレヨンで

子供等が太陽だった頃の幸

太陽を味方今日も日傘を振る

太陽の機嫌伺う野良仕事

平和と太陽拝む八月忌

ありがとや氣も晴れましたお日様

太陽ですいつもニコニコおばあちゃま

充電の昼寝で亀に負けました

充電器なくしてからの旅ひとり

逆立ちをしたら充電できますか

逢うてますおんな充電してあります

過充電したのだらうか恋終る

好き嫌いなくて充電する脂肪

明日譲る席をきれいに拭いておく

嫁に譲るわたくしの位置風の位置

カルガモ親子に遠慮をしているドライバー

老いの意地譲れぬものを秘めている

譲り合う一線探る腹と腹

客無視の大銀行の譲渡劇

わたくしのルーツを知っている大地

ルーツ云々すればこの世は住み難い

夕立で拾った猫もあるルーツ

日本のルーツを覗く奈良飛鳥

騒動のルーツはあいつかもしれぬ

点と点ルーツ探しにはずむ秘

同姓を手繰れば元は一つかも

太陽を仰ぎ一度の運に賭け

わたくしのルーツにあった馬の骨

順子

智三

稚代

和子

和香

三喜夫

よしこ

英子

あき子

保州

克子

泰女

怜

朱夏

輝子

寿子

富美子

正博

東吉

三胡

三男

ダン吉

さち子

准一

和

美子

豊太

大輪

西宮北口川柳会

黒田 能子報

清々し朝の写経に本ひらく

やさしさに囲まれ本音いい出せぬ

丁寧ページをめくる借りた本

奨学金とバイト気丈な子に育ち

気丈でも夫の声が欲しい夜

先祖には気丈な人もいたらしい

母の日はせめて気丈の面をぬぐ

利巧にも気丈に見えて根は慌て

気丈とは頑固と同義だったのだ

賢妻で女史で気丈で留守ばかり

着メロに集中砲火冷たい目

帰宅して真つ先覗く冷蔵庫

冷たい水にかじか鳴き添うわざび沢

やんわりと妻にうるこを剥がされる

しがらみで綴るうるこは剥がせない

真実を隠して生きるうるこ持つ

姿も良いが鯛はうるこに格がある

妥協するためのうるこをはがして

見栄がありうるこなかなか落せない

うるこ雲にそれれ宿る仏たち

蟬しぐれ孫と散歩の夏帽子

夕立に協力しない雲もある

青春の群像陣にある書棚

親に子もそれぞれの夏夾竹桃

足ることを知ると人間弱くなる

生甲斐を今朝の暦に問うて見る

消火器が飾りになつている平和

どう動いても成るようししか成らぬ
たわむれに鉛筆で書くラブレター
精一杯生きたうるこは光つてる

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

みがかれた鏡の中を時ながれ

つゆ草のむらさきを着る今朝も雨

土壇場でルパンの貌になつてくる

子が解けぬクイズを解いて悦に入る

馬鹿になるほど塗り尽くす津軽塗

ライバルに一矢報いた日のお酒

休耕田お盆の前だ草を刈る

癌細胞人間様を食い物に

嫁がくる過疎は笑顔に包まれる

朝夕の肌をみがいて女です

大胆な嘘だと思ふあなたの眼

赤とんぼ草笛の音に誘われる

塾のない日の草笛がよく弾む

図書館で静かに脳の錆おとす

片べりの靴を磨いて今日も生き

混浴にやけた面は見当らぬ

人間をみがき続けた辞書た

弾まない毬をかかえる虞美人草

はたる川柳同好会

水野

黒兎報

同じ趣味めは平和な顔浮かぶ

バイバイの笑顔が浮かぶ休み明け

暗闇に浮かぶ灯籠原爆忌

古里の海に浮かんで苦い味

房子 正坊 光久

誠子

高洋子

あすなろ

きよし

順風

ふさふ

銀波

花匠

愁女

井蛙

千加子

ヒサ子

岳水

慕情

花峯

一花

荔

五楽庵

メ女

雪子

柳童

勇治

三七くは人も野菜もすり替える
涼しげな友の絵手紙かき水
謎を解く鍵もやっぱり金だらう
まだ妻の微笑の謎が解けず古稀

謎々で鼻高々の孫が居る

夜明け前自然が描くシルエツト

鈴虫の羽化を気づかう夜明け前

不眠症夜明けと共に眠り出し

飢えた子がいたまじ夜明け前の国

夜明けにはふる里へ着く汽車を見に

殊更の浮き沈みなく暮寿を越え

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

すいすいと伸びる長寿の棒グラフ

注文はせぬカタログをめくる午後

毒舌を笑つて流す苦勞人

夕飯は一人ゆっくり総入歯

無理せず下気儘に生きる果報者

毒舌の裏にやさしさ見え隠れ

朝採れを百円で買う無人店

えーとえーと何しに此処へ来たのかな

幽霊も浴衣着替える熱帯夜

食卓にもう一品は水中花

結局は夢だけ買ったはずすれくじ

空き缶を蹴りたい時もある六十路

いつの間にか買つたんかないそんな服

いつからか日本は汚れて金はある

長一 春代 螢柳 黒兎 祿骨 信男 祥風 久子 契子 正三郎 勝

義芳 イサミ 耕治 昭三

若き日も若き友あり古写真

浮き沈み下界に馴れぬ水中花

食べた事ないものを買う贈り物

威勢よい売子に財布つい緩み

誰かから見られて女らしいなる

根性を買われ僻地にとばされる

水中花の仕草かなしい盆おどり

毒舌にじつと耐えてる腹の虫

川柳塔鹿野みか月 土橋

義兄さんの魂だろう夢に出る

アテなまで魂こめて走りこむ

魂が見守っている暮らしぶり

蟬が鳴く五分の魂生きている

魂が今日も甘い美つけている

魂が出るな出るなという日照り

魂に希望の星を宿らせる

忠魂碑つわもの達の夢いずこ

垂直なままで私は桶に入る

風呂桶で内緒話の若天婦

使い捨てた戦士だったかリストラに

ウイंकを返すだけなら応じてても

議員さま少し熟慮が足りませぬ

熟すのを待たずガラスが味見する

仏さま熟したメロン香をどうぞ

炎天に袋の梨も実が熟す

旅立ちの機が熟すまで昼寝する

知恵を生む脳に涼風入れてやる

四苦八苦生んで期待と楽しみと

比ろ志

五月

孝一

正治

美龍

求芽

晴美

諷云児

螢報

八重子

かおる

保子

みどり

永子

孔美子

公子

武子

小鹿

喜与志

弘子

茶子

はるお

幸枝

野草

睦子

完司

久枝

和子

とんぴ生み鷹を夢みる親のエゴ

と或る朝お悔み欄に生まれたり

簡単に生んでしまつてから悔いる

応援も球児も炎の魂となる

若さつていい魂さくらんぼ

デート中不意に携帯おんなから

魂がびつたり合つてきた夫婦

魂を抜いた桜が大往生

魂と話そうロソクの消えるまで

魂を磨いて次の世もふたり

魂が湧けるような日が続く

三幸川柳教室

疑いの火種を抱いて熱帯夜

不発弾抱いた女の大ジョッキ

疑問符を抱くと打てない句読点

抱いている夢が元気の素になる

ふるりの景色を抱いて風になる

大空を丸ごと抱いて酔う詩人

携帯を鳴らし行方を確かめる

無駄骨がごつごつ鳴つて困ります

雑音を捌き切れない耳が鳴る

五臓六腑悲鳴上げてる炎天下

退社ベル鳴ると良くなる血の流れ

笛太鼓鳴れば阿呆になりきろう

思惑へ鳴りをひそめている火種

骨董が確かに鳴つたような夜

咲くまでは鳴りをひそめている蕾

美容師のハサミが鳴つて夏姿

彩子

諷人

ひろこ

汲香

きみ子

くに子

みさ子

実満

節子

富久江

螢

登美代

章子

靖子

次根

イセ

美枝子

かずみ

昇

町子

千秀

清史

准一

みね

保州

碧

起世子

蓮ポンと鳴つて仏のメッセーじ

化石から太古の謎を垣間見る

生きた化石顧問になつてしがみつ

コンクリートに化石みたくの靴の跡

潮騒はアンモナイトの子守歌

陽が昇る化石の背を温めて

雨の日も絵手紙届くありがどう

絵手紙が匂の香りを載せてくる

郵便受けにポトリと落ちた不採用

一枚の葉書わたしを蝶にする

投函の音に決心つきました

普段着で行ける虎の子好きな局

男なら一筆箋で足る便り

駆け出しの一句ポストに拾われる

川柳塔唐津

仁部

四郎報

平凡に勝るものなし怠け癖

破談とは言わず蹴つたと言つておく

家で飲むお酒くらいは安いもの

神様が地上で競うから困る

一本の釘を利かせて三世代

とり入れた夏のさかりに秋風情

乾盃で元気を試す元会長

雨よりも風が気になる花見茶屋

岩美川柳会

石谷美恵子報

明日まで待つてあなたのために咲く

暑い暑い死に真似三日するか

朱夏

義平

武

公子

和子

信子

徑子

智三

さち子

純子

幸

豊太郎

八重子

水笑

高明

輝夫

蜂朗

勝朗

晴翠

實

四郎

正劍

一京

はるお

母さんの味付け真似てかぼちゃ煮る
人真似が過ぎて自分を見失う
人の真似しても個性は研けない
くしゃみした途端言い訳思いつき
赤ちゃんのくしゃみやママうろたえる
くしゃみ出た噂の種はたんとある
大柄な母が小さいくしゃみする
いつの日か非行の言葉死語になる
世の中を試しているか非行歴
自らが悟れば止まる非行の芽
テロ行為非行の跡が断ち切れぬ
卵を抱いて絶好調の日が続く
俺の子だ卵に目鼻とはゆかぬ
親孝行の約束はない卵抱く
茹で卵ひとつもらった負け戦
卵抱くふくろうの目に隙がない
コレステへ卵肩身を狭くする
卵にも意地があるのか壊れない
血のめぐり悪くなったか物忘れ
巡らした垣根の中にて孤独
血の巡りゆるめてきりん獅子になる
三回も巡りお化けと仲良しに
もと党首頭丸めて寺巡り
観光地巡り終ってコップ酒
殿と呼び姫と育てた子の非行

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

何糞を胸底に持つ顔の色
底のないお世辞だ軽い男だな

弘直
シマ子

公子
裕子
照子
静生
和枝
きみ子
圭一郎
陸子
孝男
かつみ
季芳
野節子
忠良
螢

敗戦といふどんな底にあった夏
ピンチには思いもよらぬ底力
隠蔽を許さなかつた底力
上流もどん底もなし自動ドア
いまかいまかと拍手待っている
生きすぎてあちこちの底見てしまふ
みんな拍手するので居眠りも拍手

南大阪川柳会

吉川 寿美報

妻だけに聞かす十八番のラブソング
カクテルの底に透けてる恋の歌
絶叫の恋歌ですな蝉時雨
故郷へ遠路の客となるお盆
遠路来て花野に出逢う時雨傘
中元がニューヨークから今届く
山頭火遠路いたわる冷そうめん
イラクよりメール届いて無事を知る
遠路はるばるありがたいお神水
お互いが妥協しながら遠い路
ひたむきな愛は遠路もいとわな
面目躍如さすが四番のホームラン
平凡に暮した老母の割烹着
面目を保つ旧家の女紋
面目を捨てて拾った愛に生き
吉野屋の面目にかけ売れまへん
平凡が不満で脱皮する若さ
平凡からいくら飛んでも抜けられず
平凡になぜ生きられぬ世話が好き
有頂天平凡どこかへ置き忘れ

遠野
重人
朝子
きらり
欣子
初太郎
憲太郎
更紗
なぎさ
叡子
志華子
三男
ひさ乃
シマ子
弘泰
章久
庸佑
直子
タカ子
千里

香住
加津子
欣史子
慶子
能子
あずき
喜美子

美肌への一念笑う紫外線
行者道念力落ちてる木の根っこ
六甲おろしの念力届くホームラン
子のため火中の栗もいとわな
念力が切れたなビール飲んで
念力にたより思わぬ落とし穴
念力のかかつた鍵を渡される
結論を急げば念力が剥ける
念力の届かぬ位置に砂時計
丸い絵が素直に描けて凡夫婦

川柳塔なら

坊農

柳弘報

掴み取りなら負けへんよ長い指
地平線見えない国は忙しい
あれ以来やんわり線を引いてます
若鮎の团扇涼呼ぶ京美人
躊躇する团扇に紅がくつきりと
いっぽつで掴み仲良く五十年
無事退院しつかり掴んだ妻の愛
弾み過ぎ明日は孤独になる手毬
話上手心を掴み離さない
線引きは此処らへんでと策を練る
命の灯やつと掴んだ三分粥
切り取り線過去の痛みにふれてくる
手術して追加の命贈られる
掴まれた腕からまわる恋の毒
子の主張一直線の的を射る
お隣の内緒話を聞く团扇
蛍呼ぶ团扇は甘い夢がある

頂留子
千梢
度
柳伸
ダン吉
萬的
たもつ
柳弘
雅文
寿美
蘭香
博一
ふりこ
秋泉
冬葉
千梢
絹子
春蘭
積子
あやめ
洋子
登美子
弘風
真理子
富子
茂雄
和夫

惜しみなく胸をはだけている団扇
沙羅の白ボトリ鬼籍へ追加する

丑の日は音が忙しい法団扇
旗持たすと一直線のお人好し

靡線を辿り少女の日に還る
ギリギリの線で妥協を迫られる

花団扇ゆかた美人と匂い立つ
朱を足してプラス思考に切り替える

盆おどろちわら二つが闇に消え
渋うちわ亡母の匂いを連れてくる

一直線走り続けている野望
掴んだら掴み返してくる命

夢一つ足して風船ひとり旅

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

朝顔は白ばっかりの独り棲み

盆施餓鬼トンボ飛び来て迎えられ

揚花火果てて矢つ張り一人ぼち

盆踊り踊るアホーで夏元氣

何処からも音沙汰もなく水を撒く

光りない一円玉に困った日

炊き立ての飯は光って立ち上がる

夏の嵐わたしの語尾をさらってゆく

指はささら島の踊りは夜明けまで

心音が少し高まる人といふ

街炎暑自動ドアのぶつきらぼう

箸持ってカラヤンの真似酔っている

夢を見ていた片足の軽い痺れ

野良犬の背中で折れていた夕日

長生

國治

章久

一風

理恵

美千子

朝子

道子

隆盛

秋雄

愛論

柳弘

孝子

しづ子

正子

東園

幸子

昭三

千恵

勝巳

光代

年穂

久子

武庫坊

半蔵門

芳子

川柳ねやがわ

森

約束へはげしい雨が降ってくる

なっとくのいくまで研いで居る匠

大夕立天もすかつとしたか虹

焼肉の匂いがしたら鶴橋だ

七輪で焼いた秋刀魚は亡母の味

旅先で夕焼けの美を見せられる

サンマよりメザシが口に合うお酒

手の焼ける子供もわたしには宝

夕焼けへ童話と帰る肩車

男児生まれ親せき中が鯛を焼く

まっ白に私はきつと焼きあがる

自転車にふたり乗りしてからの恋

真つ黒になつて真面目なガードマン

定年が過ぎた自転車よう走り

自転車に若さきらく高校生

自転車もまた乙なもののビルの街

自転車がないのでお留守だとわかる

少年の自転車風を追いかける

豆腐屋の自転車鍋が追いつける

汚れ役引き受けて目を強くなる

泥んこに汚れる孫に目を細め

汚れるのがすめがねを拭いている

人生の汚れ落として遍路笠

汚しても叱らずはめてくれた亡母

睡蓮の夜は秘め事抱いて寝る

生まれつきの気品老いても失わず

あの方に逢いたい今宵の遠花火

茜報

恵子

頂留子

洋

九好

勇太郎

さち子

博泉

庸佑

一風

寿子

朝子

あやめ

かすみ

忠央

一炊

たもつ

度

栄二

仁清

亜成

三郎

茜

勲

弘風

高栄

ルイ子

とし子

二次会になると煙のように消え
大器晩成家の息子も夕顔も

長柳会

村上直樹報

汗淋漓男が香る梓の芽え

いい湯たぬきとりたつぷり老いの旅

亡母の香を消した憎めぬ防虫剤

ご先祖に線香上げる小さな手

ベットにもアロマセラピー流行です

崖ぶちで芳香放つ百合一輪

切り立った壁に張りつくクライマー

そよと吹く色香にゆれる六十路かな

母の香の残る着物のあたたかさ

虹を見るみんな優しい顔をして

虹の橋かけて逢いたい人がいる

しつけ糸切つて大事な人送る

レインボー掴めぬままの人生譜

指切りで恋が芽生えた夏祭り

食べ頃に狙い定めて切るメロン

ストレスを抱えた町に虹かかる

あの香りおしゃれなキヤリア積んでいる

介護つかれ癒してくれた虹の橋

陽と土の香りに戻るUターン

我が胸に小さな虹を抱いて老い

甲子園アルプス席に故郷の香

神様のセンスが光る虹の色

余生でも再び虹を追うている

しゃぼん玉一つ一つに虹の夢

切り取り線守つた母の温い膝

弘修

直樹

明信

三和子

たけし

マサ

ひろし

靖博

敬二

輝子

芳野

英美

良男

和代

武男

正一

史

和子

けい子

幸雄

富美子

正美

一慧

正子

淳司

潤子

ひとつ散りまた一つ咲く花の彩
美しく歳を重ねて熟れている
十秒で熟れて見せませす姫リンゴ
枇杷熟れて単身赴任の娘を憶う
三十娘躑が立つほど熟れている
恋ころ少女の胸に熟れてゆく
よく熟れてくると人間欲が出る

富柳会 池

我が青春トリス炭割り時代
降り続く雨に一夜の深情け
ひっぱった紐で己の首を締め
割愛と言う字に消えたわたしの句
涙割りのビールが語る挫折感
手の届く範囲の部屋で恙なく
液晶のテレビに財布ひっぱられ
大家族引つ張る妻よありがとう
割引きを半値につらい小商い
俺だけがハジキ出された新プラン
他人ごとでない他人が寄ってくる
紫陽花が重なり合った深い闇
鳩時計幸せそうな部屋に居る
真実を明かすに空が青すぎる
万華鏡覗けば丈夫笑ってる
自己管理部屋それぞれにある孤独
畦道でまだ古稀かいなと言ふ米寿
ひっぱれば頑固な男釣りあがる
殺割っていのちひとつを主張する
割愛の中に溜まっていくマクマ

森子報

義良 主詩朗 多賀子 茂美 松丘 町紅
淳司 鐘造 紅紫朗 冬虹 和子 亮幹 高鷲 深雪 政義 たかし シマ子 アキ 扶美代 奈保美 キミエ 順子 巳代一 夕子 初太郎 欣之

兄妹の如く色なき風の中
条件を呑んだ男の太い眉
下駄箱へ明日のヒントが置いてある
強がっているなど笑う雨の音
引ききわは汐のようにサラサラと
いろいろと在って備前焼の艶
キッチンテレビがテロを皿に盛る
末席は加減乗除の余り風
ご苦労さん思いやりあるいい言葉
スイッチを切って黙殺するニュース

豊中もくせい川柳会 江見 見清報

プラスよりマイナスするとよいお人
やがてまた唇寒い日が来そう
心の戸開かぬままに秋に入る
熊野道秘仏をおがむ御開帳
傷ひとつ付けぬ言葉が見当らぬ
泣いた分だけ負けん気がとりもどす
口答えやがて罍が身にかえる
風鈴も真実な夜の缶ビール
もう一人産まねばならぬ日本人
清流に裸足をしばし遊ばせる
ともだちにいつはいプラスもろてます
雑学にたけていながら世にとくとく
戸を開ける音もそれぞれ長女次女
贈られたバッグ他人の顔をする
あきらめの隅でやがても同居する
何時までも明日は待たない宝物
山裾の足湯はっこりラムネ飲む

春蘭 信子 鬼焼 萩乃 鹿太 ひろこ 哲史 森子 宏至 奏子 玲子 禄骨 正坊 宇乃子 石舟 都代子 幸雀 尚士 タミ 重人 萬的 メ女 満寿巳 求芽 久太郎 巴子

我が家には亡母と私の鯨尺
二番風呂やがては世話になる弱み
七五三やがてこの子も恋をする
目がきれいな砂漠の国の裸足の子
生計にプラスにならぬことが好き
倉吉川柳会 竹信 照彦報

初恋の人も白髪のお婆さん
初孫に目尻を下げる怖い父
最初から聞いていたなら参加せぬ
初ものは何時も女が試食する
音なしの構えで食べる初メロン
畔草を刈って初穂を待つ酷暑
嫌うけど水母が俺に寄ってくる
好き嫌いはつきり言えば首が飛ぶ
トネルで後ろに迫る十トン車
嫌な事は半分だけ目をつぶる
好き嫌いの時の流れが変えている
死神に嫌われ樹海から戻る
妥協癖とても嫌いなつむじ風
嫌つたらあかん爺さまドル箱だ
おんぼろの恋は時効してしまふ
おんぼろのうしろ姿は親父なり
おんぼろの辞書が手元を離れない
おんぼろの政治立て直すのは誰
世代間おんぼろなのよ迷い道
おんぼろの社宅で産湯男の子
おんぼろの家が一番寛げる
おんぼろになつても恋はしたいもの

和香子 則彦 寿美子 千津子 見清 泰輔 悠子 京子 季芳 玲子 照彦 重忠 西喜美子 よしえ 勝誉 十三男 茶子 忠良 かつみ 螢 次男 和枝 (前)喜美子 賀寿恵 和子 睦子 きみ子

発見順だったビタミンABC

大自然のビタミン切れが大暴れ

母さんの献立いつも赤青黄

ビタミンHが前方歩いてる

汗字恥かいてビタミン用はない

ビタミンが必要なのでキスをする

ビタミンB足りて脚氣を耳にせぬ

夏畑ビタミン源がバテている

川柳さんだ

北野 哲男報

風鈴の音色が知らず今日は幸

へっぴりんの魅惑のワルツ永久にあり

風呂上りオンザロックで月を愛で

朝刊の水室の記事に朱線引く

背く子の氷を解かすはめ言葉

ヨソ様とアテネ五輪で眠れない

愛されていたい割りには突っかかる

予想すら出来ぬ老化について感う

セミの声ひとときわ高い原爆忘

雨傘の所在なくしたこの猛暑

いつまでも若いつもりは盆踊り

歳よりは若いと言われる歳になり

川柳ふうもん吟社

杉本 孝男報

省エネをせねば地球もやがて死ぬ

便利さと省エネ針が釣り合わぬ

つぶてより痛いクールな目に射られ

高い鼻少しクールに見えないか

おふくろの背に省エネと書いてある

玲坊

康子

酔芙蓉

石花菜

萩江

修

日出子

祐子

開子

順子

雅司

歳子

章子

房江

忠

婦美子

正和

千代

朋月

哲男

どの色で夏の命を燃やそうか

クールだが人の情けは知っている

汗かいた割りにはゆとり出来もせず

殺された家族に時効などはない

両の手に殺した怒り握りしめ

省エネとスキンスリップの二人風呂

北向きのクールな色で和んでる

省エネの種が地中に寝てござる

ほっとする場所に殺気は芽生えない

真赤なバラは殺し文句を抱いている

母さんはいいつも陽気な答え出す

モナリザのクールな笑みは真似できぬ

太陽に今日も元気でもらい風呂

月あかりクーラー消して夕涼み

クールな女なかなか弱音吐いて来ぬ

汚さないように涙も汗もこぼさない

省エネと言わない母の処世術

パソコンが仲違いして殺気生み

家中の要らぬ電気を消し歩く

言い負けてクールな味の酒を酌む

お人好し殺し文句にほだされる

省エネの愛はしっかりと見破られ

見直そう夜になったら寝ることだ

兄弟がクールになった遺産分け

忙殺をされても一句先ず捻る

むらくも川柳会

毛利

里の家暑さ忘れる青田風

情報の海で自分を見失う

三津子

朋恵

一京

昌鼓

富子

義徳

善夫

志げ緒

一粹

一瑠

春名

益子

房江

喜美子

茂登子

螢

喜子

初江

良子

秀夫

宗明

圭一郎

俊典

毅

孝男

幸報

清吉

この猛暑熱風を受けて息止まる

夕顔に今日の暑さを癒される

去年より暑いじゃないかとセミが鳴き

ひまわりも暑さに負けて熱中症

クーラーを頼り暑さに負けられぬ

暑いですわそれが毎日合言葉

暑かった昼間忘れて生ビール

いつ来ても人情深い里がある

音痴でも楽しく歌う老人会

日本の国技は相撲元氣出せ

手も足も出ないパソコン孫がやる

文明のパソコン少女を悪の道

鯉のほり五月の空に悠々と

ぜんまいがの字曲りに本根出す

性格がわからぬままに貝になり

カタカナの花の名思い出されぬ

川柳塔おとり

西原

艶子報

体温を越える猛暑に今日も耐え

戦争は駄目です千羽鶴の声

猛暑でも雑草だけがすくすくと

風鈴は軽く猛暑をもてあそび

一歳児駄目といつても泣いて勝つ

しあわせの隣に住んでふとん干す

駄目なときついで運を生かさず

野菜つくり猛暑のために駄目となる

このボクも干せば旨みが出る男

校則が駄目といつてる細い眉

観光地猛暑も客がやってくる

彰

克子

美保

安男

明朗

定子

英男

恵美子

八重子

ます美

昭子

喜美子

ふさえ

信夫

由多香

風花

道子

一弘

富貴子

紀子

知恵

松枝

真一

和子

小生

蟬の声を干して夕焼ける
猛暑には化粧くずれが気にかかる
胃カメラが駄目だと論ず酒たばこ
愛一途駄目な男を釣り上げる
大ジヨッキ一息に呑む玉の汗
今日の汗干すハンカチに夢を抱く
情熱も三十八度越えている
蚊も蠅もふらふらしてゐる
金運は駄目だと手相言つてゐる

川柳藤井寺

高田美代子報

ふと気付く平凡と言う宝物
ブレゼントガラス玉でも宝物
名も財も無いが真面目が宝物
お静かに昼寝してます宝物
自菌二十これが傘寿の宝物
努力賞これが私の宝物
ほどほどの幸せで良い母達者
夏雲に誘われ派手な浴衣買う
一日がきれいに終わる茜雲
ヤッホーとまだ血が騒ぐ雲の峰
情念の雲が流れる炎を抱いて
雲海の上は目映ゆい青い空
雲行きがあやしい時の回れ右
幼な子の心のような白い雲
ベストセラー最後は雲の下で読む
雲つかも捜査へ耳よりな知らせ
あの雲の奥へ奥へと好奇心
ふとところに虎視たんたと抱く野心

登美 雄々 黙光 以和万津 舍人 清子 幸次郎 艶子 喜代子 光男 淳司 耕策 かつみ アヤ子 春蘭 雅枝 栄一 みつこ 登造 登志子 悦子 ヨシ枝 弥生 庸佑 絹歌 龍一

ふところをまた狙われた子の帰省
ふところの焔が謀叛考える
ふところに夜と戦うかくし玉
ふところの中で錆びてる正義論
ふところの風が止まった終の街
何着ても素敵に見え好きなきなひと
合併案選手フアンは蚊帳の外
賽銭の額を神様見ないふり
騙されて生きてみようかふところ手
価値観が違つて粗大ゴミになる
ふところが寂しくなるよ奇数月
何とでもおつしやいオホホホと笑う

川柳エスポ

山本 三郎報

アテネへの夢かなえたるド根性
熱帯夜夜半に起きてビール飲む
曽我さんの人生行路願う幸
約束は言葉に出せば忘れない
友からの暑中はがきで涼風を
沈黙に心の揺らぎ悟られり
水芭蕉僕にもあつた冬ソナタ
枝豆と梅酒さままだ花咲かれ
朝顔の観察いまだ花咲かず
織姫もせめて逢いたや年に二度
青いバラ見るまで欲しい命の火
老いたとて顔は表札ヒゲを剃る
健康法どれがきたいか分からない
男のピアス女へ何を主張する
神の名で刃とぎさう悲しい世

惠勇 重人 一知 瑠美子 扶美代 志洋 史郎 いさお 昭子 桂子 誠良 美代子 美さと 三郎 ゆき子 文好 一歩 えみ子 一幸 はつよ さち子 任宥 とよ子 団地 三代 さとし 一炊

元氣出せ入道雲の力こぶ
考えを変え爪に火を灯さない
しつかりと九条を読む原爆忌
五色の輪映えて世界が友となる
石一つ投げた波紋が渦になる
予定表川柳の日と書いてゐる

岬川柳会

八十田洞庵報

饒舌を沈黙の背がたしなめる
干支聞いてそれとなく歳思い遣る
葉包紙妻の背中にある愁い
黄金色黙つて頭上げて待つ
ほほつたう光の涙青春譜
とりまきのほせあがつてゐる不覚
新喜劇先頭がこけみんなこけ
沈黙の重りは軽く直ぐに溶け
沈黙と無視ほどつらい刑は無い
沈黙を守つて友の絆接ぐ
しくじつてつくづく人のあたたかみ
それとなく注意しておく軽い口
盆踊り青い目も輪に色添える
沈黙に慣れて主張を置き忘れ
短観は予想越えても肌不況
旗色を読む沈黙の目がこる

翠洋会

六吹 尚士報

八十路坂なかなか腰が上がらない
愛情も熱しやすいが中がない
中流と皆うぬぼれて日本人
星花 ルイ子 鈍甲 とし子 高栄 昭一朗 勇 悦子 重人 みやこ 桜琴 野添 蛙城 鉄男 俣子 孝子 扶美代 年子 里子 令子 茂平 洞庵 久峰 日の出 尚士

酒ありてこそ中秋の月賞でる
 かしずいた中に不穩な黒い息
 隙のないお人で筋をほぐせない
 ヨン様が好きで昼寝も仕方ない
 相談事 結局好きさなようにする
 人生の隙間を埋める和の一字
 好き嫌い捨てて選んだ職につき
 愛されてちよつと背いて蝶と舞う
 偏差値に背き鉛筆よく折れる
 ローン組みやつとの家に背かれる
 葉にもそむかれ生きるやるせなさ
 親の意に背く息子の肩の幅
 親に背き放浪の旅続けてる
 政治色出すからお断りします
 言い訳はしない背いたのは私
 背く子のSOSを聞いてやる
 歳と共に意固地になっている背骨
 寝もやらずおピンピクに老いも薄く
 ビーチパレーのビーチピッケルが蹴る地球
 善人の輪が和んでいる地藏盆
 声出さずすべてメールの青春譜
 ドイツ館第九で踊る阿波おどり
 ひととはひとわたしはわたし夏終る
 真ん中に西瓜を置いて揃う顔
 愛あれば辛い人生いきられる
 アテネ五輪集う世界の色模様

堺川柳会

河内 月子報

一張羅でさつそつとゆく喜寿の恋

惠 勇

世の中に無欲の勝利などはない
 うるさいが止むと心配する軒
 貞操の固い女にむだめられ
 色気なら傘寿の今も消えません
 嫌みだけさつさと言うて消えた女
 心配をさせて楽しむ親不幸
 泣く時も笑える時も欲しい酒
 半分つこどつちがいいか比べてる
 いく枚の皿を割つたら気が晴れる
 欲捨ててまあ息を吸うてます
 大男心配はないただの風邪
 童話では欲ばりなのがおばあちゃん
 なだめたりすかしたりして目の手術
 言い切つたさつき言葉気にかかり
 無欲にはなかなかぬ手を洗う
 母ちゃんが叱り父ちゃんなだめてる
 小さい欲大切にす小銭入れ
 筋力をなだめすかして朱夏を行く
 押し入れに欲のお化けが積んである
 心配の種に陽気という肥料
 母の日に一年分の機嫌取る
 心配事を探してしまふ癖がある
 命のはなし最前列で聞いている
 いつの日か咲いて見せると気概見せ
 息切れが財布の中で聞こえます
 通帳をみながら二人なだめ合い
 いっこうに咲く気配ない木にたずね
 カリカリしなやとわたしの影法師
 なだめれば油をそいだようになり

時雄 玄也 つづ 忠敬 公誠 龍三 好 像山 千代 潤子 冬虹 朋月 舞夢 日の出 篤子 さくら 半銭 文 深雪 五月 萌 泰子 扶美代 倅子 かりん 梓 喜子 みつこ 世紀子

くろほ川柳会 前坂なお美報

運転が上手い人でも事故にあう
 運勢が悪いので外出しない
 大の字になって廊下で昼寝する
 バランスが取れない板に手を添える
 観客を見下ろす花火笑っている
 火を付けておいて淋しくなる花火
 海原を泳ぐ魚の群に
 大海を泳いでみたい淡水魚
 お喋りの舌がもつれる歳になり
 戻らない天国を見てみたい
 敵味方わかつてからの板ばさみ
 不運だと嘆くのはもうやめにする
 運不運気持ひとつで切り替える
 線香花火はとりと好きな人が逝き
 決断がつくまで立ち泳ぎをする
 深呼吸してから妻の日記読む
 反応がみたくて花火うち上げる

約三カ月間の入院生活を終え無
 事退院致しました。

ご心配をかけ申し訳ありません
 でした。これから作句に専念する
 つもりです。

九月十日

黒川 紫香

柳界展望



○第51回八尾市民川柳大会は、8月22日169名の参加を得て八尾文化会館で開催された。当日の本社関係者秀句は次のとおり。

真実を握って神が寝てしまふ 両川 洋々

身の内の四隅に骨を飼っている 池 森子

愛情の浅瀬で座礁する少女 池 森子

○あかつき川柳会が実施した鶴彬顕彰全国誌上川柳大会は、43都道府県から546名の応募があり、このほど次の通り受賞句が決定した。
 〈あかつき大賞〉

榎木 清一

〈準賞〉

吉田 利秋・山川ゆうこ

〔佳作〕本社関係者のみ砂糖キビ畑を揺らす反戦歌 太田扶美代

過労死も戦死も母は許せない 穴吹 尚士

忘れたい忘れてならぬキノコ雲 小泉ひさ乃

なお、同会では、参加者1人1句抄も掲載した入選句集「あおぞら」を9月14日に発行、配布した。

○第5回四万十川川柳全国大会の受賞作は次のとおり

〈秀作賞〉

チャットより青き流れと対話する 出口セツ子

○川柳塔みちのくは平成15年の大賞を発表。8月号に掲載した。(本社同人のみ)

〈大賞〉

悲しくても悲しくても食事する 小枝ふささ

〔準優秀作第三席〕

しばらくは砂に埋まってるふるり 福土 慕情

○第12回和歌山県川柳大会

は9月5日、209名の参加で開催された。当日の本社関係者の秀句

脈止めて生き返りたい百年後 三宅 保州

おかしさを配るピエロの目が濡れる 西口いわゑ

機が熱すふつつ燃えるものがある 岩佐ダン吉

▽表 彰△

〔黒川紫香氏(相談役)は尼崎市武庫地区最高齢者として、9月10日武庫地区会館で表彰を受けた。〕

▽講師並びに選者変更△

〔各カルチャーセンター講師が、橋高薫風名誉主幹から次の通りに変更された。〕

●NHK大阪文化センター 河内 天笑

●大阪産経学園 奥田みつ子

●NHK臨空文化センター 河内 天笑

●毎日文化センター 木本 朱夏

新同人紹介

毛 利 幸

— 明朗・秀子・瑞枝推薦

木 下 敏 子

— 希久子・美籠・尚士推薦

川柳塔のぞみ10月句会

日時 10月26日(火)

会場 13時から 人形町区民館

電話 03-3668-5537

課題 (選者未定)

「月」 各2句

「ころころ」 各2句

「斜め」 1句

「自由吟」 1句

投句 10月25日まで

投句・連絡先 80円切手3枚 千193-0832

31-3 八王子市散田町2-1 播本充子宛

9月7日の本社句会は、台風接近のため中止としました。
 連絡の行き届かなかった方には、お詫び申し上げます。

川柳塔社(句会部)

●よみうり文化センター天満橋校 前 たもつ 朝日カルチャー

西出 楓楽

□山陽新聞山陽柳壇選者は、薫風名誉主幹から西出楓楽副理事長に変更(586回から)

▽御芳志御礼△

□小糸昭子さん(同人・大阪市)から、80周年記念大会お祝として金一封拝受。

▽同人動向△

□みつ子副主幹ほか2名は川柳塔のぞみ8月旬会出席のため、8月25日東京行。
□天笑主幹・みつ子副主幹ほか3名は9月5日の西日本川柳大会出席のため、岡山県弓削町行。

▽訃報△

□堀江光子さん(同人・寝屋川市)は、8月14日肺炎のため逝去。8月16日南水苑公民館での葬儀には柳友多数参列。88歳(116頁参照)
□井伊よし子さん(同人・

井伊東吉氏母堂、8月26日逝去。96歳

□ふあうすと川柳社前主幹藤本静港子氏は、肝臓病のため9月4日逝去。81歳。平安祭典神戸会館での葬儀には各柳社から多数の参列者が見送った。

▽訂正△

9月号P11上段10行目と中段8行目、朴念人↓朴念仁 P15下段18行目、丸坊頭↓丸坊主 P55上段5行目、看護婦↓看護師

常任理事会(9月7日)出席者14名 ①80周年・まつりについて、準備の確認・作業日程決定 ②六賞決定者連絡方法、花束の段取等 ③川柳塔合祀祭に関して総務部から合祀者人数は9名(うち同人6名) 11月13日実施 ④各部から同人2名承認、その他次回常任理事会(臨時) 9月27日(月) 13時アウェイナ大阪

平成16年度高野山合祀法要
於高野山大霊園

日時 11月13日(土)雨天決行
集合場所 南海電車「なんば駅」
3階中央改札前
集合時間 午前9時30分(時間厳守)
9時50分特急高野5号に乗車
会費 5000円(交通費・昼食込み)
申し込み 10月10日までに本社事務所宛
○別の交通手段で参拝される方は、その旨川柳塔社へご連絡の上12時までに会場へ直接お越し下さい。
高野山大霊園川柳塔碑前(奥の院下車)
☎0736-56-2966
○遠方の方で宿泊希望の方はお申し出下さい。
○帰りは15時32分高野8号乗車、なんば着17時2分の予定

合祀者(敬称略)

垂井千寿子・二宗 吟平
楊井 二南・梅田 宣司
堀江 正朗・西田柳宏子
木村 正剛・林 はつ絵
堀江 光子

第19回国民文化祭 ふくおか2004

～飛梅に乗って広がれ 文化新時代～

川柳大会(入賞発表、表彰式、当日句、選評)

11月13日(土)10時30分～15時30分

柳川市民会館

「白」(宮崎)間瀬田紋章 選

「揺れる」(兵庫)大西 泰世 選

「棘」(鳥取)新家 完司 選

第二次選者(事前投句・当日投句共選)

岸本 吟一・鷹野 青鳥

吉岡 龍城・今川 乱魚

齋藤 大雄(順不同)

合同大会(上位賞の表彰式、記念講演会)

11月14日(日)10時～12時

大宰府中央公民館

賞 文部科学大臣奨励賞、国民文化祭
実行委員会会長賞、福岡県知事賞
ほか多数

問い合わせ先

第19回国民文化祭柳川市実行委員会事務局

〒832-8601 柳川市大字本町87-1

TEL 0944-73-8111 FAX 0944-74-5545

主催 文化庁・福岡県・福岡県教育委員会

柳川市・柳川市教育委員会

(社)全日本川柳協会ほか

句会名	日時と題	会場と投句先
城北川柳会	16日(土)午後1時締切り 失う・マイク・色・自由吟	神徳会館 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
岸和田川柳会	17日(日) 正午から 第54回岸和田市民川柳大会	9月号(P.52参照) 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川呂万
東大阪市川柳同好会	17日(日) 正午から 第38回東大阪市文化祭 第32回市民川柳大会	9月号(P.99参照) 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
川柳藤井寺	17日(日)午後1時から 指・いちまい	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公園1-105 高田美代子
岬川柳会	17日(日)午後1時半から 伴・ひびく・注意・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳ねやがわ	17日(日)午後1時半締切り 突然・配る・多分・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい川柳会	18日(月)午後1時から 少女・グラス・やっぱり 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
高槻川柳サークル卯の花	21日(木) 正午から 効く・味覚・鎖・手拍子 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1031 高槻市松ヶ丘2-8-9 上砂真笑
川柳クラブわたの花	22日(金)午前10時から 溝・沈む・一生・バランス	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
はびきの市民川柳会	24日(日)午後1時から 根気・かたかた・モデル 「近い」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳ふうもん吟社	24日(日)午後1時から 紐・ゴシップ(特ダネ) あの人	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京都塔の会	25日(月)午後1時から 法・互い・時代	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔みぞくち	25日(月)午後7時半から 血・幕・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南大阪川柳会	27日(水)午後6時から 勇・大台・空手・切紙	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

10月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
堺川柳会	10月15日 締切 第31回記念堺まつり協賛 紙上大会	10月号 (P.56参照) 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼崎 いくしま	1日(金)午後1時から 着る・表・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	2日(土)午後1時から 打つ・台・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉 川柳会	2日(土)午後1時から 母・緑・威(おど)す	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 わかやま	3日(日)午後1時から レコード・平然・偉い 「も(助詞)」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川柳塔 唐津	4日(月)午後1時半から 算数・うろたえる・ラスト	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
川柳塔 なら	7日(木)午後1時から とかく・戦・体裁	奈良市立中央公民館4F (近鉄奈良④出口歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
川柳塔 打吹	9日(土)午後1時から 夢中・しくしく・刻む	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博丈
川柳塔 まつえ	9日(土)午後1時半から 街角・音頭・覗く・帯	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島松丘
川柳塔 みちのく	9日(土)午後4時から 口・切る・にんまり	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
八尾市民 川柳会	11日(月・休)午後1時から 足・食う・産地・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室(近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
西宮北口 川柳会	11日(月・休)午後1時から 積る・教える・カタログ 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南西出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ
ほたる 川柳 同好会	12日(火)午後1時から 机・芝居・折る	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール 蛍池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
尼崎 尾浜 川柳会	12日(火)午後1時半から 夕陽・親切・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太

編集後記

☆六賞受賞者の皆様、おめでとございませう。

☆7月に皆さんのお手元に届いた合同句集「川柳塔」の読後感想を、3人の方に執筆いただいた。(88頁) 傘川柳本社の岩井三恵氏は、400字詰原稿用紙12枚になる力作である。柳界きつての名文家としてつとに名高い氏は、15075句を読破

の上で執筆下さったという。途中作者について、年齢や柳歴などの問合わせが何度かあった。名文には入念な調査の裏付けがあることを再認識し、編集に携わる者として拾を正さされた。

☆子供たちの魚嫌いの57%は「骨がある」ことによる。そのため学校給食用に、中国で骨抜き作業をしていると聞いた。我々が

子供の頃は著の先で一所懸命に骨を取った。うまく取れなくて喉に刺さると、目を白黒させながらご飯をおかずを、嘔まずに飲み込んだものである。このように魚の骨を取り、小刀で鉛筆を削り指先を鍛えた。

☆先頃の新聞記事によると、子供をターゲットに、骨ごと食べられるカレイの空揚げ、サバの煮付けが発売されたという。なんと近頃の子供は甘やかされているものよ、こんなことで子供の将来はどうなる！と老婆心が燃えてきた。

☆しかし、落着いて考えてみると、最近の指は携帯やパソコンのキーを打つ役目にとつて替ってきたのだ。それに、骨ごと食べられる魚は、骨を抜いたものよりカルシウムが10〜20倍豊富なら高齢者にとつても有難い。早速食べよう。(ふ)

ひとこと

ユーモア句は如何

平成十年春、ユーモア川柳に興味を持ち、退職後の楽しみに川柳を習い始めました。

何の知識も経験もなく、まだ自分の川柳観が掴めないまま、平成十二年九月初心者はかり六人で「川柳さんだ」(メダカの学校)を立ち上げ、現在四十人近い会員と楽しい例会を開いています。その中には大活躍の人もあり、気をよ

くしています。

サラ川、時事吟を見て入会する会員は「笑のある句」との出会いや、作句に期待が大きく、ユーモア句の少ないことを指摘されることがあります。

川柳ブームと言われる今、会員減少と高齢化を止めるのは、低きに落ちないユーモア句ではないでしょうか。川柳塔誌にも笑いのある句の欄は無理ですか。

(北野 哲男)

○去年、白内障の手術をしてその間すっかり深夜ラジオのお世話になっていた。その頃はラジオ欄を見て今日はあるとこれと、分別して聞いていたが、今は虜になってしまつてそれも専らNHK第一である。白状すると手をのばしチャンネルを変えたり、音量の調節が不得手というだけだ。

○十一時のニュースのあと朝五時までの内容をいう。二時の音楽時間帯タンゴ・シャンソンだ、三時の歌時間帯裕次郎だ、越路吹雪だというと思わずにんまりする。といつても白川夜船の時間が多々であるのだが……。○だが十一時台にローカルと結んで土地土地のお話を聞く番組があるが、お喋りは向こう様、アナウンサーは言葉少なく相手を話して精一杯相手を話してくれている。また、海外

(よ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（12月号）」

地名

市 県

姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

川柳塔 (8句)
水煙抄 (8句)
愛染帖 (3句)
茴香の花 (3句)

河内天笑選
奥田みつ子選
波多野五染庵選
政岡日枝子選

「算数」
「うろたえる」
「ラスト」

小白金 房子選
塩満 敏選
宗水 笑選

初歩教室 「やがて」 (3句) 三宅保州担当

12月号発表 (10月15日締切)

第56回 大阪川柳大会

とき 11月20日 (土) 11時開場
ところ 大阪市立北区民センター
(06-6315-1500)
(地下鉄「扇町」駅、またはJR環状線「天満」駅から3分)

会費 1000円 (発表誌呈)
宿題 (各題2句・13時締切・席題2題)
席題 木本朱夏・足立淑子 選
「強」 北川アキラ 選
「黄色いもの」 田頭良子 選
「穏やか」 堀江としを 選
「狩」 前田美巳代 選
「きつと」 三宅保州 選
「時事雑詠」 井上一筒 選

賞催 各題の秀句に大阪市長贈呈
番傘川柳本社・川柳塔社・川柳文学コロキウム・川柳グループ明暗・川柳天守閣・川柳瓦版の会
後援 大阪市

1月号 課題吟 「方」「ポスト」
「摺む」
初歩教室 「正月」

本社11月例会 8日(月) 午後1時から

兼題 「あっさり」「アングル」「風船」
「かわく」「こだわる」

第23年度 夜市川柳募集

第5回「激しい」 玉置重人選
ハガキに3句 10月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
(2) 愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限り、ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
(4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円 (送料84円)

半年分 五千円 (送料共)

一年分 九千八百円 (同)

二〇〇四年(平成十六年)十月一日発行

編集兼 発行人 河内 権治

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪府阿倍野区三好町一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 (06) 661-1691 四番

振替 〇〇九八〇一五 一三三六八番

鳥取県総合芸術文化祭

第28回鳥取県川柳大会

と き 10月24日(日) 10時開場・13時20分開会

ところ 倉吉交流プラザ二階視聴覚ホール

(倉吉市昭和町バス停徒歩一分)

兼題と選者(各題2句・席題なし・出句締切12時)

「未」 板尾 岳 人選(川柳塔社)

「来」 濱邊 淳選(時の川柳社)

「中」 恒弘 衛 山選(弓削川柳社)

「心」 白根 ふみ選

「織る」 森山 盛 桜選

「吹く」 谷口 次 男選

表彰 鳥取県知事賞ほか

会費 2000円(作品集・昼食呈)

欠席投句 1000円 9月30日締切、用紙自由、作品集呈

宿泊 倉吉シティホール 先着20名

事務局(投句先・お問合わせ先)

〒682-0823 倉吉市東町341-2

大森孝恵 方 鳥取県川柳大会実行委員会 宛

TEL 0858-2310098・0858-2214275

主催 鳥取県川柳作家協会・文化団体連合会・

鳥取県

後援 倉吉市・新日本海新聞社ほか(予定)

医療法人社団

ISO 9001 : 2000 認証取得

湯川胃腸病院

健康保険取扱

消化器科 (内科・外科)

放射線科

ホスピス

診療時間 月～金 9:00～17:00
土 9:00～13:00

電話 大阪 (06) 6771-4861(代)

<http://www.yukawa.or.jp>

〒543-0033

大阪市天王寺区堂ヶ芝2丁目10-2
JR大阪環状線桃谷駅徒歩3分